

## 第 1 部

アジアのリーダー都市ふくおか！  
プロジェクトフォーラム

## I. はじめに

将来像を検討するにあたり、切り口や、視点・論点になるのではないかと考えられるテーマを設定し、そのテーマに造詣が深い多彩なゲストを迎え、全11回のフォーラムを開催しました。

多彩なゲストに異なる立場から、課題と捉えている点やその解決の道筋、福岡市に抱く希望など、専門的な知識等に基づくご意見をもとに活発な意見交換を行って頂きました。

(53人のゲストが登壇し、延べ約1,100人が参加)

### 【各回におけるテーマとゲスト】 ※肩書きはフォーラム開催時点

<b>■第1回 「福岡市の未来を描くキーワード」</b>	
平成23年6月18日(土)	福岡市役所 15階講堂 参加者約200人
[パネリスト] 大塚 ムネト 氏 (劇団GINGIRA太陽's 主宰) 川原 正孝 氏 (㈱ふくや代表取締役社長) 後藤 太一 氏 (福岡地域戦略推進協議会事務局長、福岡アーバンラボラトリー代表社員) 久留 百合子 氏 (㈱ビスネット代表取締役) 山崎 朗 氏 (中央大学経済学部教授) [コーディネーター] 中川 茂 氏 (西日本新聞社報道センター本部長)	
<b>■第2回 「生物多様性とまちづくり」</b>	
平成23年6月25日(土)	福岡市美術館 講堂 参加者約80人
[パネリスト] 浅羽 雄一 氏 (㈲ウィロー代表) 小野 仁 氏 (日本野鳥の会福岡代表) 半田 孝之 氏 (福岡市漁業協同組合伊崎支所) 矢部 光保 氏 (九州大学大学院農学研究院教授) [コーディネーター] 朝廣 和夫 氏 (九州大学大学院芸術工学研究院准教授)	
<b>■第3回 「アクティブエイジング~いくつになってもいきいきと暮らせるまち」</b>	
平成23年7月2日(土)	福岡市立婦人会館 9階大研修室 参加者約70人
[パネリスト] 伊原 ルリ子 氏 (㈱晴天代表取締役) 小川 全夫 氏 (福岡アジア都市研究所副主幹研究員、九州大学名誉教授) 福嶋 明子 氏 (FuAri communications 代表、(元ぐらんざ総研所長)) [コーディネーター] 十時 裕 氏 (アーバンデザインコンサルタント取締役、 (元福岡市NPO・ボランティア交流センター長))	
<b>■第4回 「おもてなしが育むまち」</b>	
平成23年7月9日(土)	博多小学校 表現の舞台 参加者約70人
[パネリスト] 井手 修身 氏 (NPO法人アイデア九州・アジア代表) 上田 啓蔵 氏 (はかた部ランド協議会議長) 山下 真輝 氏 (㈱JTB旅行事業本部地域交流ビジネス推進室) [コーディネーター] 帆足 千恵 氏 (財福岡観光コンベンションビューロー)	

<b>■第5回「人をひきつけるクリエイティブなまち」</b>	
平成23年7月16日(土)	福岡アジア美術館 8階あじびホール 参加者約100人
<p>[ゲスト]            伊藤 総研 氏 (伊藤総研(株)代表)            江口 カン 氏 (KOO-KI代表/映像ディレクター)            藤 浩志 氏 (藤浩志企画制作室/美術作家)            [コーディネーター]            伊藤 敬生 氏 (九州アートディレクターズクラブ代表)</p>	
<b>■第6回「スポーツとまちの元気」</b>	
平成23年7月22日(金)	福岡アジア美術館 8階あじびホール 参加者約80人
<p>[パネリスト]            伊藤 清隆 氏 (リーフラス(株)代表取締役社長)            小林 至 氏 (福岡ソフトバンクホークス(株)取締役)            下田 功 氏 (アビスパ福岡(株)代表取締役専務)            [コーディネーター]            森本 博樹 氏 (西日本新聞社スポーツ本部長)</p>	
<b>■第7回「人が仕事を生み、仕事人が人を呼ぶ」</b>	
平成23年7月28日(木)	アクロス福岡 円形ホール 参加者約90人
<p>[パネリスト]            安藤 貴文 氏 (PicoCELA(株)ソリューション営業部&lt;九州大学発 IT ベンチャー&gt;)            池内 比呂子 氏 (株テノ. コーポレーション代表取締役社長)            柳瀬 隆志 氏 (嘉穂無線(株) (グッデイ) 取締役営業本部長)            [コーディネーター]            坂本 剛 氏 (株産学連携機構九州代表取締役、九州大学産学連携センター客員教授)</p>	
<b>■第8回「都心のまちづくり」</b>	
平成23年8月7日(日)	福岡アジア美術館 8階あじびホール 参加者約120人
<p>◇第1部：基調講演            出口 敦 氏 (東京大学大学院新領域創成科学研究科教授、九州大学大学院人間環境学府客員教授)            ◇第2部：トークセッション            [ゲスト]            岩永 真一 氏 (NPO法人グリーンバード福岡チーム事務局長、福岡テンジン大学学長)            大坪 恵太郎 氏 (福岡地所(株)開発事業本部課長)            酒井 咲帆 氏 (株アルバス代表)            原口 可奈子 氏 (編集者・ライター/Wonderscope)            [コーディネーター]            出口 敦 氏</p>	
<b>■第9回「誰もが思いやりを持ち、すべての人に優しいまち～ユニバーサルシティ福岡」</b>	
平成23年8月19日(金)	アクロス福岡 円形ホール 参加者約100人
<p>[パネリスト]            張 愛 氏 (外国語翻訳、中国ビジネス支援)            西 政宏 氏 (福岡県立柳河特別支援学校英語教諭)            平井 康之 氏 (九州大学大学院芸術工学研究院准教授)            和栗 百恵 氏 (福岡女子大学国際文理学部准教授)            [コーディネーター] 定村 俊満 氏 (株ジーエータップ代表取締役社長)</p>	

■第10回「25年後のために～次世代の育成」	
平成23年8月27日(土)	福岡ビル 9階大ホール 参加者約80人
◇第1部：トークセッション「25年後の福岡を語る」 [ゲスト] 古池 梨紗 氏 (福岡雙葉高等学校2年生) 庄 善勇 氏 (九州大学大学院修士課程) 三船 正士 氏 (書家、九州大学21世紀プログラム課程4年) 楊 帆 氏 (九州大学大学院博士課程) [コーディネーター] 加藤 暁子 氏 (「日本の次世代リーダー養成塾」事務局長)	
◇第2部：トークセッション「次世代の育成」 [ゲスト] 栗栖 慎治 氏 (NPO アジア太平洋子ども会議・イン福岡専務理事) 中垣 量文 氏 (㈱全教研 常務取締役管理本部長) [コーディネーター兼ゲスト] 加藤 暁子 氏	
■第11回「人が集い、躍動する都市を目指して」	
平成23年10月30日(日)	福岡市役所 15階講堂 参加者約130人
◇基調講演 日本「再創造」～「プラチナ社会」実現に向けて～ 講師 小宮山 宏 氏 (㈱三菱総合研究所理事長、東京大学総長顧問)	
◇パネルディスカッション [パネリスト] 小宮山 宏 氏 鍋山 徹 氏 (㈱日本政策投資銀行産業調査部チーフエコノミスト) 野田 順康 氏 (国連ハビタット福岡本部 本部長) 中村 文香 氏 (九州大学経済学部4年) [コーディネーター] 大久保 昭彦 氏 (西日本新聞社 都市圏総局長)	

※ 第1～10回までのフォーラムでは、「データで語る福岡の今・未来」として、各回のテーマに関連のある福岡市に関する様々なデータを財団法人福岡アジア都市研究所専門研究員である山下永子氏にご紹介いただきました。

## Ⅱ. フォーラムの主な内容

### 第 1 回

### 福岡市の未来を描くキーワード

#### 1. 概要

- ▽タイトル 「福岡市の未来を描くキーワード」  
▽日時 6月18日(土) 15時00分開会/17時00分閉会  
▽会場 福岡市役所 15階講堂  
▽内容  
・市長挨拶(プロジェクトの紹介)  
・データで語る福岡の今・未来(福岡アジア都市研究所研究員・山下永子氏)  
・パネルディスカッション
- ▽パネリスト 大塚 ムネト 氏(劇団「ギンギラ太陽's」主宰)  
川原 正孝 氏((株)ふくや代表取締役社長)  
後藤 太一 氏(福岡地域戦略推進協議会事務局長、福岡アーバンラボラトリー代表社員)  
久留 百合子 氏((株)ビスネット代表取締役)  
山崎 朗 氏(中央大学経済学部教授)
- ▽コーディネーター 中川 茂 氏(西日本新聞社報道センター本部長)

#### 2. 提言内容、会場の様子

##### ◎パネルディスカッション

##### 「そこそこいい街」から「強みを発揮する街」へ

どんな街にしたいか「思い」の共有を 大塚氏	「一番になろう」がないのが弱み 川原氏
アジアとの「人の流通」が鍵 後藤氏	子どもを産み育てやすい環境を 久留氏
広域圏での機能という視点必要 山崎氏	多言語サービスに徹した街に 中川氏

(文中敬称略)

##### ■これまでの25年間

**中川** これからの25年を考える前に、これまでの25年間を振り返った上で、今の福岡市の現状に対する基本認識を教えてください。

**大塚** 福岡市の良さでよく言われるのが、山や海が近く、食べ物もおいしいこと。これを戦国時代の城に例えると、地の利で勝ってはいても、武将の力で勝っている感じがありません。それを含めて福岡大学の田村馨教授は、福岡市を「ラッキー都市」と呼び、今が「正念場」としています。もちろん、戦前、さびれていた天神にデパートや鉄道を造るなど、たくさんの先人の思いがあって街はできています。その思いの中に「流通」の武器はありますが、インターネットで自由に買い物ができる時代に、街の魅力は流通だけで大丈夫だろうか、と心配になります。



**川原** 25年前は、次から次に新しいイベントがあり、新しい事業が始まり、新しい建物が続々と建っていました。この間、福岡市は経済的に伸びて人口も増え、ずっと走り続けてきた25年間だったのでないでしょうか。

**後藤** 私は福岡が世界で一番すてきな街だと思い、8年前に生まれ育った東京から引っ越して来まし

た。当初はよそ者扱いされ、「お前に何を言っても分かるわけなからうもん」といった接し方で強烈な洗礼を受けました。今は、(行政、経済界などを含めた組織で、福岡の課題に対してビジョンを立て解決していく)福岡地域戦略推進協議会の事務局長をしています。この8年の間に、異分子を受け入れてみようという小さな変化は起きたけれど、大きくは変わっていないのでは。



**久留** 商業施設など新しいものがほどほどにあり、文化的な刺激がほどほどにあり、街の規模もちょうどよく、少し足を延ばすと自然も味わえ、とにかく福岡は住みやすいと感じます。また、小さな会社の経営でも、いい人間関係さえ築けばやっつけられる良さもあります。

**山崎** 36年前、博多駅に山陽新幹線が入ってきたのが大きなインパクトになったのでは。それまで広島が持っていた企業の支店などのターミナル機能を、博多が持つようになるという恩恵を受けます。最近九州から広島まで含んだ1700~1800万人の勢力圏を抱えるため、支店の格は名古屋より上という指摘も。また、この25年間で路面電車は地下鉄に変わって新幹線とつながり、博多港はすごい勢いで貨物量を増やし、都市高速道路は九州自動車道・太宰府ICとつながり、高速交通体系はほぼ完成。重要な交通結節点となっています。

#### ■福岡市の強みと弱み

**中川** 福岡市の強み、弱みはそれぞれ何だと思えますか。

**山崎** 地方都市では珍しく、高速交通体系のパワーが集中し、交通の便利さという強みから大企業が拠点を置いてくれました。しかし、それによって他力本願になりがちで悪い面が、弱みと言えるかもしれません。



**久留** 私は、福岡の街が女性の能力を十分活用できているかを問いたいです。年代別労働率の推移を見ると、30代くらいの女性が出産や子育てのために一旦、仕事を離れています。これがもったいないです。また、女性管理職のいる事業所の割合は9.5%しかなく、今春改選された福岡市議会の女性議員は62人中5人で8.1%にすぎません。将来、福岡の労働力がどんどん減る中、女性の能力をもっと活用しないと福岡の活力は出てこないのではないのでしょうか。

**後藤** 表裏一体のようですが、弱みは「世界とつながっていないこと」、強みは「世界に知られていないこと」と考えます。外国語表記の世界地図に福岡はまず載っていないだろうし、海外企業が東京、シンガポールなどにオフィスを出そうか検討する際、福岡はそのリストに入っていないと思います。一方、外国の雑誌で示された「世界の住みやすさランキングで10數位」という同じメッセージがずっと残り、(原発事故の対応などで)「日本は最近何をやっているんだ」と不信感を持たれる際に福岡は知られていないために意識されません。変なレッテルを貼られない点が強みと言えるのかも。

**川原** 強みは、よそ者や外からの企業が入って来るのを全て受け入れること。それによって新しいものがどんどん生まれます。けれども、福岡が「そこそこいい街」であるせいなのか、現状に甘んじてしまい「一番になろう」「トップを目指す」と思わなくなってしまうのが、弱みではないのでしょうか。



**大塚** 福岡は「そこそこいい街」「ほどほどいい街」と（地元の人）よく言いますが、「そこそこ」「ほどほど」って何でしょうか。かつて「天神に行く」は仕事に行く意味で使っていたのに、今では買い物に行くニュアンスが強いですよね。街は知らず知らずのうちに変化していきます。「そこそこいい」と安心していううちに、福岡の街の正確な状態をうっかり見過ごしてしまわないようにしないとイケません。

**中川** 私が思うに、強みは交通結節点として、製造業中心からサービス業中心の街づくりになったとたん、どーっと伸びたことでしょう。福岡都市圏は札幌、広島、仙台の各都市圏より都市機能としてかなり上にきており、三大都市圏に次ぐ位置を占めています。弱みは、「そこそこいい街」ゆえに、今のペースでやればいいやと思って危機感が芽生えないこと。福岡もいずれ高齢化し、九州全体の人口が大きく減るのに対して、海の向こうにはすごい勢いで成長する国があります。アジアの中で光り輝く都市にするには、何がしかの戦略と計画が必要です。

#### ■ 25年後の街のビジョンと実現に必要なこと

**中川** では、25年後に向けて、福岡をどういう街にしたいですか。そのためにはどんなことが必要だと思いますか。

**大塚** 福岡は劇団、舞台芸術などエンターテインメント性が高い街です。昔から福岡が芸所と言われたのは、芸能文化をみんなが支えてきたからです。ところで、若い人が福岡に来るのは、何かができそうなワクワク感をこの街に感じるからだと思います。そのワクワク感を受けて、例えばエンターテインメント分野で福岡からアジアへデビューする仕掛けをつくり、それを行政が支援することなどできないでしょうか。

**川原** 博多の人はこれまで、貿易でも中国にどんどん出て行きました。今は、外へ出て行く気をなくさせるぬるさが街にあります。このぬるさを熱さに変えて外に飛び出すよう仕向けないと、25年後の福岡は単なる「いい街」の地方都市で終わるのでは。また、福岡市が22年前から続けている「アジア太平洋子ども会議」には、世界中からおよそ計7千人が参加しました。あと10年、20年もすると、国や地域に戻った子どもたちが社会的に重要なポストに就き、それによって福岡の知名度が上がるのでは。その時、福岡の子どもたちが彼ら、彼女らと対等に付き合えるよう、しっかりした教育をしておかなくてはなりません。

**後藤** 都市の未来を考えると、人がどことどこで動いているかという「人の流通」がポイントになってくるのではないのでしょうか。森記念財団の都市戦略研究所がまとめた「世界の都市総合ランキング」の中に、世界の主な都市の空港間の人の流れを航空機の合計座席数で示した図があります。福岡空港は国際線ターミナルがあるのに、量的には大したことがなく、図でつながっているのは東京だけ。将来は東京だけでなく、他のアジアの“そこそこ”の都市との間に、多くの移動があればよいのですが。また、住みやすい街ということで行くと、評価が高いとされる南西アジア、北米の北西海岸、ヨーロッパのスカンジナビアの都市に続き、福岡も組み込まれていればいいと思います。高島市長があいさつで触れたように、例えば「環境」といった旗が立ち、福岡の街の個性を強みに変えて勝負できるとよいです。米・マサチューセッツ工科大学の石井裕教授の言葉を借りれば、これからの福岡の課題は、ビジョンをつくりそれを実現すると決める「造山力（ぞうざんりょく）」、冷静かつ合理的に戦略を描く「道程力（どうていりょく）」、それらの根底として、あえて出過ぎた杭になる「出杭力（でるくいりょく）」だと思います。

**久留** 福岡はまだ、「子どもを産み育てやすい街」になっていないと思います。それでもアンケートでは、「男性は仕事、女性は家庭を守る」のがよいとする考え方の人が随分減っています。家庭を持ち、仕事をしながら子育てをしたい人が暮らしやすい環境を、整えていくことが課題ではないでしょうか。



**山崎** 福岡都市圏は人口でみると三大都市圏に続く4番目です。ビールメーカーとして4番目にできたサントリーは、大手3社と戦うのに、安いビールやプレミアムビールなど、イノベーションを繰り返して、ようやく黒字になりました。先程から「そこそこ」という話が出ていますが、福岡の街づくりも、狙うところは何かを考えることが、すごく大事だと思います。

#### ■福岡市への注文

**中川** 最後に、25年後の街のビジョンをつくる福岡市に対して注文しておきたいことなどをお願いします。



**大塚** 街はそこに住む人たちの「思い」がなければ、続かないし変わりません。僕らが福岡の街をどうしたいのかという「思い」を、多くの人と出し合い、共有していきたいです。

**川原** 市民と一体になって祭りを活性化させたいです。

**後藤** 「国家が何をしてくれるかでなく、自分が国家に何をできるか考えなさい」というのが自分の主義なので、福岡市に何をすべき、とは言いたくありません。ただ、10代、20代の若い人が議論に参加していない「25年後の未来像」に、意味はないと思います。

**久留** 自分たちが主導的に街をつくっていくんだという気持ちが必要で、これがないと福岡は発展しないと思います。

**山崎** 30年後には北九州都市圏、熊本都市圏ともに人口は100万人を割ります。広島から西で都市機能やサービスが充実しているのは、福岡都市圏しかなくなる事態も出てきます。市民や市域という発想ではなく、1800万～2千万人という広域エリアの中で福岡はどんな機能を果たすべきか、という視点を、そろそろ入れた方がよいのではないのでしょうか。

**中川** コーディネーター特権で、私から市政へ望むことを一つだけ言わせてください。福岡を、多言語サービスをうんと徹底する街にしてほしいです。現在、日中間は年間約1300万人が行き来していますが、2015年には2600万人にするのが政府の目標です。するとその先の25年後には、東南アジアを含めすごい数の人が往復しているでしょう。その時に、福岡市が「コンパクトな街」だけでは売りになりません。タクシーやお店など多くの場所で簡単な英語、簡単な中国語、簡単なハングルが通用するようしておくのです。「どこから来たのですか」「いい色のものがありますよ」など。そうすると、「片言の母国語で話し掛けてもらいフレンドリーに対応してくれた」と喜ばれ、福岡が彼らの記憶に残ります。なるだけ多くの人が多言語を話せる街づくりが進めば、アジアの競争の中で、小粒でもキラリと光る街になるのでは。そうあってほしいです。

### 3. 資料

#### (1) パネリスト・コーディネーターのプロフィール

大塚 ムネト 氏 (劇団「ギンギラ太陽's」主宰)

1965年福岡県小郡市生まれ。劇団ギンギラ太陽's 主宰。全ての作品の脚本・演出・かぶりモノ製作・出演を手がける。地元でしか楽しめないエンターテイメントを追求し、地元の建物や乗物などを擬人化したかぶりモノをつけて演じる舞台は地元の共感を呼び、初めて演劇を見る人をはじめ幅広い層から支持を得ている

川原 正孝 氏 ((株) ふくや代表取締役社長)

株式会社ふくや代表取締役社長。ふくやは昭和24年、創業者川原俊夫(現社長の父)が日本で初めて辛子明太子を製造販売したメーカー。また、祭りをはじめ地域貢献活動にも力を入れている。自身も毎年中洲流から山笠に参加し、今年は総務の重責を務めるなど自他ともに認める”山のぼせ”。

後藤 太一 氏 (福岡地域戦略推進協議会事務局長、福岡アーバンラボラトリー代表社員)

都市地域プランナー。東京、米国西海岸勤務を経て、福岡に惚れ込み意を決して移住、さらに起業。天神明治通り街づくり協議会統括マネージャー。国際都市開発協会アジア地域代表理事。米国認定都市計画士(AICP)。

久留 百合子 氏 ((株) ビスネット代表取締役)

(株) ビスネット 代表取締役・消費生活アドバイザー  
福岡県生まれ。1975年津田塾大学学芸学部数学科卒業。専業主婦の後、福岡県消費生活センター相談員を経て西日本銀行入行。専門職として、消費者動向調査、講演などの仕事をする。2000年11月退社。'01年1月消費生活アドバイザーの資格を持つ女性3人で(株) ビスネットを起業。全国500名の消費生活アドバイザーをネットワークし、アンケート調査、モニター調査、懇談会、研修などをとおして、「消費者と企業のいい関係づくり」の仕事をしている。

山崎 朗 氏 (中央大学経済学部教授)

1957年生まれ。フェリス女学院大学講師、滋賀大学助教授、九州大学教授を経て、現在、中央大学経済学部教授。国土審議会政策部会委員、科学技術・学術審議会産業連携・地域支援部会委員、博多港地方港湾審議会委員。

中川 茂 氏 (西日本新聞社報道センター本部長)

1952年長崎県佐世保市生まれ。59歳。1975年中央大学法学部卒業、西日本新聞社入社。経済部、東京支社報道部、中国(北京)総局長、論説委員、編集局次長を経て2009年より現職。主に経済畑を歩み九州・福岡の地域活性化やアジア交流の分野で発言、評論活動中。



## 第2回

## 生物多様性とまちづくり

### 1. 概要

- ▽タイトル 「生物多様性とまちづくり」
- ▽日時 6月25日(土) 14時00分開会/17時00分閉会
- ▽会場 福岡市美術館講堂
- ▽内容
- ・データで語る福岡の今・未来
  - ・パネルディスカッション
- ▽パネリスト 浅羽 雄一 氏 ((有)ウィロー代表)
- 小野 仁 氏 (日本野鳥の会福岡代表)
- 半田 孝之 氏 (福岡市漁業協同組合伊崎支所)
- 矢部 光保 氏 (九州大学大学院農学研究院教授)
- ▽コーディネーター 朝廣 和夫 氏 (九州大学大学院芸術工学研究院准教授)

### 2. 提言内容、会場の様子

第2回フォーラムは6月25日、福岡市美術館(中央区大濠公園)で開かれ、「生物多様性とまちづくり」をテーマに、パネリスト4人とコーディネーターがさまざまな意見を交わしました。

#### ◎第1部自然観察体験

フォーラムに先立ち、日本野鳥の会会員による自然観察体験も行われ、大濠公園周辺の野鳥や植物などを直接見たり触れたりした参加者は、身近な生きものや生態系への関心を高めていました。



#### ◎第2部パネルディスカッション

##### よりよい環境を次世代へ手渡すために

参加したくなる仕掛けが必要 浅羽氏      自然の財産活用し「環境教育都市」へ 小野氏  
生活排水を再生し“里海”づくりを 半田氏      日本初の「環境オフセット」制度を 矢部氏  
自然環境の賢い利用を 朝廣氏

(文中敬称略)

#### ■自己紹介

**朝廣** 今日、「生物多様性」をキーワードに、生態系サービスを生かした将来のまちづくり像のアイデアを出していただく機会です。コーディネーターとして、初めに私が考える二つの方向性を示すと、①人と生きものの集うまち・里・森・川・海の保全②子育てのように生きものや環境を育む文化一です。まず、各パネラーから自己紹介をお願いします。



**矢部** 私は「農林地の持つ多面的な機能」を中心に研究してきました。水田や畑は農産物を作るだけでなく美しい景観もつくり、森林は二酸化炭素を吸収する働きもしています。それらの機能を経済的に評価することによって、行政などが政策などで意思決定する際に役立ててもらえると思っています。



**半田** 私は博多湾で底引き網を主体とした漁業を 38 年ほどしています。20 数年前から毎日、底引き網に入ってくるペットボトルやビニール袋などのごみを回収していますが、一向に減る気配はありません。博多湾の魅力、美しさが福岡市の一番の魅力だと思っているので、湾内のごみの現状を知ってもらおうと、機会を見つけては訴えています。



**小野** 日本野鳥の会はこの 30 年間、福岡のカモの数を毎年カウントしてきました。多いときに 6 万羽いたカモが、今は 2 万羽くらいに減っています。これは何らかの環境変化を表しているのでは。よりよい環境を次世代にバトンタッチするために、野鳥の会は身近な自然環境の変化をどんどん発信するようにしています。

**浅羽** 企業の商品開発、デザイン開発の仕事をしていて、3 年前に好きになった能古島（西区）に移住しました。今の若い人たちを見ていると、バブル期にあった「豊かさを追求」する志向はあまりなく、「心地よく暮らしていく」ことへ気持ちが向いているのかなと感じています。



**朝廣** 私の最近の教育研究のキーワードは「里山保全」です。あまり使われなくなった農用林に都会の人がもっとアクセスできる枠組み作りや、森づくりのボランティア活動についてです。

## ■ 25 年間の成果

**朝廣** 昭和 62 年に策定された福岡市基本構想で、「都市像」として挙げられた 4 つの目標の中に「自然を生かす快適な生活の都市」があります。この目標に対して、福岡市が 25 年間で得た成果は何だと考えますか。キーワードを示してください。

**矢部** 「生きもの調査」です。私が子どもの頃は田んぼや畑でトンボや魚を当たり前のように取っていましたが、都市化が進むにつれそうした機会はなくなってしまいました。けれども数年前から、生協や市町村が一緒になり、子どもも大人も水田で生きものをカウントする運動が行われています。生きものを見たり触れたりすることで生きものへの関心、ひいては食の安全への関心も高まります。この運動の発祥地の一つが福岡県です。

**小野** 「自然の豊かさ」です。福岡市はこの 25 年間で商業都市として発展し人口も増えましたが、なおもこれだけ自然がいっぱいあるのは、元々自然が豊かだったことの表れでは。ただ、環境の変化は、（影響が表れやすい）工業都市と違い真綿で首を絞められるように（気付かないうちに）進んでいるのかなとも感じています。

**半田** 「都市生活と自然の近さ」です。百道浜（早良区）が象徴的ですが、都市開発が自然のぎりぎ

りのところまで行われているため、車で海のそばまで行って海岸線を散歩でき、自然を身近に感じることができます。もっとも百道浜の場合、元々の自然でなく造りものの自然ではありますが。

**浅羽** 「水質」です。博多区的美野島に住んでいた子どもの頃、那珂川は数百メートル離れていても臭かったのですが、下水道整備が進んだおかげで改善されました。



**朝廣** 私は「山の保全」を挙げたいです。福岡市は標高 80 メートル以上の土地の開発規制があるため、80 メートル以上の山が山として残ったことは、評価していいのではないのでしょうか。

#### ■ 25 年間で見えた課題

**朝廣** 次に、福岡市がこの 25 年間のまちづくりで残した課題をキーワードで挙げてください。

**矢部** 「開発による自然の減少」です。都市が発展するために開発はやむを得ませんが、失われた自然環境を補償するシステムがないため、自然は使われた分、減っています。現在、敷田氏によれば福岡県の海岸線の約 80% は人工海岸です。自然の美しい海浜は 20% しか残されていません。(人工海岸の造成は) このあたりでストップさせなければなりません。



**浅羽** 「自然の豊かさを感じることができないこと」です。福岡市は自然がたくさんあり、自然の保全も行われてきましたが、市民に自然への興味を持たせ目を向けさせる仕掛けがなかったように感じます。福岡で海に出ると、ボートに乗っている人や砂浜に出ている人は本当に少なく、魅力的な海に背中を向けて暮らしているような気がします。

**半田** 「生物の生活が置き去りにされていること」です。福岡市は百道浜をはじめ目で見える場所をきれいにすることには力を入れるけれど、博多湾の水を浄化する生物がすむ海底や、ごみが不法投棄される山間部など、人の目が届かない所に対してはどうだったのでしょうか。今後のまちづくりでは、生きものを大切にすることを課題だと思います。



**小野** 「市民・行政の責任の自覚不足」です。福岡市の平均気温は、この 100 年間で 3.2 度上昇し、上昇幅は東京に次いで 2 番目。最低気温については 5.2 度も上昇しており日本一です。「都市の気温を下げるために緑地を残すべき」など指導できなかった行政に責任がある一方で、緑地を潰したことによる経済発展の恩恵を甘んじて受けてきた市民にも、責任はあるのではないのでしょうか。



**朝廣** 解剖学者で昆虫採集が好きな養老猛司先生は「都市にいると感性が鈍るが、自然の中にいると感性が豊かになって脳のストレスも解消される」と言っています。私たちは、自然に対する感性を育む

ような場をもっと大切にしていけないといけないと思います。

**矢部** ドイツでは、道路の下にカエル用の通路をつくって、カエルが道路の左右へ行き来できるようにしているところもあります。生きものたちが移動する道を配慮した都市計画を、ぜひつくってほしいですね。

#### ■25年後の将来像

◎福岡アジア都市研究所・山下永子専門研究員が、将来予測データや福岡市の特徴を示すデータの紹介



データ資料は、下記のリンク先ページからご覧下さい。

<http://www.urc.or.jp/vision/data-index.html>

**朝廣** 干潟などのウェットランドをめぐっては、「自然環境を保全しながら、自然の生態系サービスを上手に利用していこう」といった「ワイズユース」（賢い利用）の考え方が世界で主流になりつつあります。福岡市のまちづくりで生態系サービスを生かした将来像のアイデアを挙げてください。

**半田** 一つは「生活排水の再生」です。博多湾には、山の栄養分を含んだたくさんの水が流れ込むのが本来の姿ですが、都市化が進んだため、その水の多くは生活用水としてくみ上げられ、使われた後に処理場から排水として湾に流れています。この排水を“生きた水”に変えるのがポイントです。そこで、排水処理場の横に小さな森を造り、処理後の排水を森の小川へ流すことで、湾には“生きた水”が入ります。また、夏場に海底が低酸素状態となり微生物などが死ぬのを防ぐため、滝や噴水を造って海水を動かすという方法もあります。それらは人間による「里海づくり」ではないでしょうか。

**矢部** 私が挙げる将来像の一つは「有機物のリサイクル」です。人間の排せつ物や食べ物ごみなどを、エネルギーをかけて処理するのは、資源循環の上でも無駄なことです。何十年前も前、私たちは排せつ物や食べ物ごみを有機物肥料として畑に還元していました。有機性廃棄物の循環システムをつくると、現在利用している化学肥料の使用は、大幅に削減できます。このリサイクルのためには、有機肥料を使ってくれる農家を確保しないといけないですが。

もう一つは「環境オフセット」です。日本以外の先進国には、事業者が大規模開発をする際、開発によって失われた生態系と同程度かそれ度以上のものを提供しないと、開発が行えないという制度があります。例えば米・カリフォルニア州では、貴重な動植物がいる土地で大規模な住宅地を造成した際、事業者がトマト畑を掘って湖沼や森林を造り、生態系維持の専門家らにそこを管理してもらっています。福岡市が日本で初めて「環境オフセット」制度をつくってくれたら、どんなに素晴らしいかと思います。

**小野** 私のアイデアの一つは「環境教育都市（身近でわくわく）」です。福岡市は標高1千メートルから海拔ゼロメートルまでの土地があり、沖合には黒潮も流れているという多様な自然環境の財産があります。市民誰でも、どこでも、いつでもわくわくしてもらえる環境教育が行える都市を、目指していけるのではないのでしょうか。

**半田** それに関連して私がもう一つ挙げたいのは「自然と触れ合えるまちづくり」です。福岡市民は自然を目にすることが多くても、自然に触れる時間は少ないのでは。畑を耕す、海で魚を捕まえるといったことが気軽にできる都市になれば、豊かなまちになると考えます。

**浅羽** 私は「都市の中に里山を」を挙げます。うちの母親に環境学習へ行こうと誘っても、まず乗ってこないでしょうが、小さな農地を借り、そこで育てた野菜は持ち帰れると知れば、その企画に参加するでしょう。そうした人の欲求を刺激する仕掛けを行い、その結果として「地球のためになる」というのがすてきだと思います。

**矢部** そうですね。コウノトリが来るようになった兵庫県豊岡市に、「コウノトリ育むお米」というブランドの有機・減農薬米があって、普通のお米の1.5倍の値段で売られています。ただし、このお米の消費者は、自分の健康への配慮に加えて、コウノトリが増えていることにも余分なお金を払っている点が重要です。つまり、コウノトリが生息するには、自然界に十分な生物多様性が残っていることが必要ですが、生物多様性のためだけにお金を払う人は、よほど意識の高い人だけ。なぜなら、生物多様性は、自分が払わなくても誰かが払ってくれたらそれで良い環境が享受できてしまうから。その意味で、

生物多様性につながるサービスは個人で取り組みにくいので、行政にその視点、センスを持って頑張ってもらいたい。

**小野** 私のもう一つのキーワードは「ポケットパークで緑のコリドー」です。福岡市の人口は 2025 年にピークを迎えます。都市部で空き家が出ると治安上の問題が出かねないので、そこに「ポケットパーク」を造る。畑にして野菜をつくることもでき、災害時は住民の集合場所になります。そこに緑があることで生きものたちが行き来できる回廊（コリドー）の役目も果たせます。既に静岡県三島市は取り組み始めていて、100 平方メートルのポケットパークが 30 くらいあります。福岡市にポケットパークがたくさんあれば魅力的なまちになるし、そこを風が吹き抜けることでヒートアイランドを抑えることにつながるのではないのでしょうか。



#### ■会場からの質問

**質問 1** 「生物多様性の質」を数量で表すとした場合、どういう指標項目が考えられますか。

**矢部** 生物多様性は、実は科学的であるとともに、主観的なものでもあり、人間の価値観に依存した文化的な概念と言えます。「環境オフセット」の場合でいけば、生物多様性を保全するために研究者や市民らが「この種は残したい、残さなければならない」というものを選び出し、それらを残すための環境条件を考えていくという流れです。

**質問 2** 「自然と触れ合える教育」とはどんなものなのでしょうか。また、「生きもの」の授業は、もっと自然の中に入っていき形態などに見直す時期にきているのではないのでしょうか。

**小野** 福岡市環境局は、小学校低学年児童と保育園・幼稚園の園児を対象に「わくわくエコ教室」を始めていますが、生きものの面白さを体験してもらうことが出発点だと思います。

**矢部** 生きものは、原生自然の中の生きものと農地や山里など生活空間の中の生きものの 2 種類に分けられますが、両方の生きものに関わり合う仕組みづくりが大切だと思います。農地でメダカの数を守る生きもの調査は、大切な理科の教育プログラムです。

**朝廣** 最後になりますが、「25 年後にこういうまちにすべき」という意見を福岡市の計画に反映させ、事業につなげていくためには、今のステップで意見をどんどん出しておく必要があります。それは私たちの責任であり義務だと思います。

### 3. 資料

#### (1) パネリスト・コーディネーターのプロフィール

浅羽 雄一 氏 (㈲ウィロー代表)

経営していた飲食店のオリジナル飲料として 2004 年に開発した「こどもびいる」の全国的ヒットの後、商品企画及びデザイン会社(㈲ウィロー)を設立し各地の地域の特色を生かした「地サイダー」をはじめとした地域商品の企画デザインを行う。2009 年より能古島在住。  
<http://nocorita.exblog.jp>

小野 仁 氏 (日本野鳥の会福岡代表)

保育園、小学校などで自然の面白さを伝えている。地域の環境活動の支援の一環として、公民館の環境講座を実施。また、市民を対象にした「環境保全活動リーダー講座」「環境を知る講座」などのコーディネーターを勤める。日本野鳥の会福岡代表

半田 孝之 氏 (福岡市漁業協同組合伊崎支所)

福岡市漁業協同組合伊崎支所。1973 年 3 月福岡市立当仁中学校卒業、1973 年 4 月福岡県

立修猷館高校（定時制）入学と同時に漁業に従事する。主に低引き網を主体とした漁業を営む。1990年博多湾のごみの増加が酷くなった為、博多湾ゴミ回収等の活動を始める。

矢部 光保 氏（九州大学大学院農学研究院教授）

九州大学農学研究院教授。京都大学卒、農林水産省入省、ロンドン大学客員研究員、農林水産政策研究所環境評価研究室長などを経て現職。専門は、環境資源経済学、農業経済学。福岡市農業振興政策審議会委員、生物多様性ふくおか戦略策定委員会委員。

朝廣 和夫 氏（九州大学大学院芸術工学研究院准教授）

九州大学大学院芸術工学研究院環境・遺産デザイン部門・准教授 / 博士（芸術工学）

専門：緑地保全学、

・ふくおか森づくりネットワーク・代表

・日本環境保全ボランティアネットワーク（JCVN）理事

緑地保全学研究室にて、歴史と自然に学び、より良い人と自然の関係のデザインに取り組む。現在、都市林における落葉広葉樹林と林床植生の保全、農山村における保全合宿活動や人材育成、バン格拉デシュの農山村調査等の教育・研究等を進めている。

(2) 配布資料



## アジアのリーダー都市 福岡プロジェクト

### 第2回 フォーラム

**日時** 2011年 6月 25日(土)  
開演14:00(17:00終了予定)

**会場** 福岡市美術館・1階講堂  
(福岡市中央区大濠公園1-6)

**内容(予定)** ※天候によりプログラムの順番が変更になる場合がございます。

14:00 **開会**

① **野鳥の会による自然観察体験**  
① 解説 小野 仁氏 日本野鳥の会福岡代表

14:15 ②「大濠公園の生きものに会いましょう！」  
※②では、大濠公園周辺へ移動して自然を観察します。

15:05 **休憩**

15:15 **フォーラム**

- データで語る福岡の今・未来  
山下 永子氏 (財)福岡アジア都市研究所専門研究員
- パネルディスカッション

**テーマ** 生物多様性とまちづくり

■パネリスト 浅羽 雄一氏 (有)ワイロー代表  
小野 仁氏 日本野鳥の会福岡代表  
半田 孝之氏 福岡市漁業協同組合伊崎支所  
矢部 光保氏 九州大学大学院農学研究院教授

■コーディネーター 朝廣 和夫氏 九州大学大学院芸術工学研究院准教授

17:00 **閉会**

主催：福岡市

### プロフィール



**パネリスト**

**浅羽雄一氏**  
(有)ワイロー代表

経営していた飲食店のオリジナル飲料として2004年に開発した「こどもひいる」の全国的ヒットの後、商品企画及びデザイン会社(有)ワイローを設立し各地の地域の特徴を生かした「地サイダー」をはじめとした地域商品の企画デザインを行う。2009年より能古島在住。http://noconita.exblog.jp



**パネリスト**

**小野 仁氏**  
日本野鳥の会福岡代表

保育園、小学校などで自然の面白さを伝えている。地域の環境活動の支援の一環として、公民館の環境講座を実施。また、市民を対象にした「環境保全活動リーダー講座」「環境を知る講座」などのコーディネーターを勤める。日本野鳥の会福岡代表



**パネリスト**

**半田孝之氏**  
福岡市漁業協同組合伊崎支所

福岡市漁業協同組合伊崎支所。1973年3月福岡市立当仁中学校卒業。1973年4月福岡県立修猷館高校(定時制)入学と同時に漁業に従事する。主に低引き網を主体とした漁業を営む。1990年博多湾のごみの増加が酷くなった為、博多湾ゴミ回収等の活動を始める。



**パネリスト**

**矢部光保氏**  
九州大学大学院農学研究院教授

九州大学農学研究院教授。京都大学卒、農林水産省入省、ロンドン大学客員研究員、農林水産政策研究所環境評価研究室長などを経て現職。専門は、環境資源経済学、農業経済学。福岡市農業振興政策審議会委員、生物多様性ふくおか戦略策定委員会委員。



**コーディネーター**

**朝廣和夫氏**  
九州大学大学院芸術工学研究院准教授

九州大学大学院芸術工学研究院環境・遺産デザイン部門准教授。博士(芸術工学)。専門：緑地保全学、ふくおか森づくりネットワーク 代表、日本環境保全ボランティアネットワーク(JCVN)理事。緑地保全学研究室にて、歴史と自然に学び、より良い人と自然の関係のデザインに取り組む。現在、都市林における落葉広葉樹林と林床植生の保全、農山村における保全合宿活動や人材育成、バン格拉デシュの農山村調査等の教育・研究等を進めている。

## 1. 概要

- ▽タイトル 「アクティブエイジング～いくつかになってもいきいきと暮らせるまち」  
 ▽日時 7月2日(土) 14時30分開会/17時00分閉会  
 ▽会場 福岡市立婦人会館9F大研修室  
 ▽内容  
 ・データで語る福岡の今・未来  
 ・パネルディスカッション
- ▽パネリスト 伊原 ルリ子 氏(晴天天代表取締役)  
 小川 全夫 氏(福岡アジア都市研究所副主幹研究員、九州大学名誉教授)  
 福嶋 明子 氏(Fuari communications 代表、(元ぐらんざ総研所長))
- ▽コーディネーター 十時 裕 氏(アーバンデザインコンサルタント取締役、  
 (元福岡市NPO・ボランティア交流センター長))

## 2. 提言内容、会場の様子

第3回フォーラムは7月2日、福岡市立婦人会館(中央区舞鶴、通称・あいでふ)で開かれ、福岡アジア都市研究所の専門研究員・山下永子氏による「データで語る福岡の今・未来」に続いて、「アクティブエイジング」をテーマにパネルディスカッションが行われ、高齢者の就労支援や社会参加などについてのパネリスト3人とコーディネーターが多彩な意見を交わしました。フォーラム終了後、日本糖尿病協会福岡県支部による糖尿病の簡易検査(血糖値測定)や栄養指導なども行われました。

## ◎パネルディスカッション

## 高齢者が活躍できる社会に

問題解決の鍵は「コミュニティ」 十時氏

シニアの高い能力が企業を変える 伊原氏

地域によらず相談のできるコンシェルジュを 小川氏

意欲ある高齢者と行政の橋渡し役を担う人材が必要 福嶋氏

(文中敬称略)

## ■自己紹介や現状認識

**十時** 昭和62年に策定された福岡市基本計画の中に、「生きがいのある高齢化社会の創造」という言葉もありましたが、25年たって、高齢者をめぐるいろいろな問題が出てきています。私は景観問題など都市計画に30年ほど携わる中で、市民参加の活動をずっとやってきました。そこで行き着いたところが「コミュニティ」です。高齢社会の問題を解決する一番の方法も「コミュニティ」なのかな、と考えています。今日はいろいろな切り口から、福岡市の新ビジョンに反映できるヒントが出てくるのを期待しています。まずはパネラーの3人に、自己紹介を兼ねて今どんな活動をしているか、高齢者問題についての市の現状をどうみているかを話してください。



**福嶋** 私は福岡都市圏のシニア向け雑誌「ぐらんざ」を発行し、編集の仕事を10年間してきました。高齢者のほんとうに必要な情報は、福祉情報を除いては、高齢者だけのニーズで終わることが非常に少ないのにジレンマがあり、地域に根付いた情報と人とを組み合わせた双方向のコミュニケーション(地域

の人がつながる仕組み)をすることで、本当に求められているニーズに応えられるのじゃないかと思い、独立したばかりです。

**小川** 福岡市は若い都市をうたい文句としていますが、決して若くはなく、既に 29 歳以下の人口は減っている。一方で、2035 年までに前期高齢者 (65~74 歳) は 05 年比で 1.5 倍に、後期高齢者 (75 歳以上) は 2.5 倍に増えます。若い人がたくさんいるときにできた今の社会制度では、これだけの人口構造変化に絶対に対応できません。今から制度を変えていかねばならないと考えています。

**伊原** 私は、今後の高齢社会のニーズに対して少しでもお手伝いできる人材を提供しようと、冠婚葬祭に特化した人材の育成、派遣、教育、プロデュースを行っています。



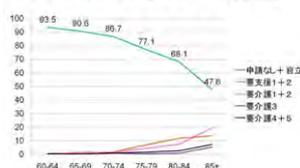
### ■元気な高齢者の活用方法

**十時** 福岡市民の中で高齢者の占める割合が大きくなる将来を、どのように考えればいいのでしょうか。高齢者は福祉を受ける側とついみてしまいがちですが、それだけ高齢者が多くなれば、それは違うだろうという気もします。小川先生、その点で問題提起してもらえませんか。

**小川** 日本は、何歳だったらこんなことをする、何歳ならこんなことはしないという「歳相応の行動」を求める発想が強すぎます。高齢者というと、みんな要介護の高齢者に目がいきますが、実際、福岡市の 60~64 歳のうち 93.5%、70~74 歳でも 86.7%は要介護申請をしておらず、自立しているんですね。でも、元気な高齢者のためのプログラムはあるのでしょうか。60 歳だ、65 歳だと決められた定年に達しても、能力的、体力的にも仕事はできるのに、仕事をする社会環境がない。高齢者をお客様扱いし過ぎる社会の仕組みが問題なのです。高齢者をパッシブ (受け身) 扱いにするのではなく、高齢者の持っている力を引き出し、若者と同等の“主人公”として活躍できる社会へと変えていかなくては、これから福岡市の活力は持続できなくなります。



福岡市高齢者の要介護状況



**福嶋** 雑誌編集を通して、私は元気なシニアの方たちとたくさん触れ合ってきましたが、と同時に地域に還れないシニアをたくさん見てきました。社会のために何かやりたいが、どこで何をすればいいかわからない、と。市のボランティア相談室やNPOなどを紹介しましたが、満足されないことも多々ありました。意欲的なシニアほど何かやりたいという方は、自分の能力を社会に提供することで、いくらかでも報酬を得られるソーシャルビジネス的なものを描いていることが多いからではないでしょうか。今はまだ、NPO に代わる具体的な解決策が見当たりません。なんとなく見えているビジョンとして、地域にファシリテーター (協働促進者) やコーディネーターとして入り、時間とやる気のある高齢者と行政、専門家などの橋渡しをする中立的立場からの人材が必要で、私自身その役目を果たしていけたらいいな、と考えていますし、とにかく、そういった人材育成が急務だと思います。



**伊原** 事業をしている雇用者の立場からいくと、7、8年前、60 歳以上の方が履歴書を送ってくるケースは少なかったのですが、今は応募者の 3、4 割を占めます。30 代後半から 50 代という中間管理職

にとって、60歳以上の先輩を会社に受け入れるのには抵抗があるのかもしれませんが。でもシニア世代は、非常に強い責任感、忍耐力を含め能力が高く、企業内の流れをプラスに変える、と言いたいです。

**小川** 高齢者の就業機会ということ言えば、企業の「職務再設計」が必要です。若い人たちだけでなく、高齢者も働きやすい職場づくりです。具体的には、座って作業する自動車メーカーで、椅子をその人の体の状態に合わせて上下調整ができるように変えた自動車メーカーがあります。長野県のある「おやき」メーカーでは、高齢者に働く時間を自主裁量で決めることを認めています。高齢者が多様な働き方のできる環境を整え、その力を引き出す工夫をすることが求められているのではないのでしょうか。

#### ■健康維持の態勢

**十時** 高齢者は健康であれば働いたり社会活動の参加ができますが、そもそも高齢者自身、健康を維持することへの意識は高いのでしょうか。

**福嶋** 自分の健康はどうでもいい、という高齢者はあまりおらず、意識は高いと感じます。ただ、近くの公民館で開かれる介護予防講座に参加しても、地域に入り込めないため長続きしない人が多い気がします。受け身でなく、参加意欲をかきたてるには、自立した自治力や主体性のある体験型プログラムが必要です。例えば、小学校区単位などでそういう人をしっかり育て受け入れる態勢があるとよいですね。

**十時** 介護予防や健康検診など高齢者の健康維持のために、行政はどこまで担えばよいのでしょうか。

**小川** 働く人の数も減り賃金水準も大して上がらないということは、市の税収も増えないわけで、そうすると行政ができるのはミニマム（最低限の）サービスとなります。では行政に代わり、誰が市民の健康づくりを担うかといえば、一つは「自分たちの暮らしは自分たちで守ろう」という心ある人たちの動きで、もう一つは地域です。地域の枠組みだけで不十分ならば、NPOというやり方もあります。その場合に行政は、地域やNPOと立場は違ってもコラボレートする仕組みをつくるのが、これからのやり方です。高齢者の問題をどうするかは、その中で考えるべきではないのでしょうか。

#### ■地域活動と高齢者

**十時** この2、3年の調査で、「地域活動は大切ですか」という質問に対して、「大切です」という答えが劇的に増えてきているんです。一方で高齢者の増加に伴い独居老人は増えるでしょう。すると「孤独死」の不安も出てきます。そういう問題に対応するのがNPOか地域かということになるならば、今後、元気なお年寄りがいるんなグループをつくる、なんていうことになるのでしょうか。



**小川** 地域活動を進めるにはいろんなやり方があります。さらに地域の人たちに対して、医療、介護、介護予防、住宅、生活支援などを包括的に支援する「地域包括ケアシステム」という仕組みづくりの重要性も指摘されています。裏を返せば行政の側が、「そういう仕組みをつくらないと、もう地域を支え切れない」と言っているようなもの。ただ、実現しようとするともものすごくお金がかかります。アメリカの例ですが、ニューヨークに高齢者ばかりが住む地区が現れました。その中の高齢者らは「行政は要介護の人には支援するが、元気な自分たちには何の支援もない」と怒り、自分たちだけでここに住み続けるために必要なことを考え事業計画を作りました。それをある財団に持ち込み、みんなで会費制の活動にしました。拠点になった空き部屋を提供した不動産会社は税の減免措置を受けました。今では、このような住民の手による事業計画を市政府や州政府が採択して資金を直接交付するようになっていいます。日本でもそうしたNPO的な活動が高まっていけば、高齢者自身が活動を展開する可能性がないわけではないでしょう。

**十時** 高齢者が受け身では難しいということですね。地域のファシリテーターとしては、その地域の政策を行政に提言するところまでイメージしているのでしょうか。それとも地域の人たちの“意欲のマグマ”をまとめる感じでしょうか。

**福嶋** ファシリテーターは地域と行政の橋渡しが基本で、あくまで主役はその地域に住む人たちです。

高齢者の問題ならば、高齢者自らが、「大好きなまちに住み続けるにはどうするか」「福祉の手助けが必要な時はどうするか」を考える必要があります。一方で、(アメリカでは地域の課題を見つけて行政などに上げる役目も担っている) ケアマネジャーの仕事の質も、上げていくべきではないでしょうか。

#### ■日本の高齢者問題にアジアも関心

**十時** 高島市長の言う「アジアのリーダー都市」という意味で言えば、福岡市が高齢者問題への対策を組み入れた都市モデルを作り上げることができれば、アジアの都市にとっては参考にしやすくなるのではないのでしょうか。韓国からの観光ツアーの中に福岡市の福祉施設見学を組み入れたところ、オフアがたくさんあり、福祉分野だけでなく他の施設も行きたいということになったようです。

**小川** そのツアーを手掛けたのは、私が理事を務めているNPO法人「アジアン・エイジング・ビジネスセンター」です。韓国、中国、シンガポール、台湾などは、「日本は経済的に豊かになったけれど、予期せぬ高齢化、人口減少に直面している。これから先はどうやって生き延びていくのだろうか」と大きな関心を持って見えています。だから視察に来るんです。福岡市民がそうした課題を正面に見据え、高齢者の力を上手に引き出すさまざまな取り組みを進めている、と情報発信されれば、アジアから先駆的な都市・福岡市をどんどん訪れるのではないのでしょうか。

#### ■世代間交流の課題

**十時** 「ジェントロジー」(老年学)という学問の中に「多世代交流」というテーマがあります。世代間をめぐる一番の問題は、若者が高齢者と話せないことではないのでしょうか。そもそも話す機会が少ないだけでなく、若者によれば話しても高齢者からの叱咤(しった)激励が多すぎ、さらに「昔はこうだった」と言い出されると、すっかり疲弊してしまうようです。高齢者の側は若い人たちとの交流をどう考えているのでしょうか。

**福嶋** 世代間交流は、人間の本質的な欲求ではないのでしょうか。例えば、ウェブなど若い人たちが長けた能力と、相手を思いやる文章の書き方などシニアの方が得意とする能力を組み合わせ、ひとつのプロジェクトを成功させる。そういった自分の能力を地域に役立てられたという成功体験と世代間交流があれば、地域は自らの力で元気になっていきます。

**小川** 韓国・テグ市の慶北(キョンブク)大(キョンブク)大は、高校に行けなかったけれど、今も勉強の意欲が強い高齢者の中から「名誉学生」を任命し、若い学生と一緒に授業を受けられる仕組みをつくっています。クラスに高齢者がいることで緊張感もありますが、高齢者の本気で勉強する姿勢が若者の刺激にもなっているようです。また、米・ハワイでは、高齢者が小中学校で生徒たちの学習のメンター(教育的な助言者)をボランティアとする活動が行われています。こうした「アクティブエイジング」につながる状況をつくることは、日本でも決して難しくはないはずです。

#### ■会場からの質問

**質問1** 地域活動に関わりを持つことは大事だと思いますが、田舎のコミュニティーが嫌で都市に住む人もいるため、地域活動にポジティブでない人もいると思いますが。

**小川** コミュニティーといえば、地域的なコミュニティーが浮かびやすいですが、NPOも「志を共にするコミュニティー」なんです。確かに、人との関わりを嫌って「一切切、自分に構ってくれるな」という人もいます。でも、そこでもし「無縁死」した場合、周りの人たちにいろいろな迷惑が掛かります。それでも自分の孤立を守る権利はあるのか、と私は問いたいです。できれば、納得がいく形で人と人のつながりを大事にするコミュニティーを考えるべきではないのでしょうか。

**十時** 若い人に「コミュニティーとは何か」と質問すると、地域など現実空間はイメージしないことに驚かされました。彼らのコミュニティーは、mixi(ミクシー)やブログなど主にウェブで結び付いた仮想空間などです。あえて「地域コミュニティー」は何軒くらいのイメージか問うと、わずか5軒ほどなんです。同じ「コミュニティー」でも、若者と高齢者とでズレが生じています。

**伊原** 地域コミュニティーということであれば、回覧板の話があります。2カ月前、うちの会社が東京へ業務拡大したのに伴い、社員6人が福岡から五反田の近辺に引っ越しました。地域のちょっとした連絡は回覧板で回ってくるので、初めは面倒くさいと思っていた社員たちは、回覧板渡しで顔を合わせる近所の人たちと仲良くなり、地域に親しみや住みやすさを感じているようです。コミュニティーづくりは大げさなことではなく、意外と身近なところからできるのかな、と思っています。

**福嶋** 「村八分」という言葉があります。あくまでいい意味ではありませんが、たとえ8割は地域と関わってなくても、残り2割は何らかの形で役割を果たしている、という意味もあります。昔の地域社会にはその慣習があった。だから孤独に死を迎え、何か月も放置されるなどということも起こらなかったのです。まさに地域に根付く昔の人の生きる知恵だったと私は思います。一方現代はまったく直接的に人と関わらずと生きていくことが可能です。しかし同時に、鬱病患者の増加や無縁社会などの問題を引き起こしている。地域の活動を支援するコーディネーターの役目には、地域でつながりが無い、あるいは希薄な人にも、その地域での役割を見つけて参加してもらうことが含まれると思います。地域によって課題はさまざまですが、もう一度、良質な地域のつながりを生み出すことが、これからの高齢社会を豊かに生きる手立てになるのではないかと考えています。

**質問2** 地域では公民館を中心にいろいろな活動が行われていますが、公民館そのものが俗人的に感じられ、参加したい気持ちになりません。地域にどんな活動があり、どんなグループがあるのかといったことを教えてくれるガイドのような人は、これから出てくるのでしょうか。

**小川** 過疎地域の中には、住民が高齢者ばかりになったため地域のことを考え、行動できる力がない場所もあります。そうした集落の抱える問題を解決するため、行政は「集落支援員」を派遣し、活動費、人件費を負担する仕組みをつくっています。集落支援員の多くは、その集落に心を寄せているNPOの若いスタッフですが、役場の退職者や現役の自治会長で、「この地域をなんとかしたい」という思いを持っている人もいます。そうした人材は、その地域ごとに見つけ出されているのが現状です。これから先は福岡市でも、集落支援員的な役割を果たす人が必要になるかもしれません。要は医療、福祉、住宅、生活支援その他もろもろのよろず相談窓口となる人です。私は「コミュニティーコンシェルジュ」と名付けています。

**質問3** 25年後に高齢者となっている今の40代は、仕事より自分の時間を大切にする人も決して少なくありません。そういう人たちは年を取っても働きたいと思うのでしょうか。25年後の社会で「就労支援」はキーワードになるのでしょうか。

**小川** 65歳まで生きた人の平均余命は男性約19年、女性約24年、つまり85~90歳まで生きるんですよ。60歳の定年まで40年そこそこ働いたくらいで、残りの長い人生の蓄えができた人は、ほとんどいません。じゃあ、若い人たちにおんぶしようかと思っても、若い世代が少なくなっている。どうするんですか。自分たちに必要なものは、近くの人たちと協力したり、労働や物の交換をすとか、ありとあらゆる手段を講じて手に入れないと、われわれの人生はありません。それが、「アクティブ・エイジング」の必要性の背景です。

**福嶋** 平成19年度の総務省の資料によると、65~70歳の男性の2人に1人は働いている、という実態があります。高齢者のうち、「生活のためでなく働きたいから働いている人」と「働かないことを自ら選択した人」の生活満足度は高いことが、ニッセイ基礎研究所のデータで明らかになっています。働かない道を選んだ人の2割は社会活動に参加。これからは「家族だけが頼り」という時代ではありません。むしろ、地域の人たちが家族以上に「頼れる人」となるのではないのでしょうか。社会活動に参加している人の7割近くが、会社にいる時から関わっています。理想を言えば、会社に行きながら地域活動にも参加し、地縁をつくっていく方法がよいと思います。

### 3. 資料

#### (1) パネリスト・コーディネーターのプロフィール

伊原 ルリ子 氏 (㈱晴天代表取締役)

1969年生まれ福岡県出身、1994年英会話カフェレッスン設立、1995年ジャパンエンターテインメント設立、1996年多額の借金を背負い倒産、2003年㈱晴天設立、現在に至る。  
福岡本社、東京、大阪オフィス設立~全国展開中。

小川 全夫 氏 (福岡アジア都市研究所副主幹研究員、九州大学名誉教授)

1943年台湾生まれ。70年に九州大大学院文学研究科修了。宮崎大助教授、山口大教授、九州大

教授、山口県立大教授を経て、2010年から熊本学園大教授。専門は社会老年学。

福嶋 明子 氏 (Fuari communications 代表、(元ぐらんざ総研所長))

99年、シニア向け雑誌ぐらんざを創刊。編集長を務める。同時にシニアマーケティング研究所を設立。現在独立を経て(株)Fuari コミュニケーションズ設立。情報発信力を地域の人に活かしたコミュニティデザインが主な活動領域。

十時 裕 氏 (アーバンデザインコンサルタント取締役、

(元福岡市NPO・ボランティア交流センター長))

1952年福岡県生まれ。福岡大学建築学科卒業。市民主体のまちづくりを米国で学び帰国後、福岡を拠点に都市計画、まちづくりに携わる。最近では、地方分権、住民主体のまちづくりの社会的動向による市民参加、参画の計画策定、活動支援の専門家としてワークショップを活用した楽しく学び実行していく実践的なまちづくりを指導、展開している。

(2) 配布資料



**新VISION**  
アジアのリーダー都市  
ふくおか!プロジェクト

**アジアのリーダー都市  
ふくおか!プロジェクト**

**第3回 フォーラム**

**日時** 2011年7月2日(土)  
開演14:30(17:00終了予定)

**会場** 福岡市立婦人会館・9階大研修室  
(福岡市中央区舞鶴2-5-1 あいれふ9階)

**内容**

14:30 **開会**

**フォーラム**

①データで語る福岡の今・未来  
②パネルディスカッション

**テーマ** **アクティブエイジング**  
いくつになってもいきいきと暮らせるまち

**パネリスト**

伊原ルリ子氏 (株)晴天代表取締役  
小川 全夫氏 福岡アジア都市研究所副主幹研究員  
九州大学名誉教授  
福嶋 明子氏 FuAri communications代表  
(元ぐらんざ総研所長)

**コーディネーター** 十時 裕氏  
アーバンデザインコンサルタント取締役  
(元福岡市NPO・ボランティア交流センター長)

16:20 **あいれふによる健康チェック**  
「簡易健康チェックを体験しよう!!」  
吉井 千賀子氏 糖尿病療養指導士

※日本糖尿病協会福岡県支部による糖尿病簡易検査(血糖測定)を行います

17:00 **閉会**

主催：福岡市

**プロフィール**



**パネリスト**

**伊原ルリ子 氏**  
晴天代表取締役

1969年生まれ福岡県出身、1994年英会話カフェレックス設立。1995年ジャパンエンターテイメント設立。1996年多額の借金を背負い倒産、2003年晴天設立、現在に至る。  
福岡本社、東京、大阪オフィス設立～全国展開中。



**パネリスト**

**小川全夫 氏**  
福岡アジア都市研究所  
副主幹研究員  
九州大学名誉教授

1943年台湾生まれ。70年に九州大大学院文学研究科修了。高崎大助教授、山口大教授、九州大教授、山口県立大教授を経て、2010年から熊本学園大教授。専門は社会老年学。



**パネリスト**

**福嶋明子 氏**  
FuAri communications代表  
(元ぐらんざ総研所長)

99年、シニア向け雑誌ぐらんざを創刊、編集長を務める。同時にシニアマーケティング研究所を設立。  
現在独立を経て(株)Fuari コミュニケーションズ設立。情報発信力を地域の人に活かしたコミュニティデザインが主な活動領域。



**コーディネーター**

**十時 裕 氏**  
アーバンデザイン  
コンサルタント取締役  
(元福岡市NPO・  
ボランティア交流センター長)

1952年福岡県生まれ。福岡大学建築学科卒業。市民主体のまちづくりを米国で学び帰国後、福岡を拠点に都市計画、まちづくりに携わる。最近では、地方分権、住民主体のまちづくりの社会的動向による市民参加、参画の計画策定、活動支援の専門家としてワークショップを活用した楽しく学び実行していく実践的なまちづくりを指導、展開している。

## 第4回

## おもてなしが育むまち

### 1. 概要

- ▽タイトル 「おもてなしが育むまち」
- ▽日時 7月9日（土） 14時30分開会／17時00分閉会
- ▽会場 博多小学校表現の舞台
- ▽内容
- ・講演「祇園山笠と博多のまち」
  - ・データで語る福岡の今・未来
  - ・パネルディスカッション
- ▽パネリスト 井手 修身 氏（NPO 法人アイデア九州・アジア代表）  
上田 啓蔵 氏（「はかた部ランド協議会」議長）  
山下 真輝 氏（㈱JTB 旅行事業本部地域交流ビジネス推進室）
- ▽コーディネーター 帆足 千恵 氏（財福岡観光コンベンションビューロー）

### 2. 提言内容、会場の様子

第4回フォーラムは7月9日、博多小学校（博多区奈良屋町）で開かれました。「はかた部ランド協議会」議長の上田啓蔵氏による講演「祇園山笠と博多のまち」に続き、福岡アジア都市研究所の専門研究員・山下永子氏による解説「データで語る福岡の今・未来」の後に行われたパネルディスカッションでは、観光行政やまち歩きなどに携わるパネリスト3人が「おもてなしが育むまち」をテーマに、さまざまな意見を交わしました。



#### ◎パネルディスカッション

##### 地域資源の『編集加工』で新たな集客交流へ

- 留学生の積極的な受け入れ施策をすべき 井手氏  
博多の全てがそろそろ「門前町」をつくりたい 上田氏  
情報発信は多彩な方法で瞬間、瞬間に 山下氏

（文中敬称略）

##### ■自己紹介と「集客交流」の現状

帆足 まずは自己紹介を兼ねて、今日を中心テーマとしたい「集客交流」の現状について紹介してください。

山下 会社のことから話しますと、JTBは来年、設立100周年を迎えます。日露戦争後、日本の要人たちは「欧米人の日本理解は国益につながる。理解を進めるには外国人観光客に来訪してもらうしかない」と、外国人の受け入れ、今で言う「インバウンド」を始めたのです。100年後の今、日本はさまざまな問題を抱えています。再び外国人を呼び込むにはいろいろな産業が観光と一緒に取り組むことを考えなくてははいけません。JTBは今、「旅の力」をPRしています。観光が持つ文化の力、経済の力、教育の力などが、東日本大震災を経た今の日本社会に重要だと考えるからです。話を福岡に移しますと、全国に福岡好きな人は多いのですが、必ずしも旅先に福岡を選ぶわけではありません。東京で「旅行に行く」というと、まず東北ですし、福岡までの航空運賃4～5万円があれば、北海道、沖縄、アジアへ

行くかもしれません。それほどの交通費を掛けて福岡を訪れたお客さまに、まちの皆さんがどんなものを提供できるのかが、いま問われています。確かに福岡の「食」の魅力は大きく、食の体験そのものが強力なコンテンツになります。でも、全国から来てもらうためには「食」をはじめさまざまなコンテンツをさらに磨き、今以上の情報発信をしなければなりません。



**上田** 私は博多のまちで、今年で創業 98 年になるかまぼこ店を経営しています。私がまちづくりに興味を覚えたのは 40 年ほど前です。TULIP ドラムス・弟のファンが全国からこられて博多の観光名所を尋ねられた時に思い浮かばず、仕方なく太宰府を紹介しました。自分のまちを紹介できずに寂しく感じ、博多のまちを見て歩くと、見どころがたくさんあると気付きました。櫛田神社には楼門、天井絵、風神雷神の彫刻や夫婦恵比須神社、夫婦木があり、裏には 22 のお社があります。東長寺の歴史は古く、神仏分離の前は東長寺が櫛田神社を管理していたため、山笠の清道があるのです。木造座仏では日本最大級の大仏や、今年 5 月にできたばかりの五重塔のほか、豊臣秀吉、黒田藩、源頼朝にまつわるものも残っています。承天寺にもさまざまな逸話があり、博多のまちにいろいろなものがあることを再認識し、まだまだ勉強しないといけないと思っています。

**井手** 私の本業は、九州全域の観光集客のマーケティングやプランニングをする会社の経営ですが、今日は昨秋立ち上げた「NPO 法人アイデア九州・アジア」の取り組みを中心に話します。福岡は「食」が一つの魅力であり、お店もたくさんありますが、そうした素材があるだけではいちげんのお客さま、それに住んでいる私たちも楽しめません。地域の資源を「編集加工」して楽しむ仕組みを作り、店に行くきっかけを提供すれば、福岡は楽しめる要素がまだまだある、と考えました。それを形にしたのが昨年 11 月と今年 5 月に、天神と博多のお店を飲み歩きしながらまちを回遊するイベント「バルウォーク福岡」です。各回とも 1 日に 1 万 3000 食が提供されました。もう一つのキーワードは「集客交流」です。その地域に住んでいる人が面白いと思うものは、よその人にとっても面白いものです。有名どころの観光地は必要でなく、私たちの日常の中にある非日常、よその人にとって異なった日常を楽しませるきっかけ作りや仕組みが必要ではないでしょうか。「山笠」という仕掛けがあることで、普段何もない場所が変わっていく。まちの中を回遊化する仕掛けが地域の魅力です。言い換えれば、福岡に住んでいる人そのものが“地域資源”となるのではないのでしょうか。

## ■外国人のもてなしに必要なこと

**帆足** 次に、外国人観光客対応に絞って議論を深めてみます。福岡市が行っている外国人観光客へ向けた取り組みを紹介します。割引特典付きの外国語ガイドブックを制作し観光案内所で配布したり、福岡市の観光サイト「よかなび」では、英語、韓国語、中国語・簡体字、中国語・繁体字の 4 ヶ国語をメインに、ドイツ、タイ、フランス、スペインの計 8 ヶ国語で情報発信をしています。また、3.11 の震災後、福岡の安全なまちの風景の動画や、現在の放射能レベルなどがわかる情報サイトをコンベンションビューローの英語のホームページでたちあげています。各地の案内板には英語、中国語、韓国語を表記しています。また、毎日 14 時から 1 時間ほど、博多のまちをボランティアガイドが無料で案内するサービスもあります。さらにクルーズ船入港の際、留学生に「ウエルカムサポーター」として通訳のサポートをしてもらっています。福岡でさまざまな体験やまち歩きを楽しめるプログラム「ふくおか 福たび」では、外国の方も楽しめる内容で展開。

ビジターズ・インダストリー推進協議会では、「アジアゲートウェイキャンペーン」と称して、釜山市と福岡市と共同で、例えば中国の各都市などでプロモーションなどを行っています。外国の方のもてなしや対応で、今以上に必要なことは何でしょうか。

**井手** よそから来られる方にとって、まず「安心」がキーワードでしょう。お得感、特別感、オリジナリティーがあるとさらにいい。当日や前日に予約ができる仕組みなど、お客さまの利便性に応えることも必要です。私たちが西鉄さんと共同で作った「ふくおか体験バスチケット」は、当日または前日に予約して、女性 1 人でも体験できるプログラムです。ホストクラブや中洲のクラブは元々地域にある資源です。それをバスチケットと組み合わせることで、「安心・お得・オリジナル」な体験が味わえるの

です。また、まち歩きのガイドも大きな要素です。九州で最もガイドが組織化されているのは「長崎さるく」でしょう。ここでは、40 数種類のまち歩きコースを用意し、お客さまを常に受け入れています。



**上田** 案内板の紹介文の短さには、物足りなさを感じますね。ガイドが一緒だと面白い発見がありますから、ぜひガイド付きでまちを楽しんでいただきたい。秋の「秋博」では、ガイド付きの八つのコースを設けました。年間を通してご案内できればいいと私も思います。ただ、ガイド個人の力には限界があるので、福岡市と一緒に取り組み、市全体を網羅するような態勢をつくり、たくさんのメンバーで協力していかなければなりません。

### ■情報発信の工夫

**帆足** こうしたい取り組みがあっても、観光客に届かなければもったいないことになります。情報発信の仕方についてどう考えていますか。



**山下** まち歩きの企画は全国で取り組まれています。行政はそれらを「ホームページで情報発信している」と言いますが、事前に下調べして出発する観光客は、実はそれほどいません。「長崎さるく」が素晴らしいのは、長崎に入ってから申し込める点です。受け入れ側には負担が大きいです。長崎市はこれを「インフラ整備」と割り切り予算を付けています。それから、ホテルは一般にチェックイン時にお客さまの予定を尋ねませんよね。ところが、アートで知られる瀬戸内海の直島（香川県）に宿泊した時、ホテルのフロントで「地中美術館」のナイトプログラムや「家プロジェクト」のチケットを紹介されて驚きました。情報は瞬間、瞬間に発信していくことが非常に大事です。外国人向けの情報発信も重要です。大震災直後のニュース映像で、被災地から遠く離れた地域でマスクを着けた花粉症の日本人を見て、その地域も放射能の危険性が高いと懸念されました。日本の地方都市の情報は海外の人に十分届いていないのが現状です。JTBの社員はブログやツイッター、Facebook を使って、マスクのことやコンビニの電気が消えている理由などを伝えています。スマートフォンの活用など、情報発信については、すべきことがたくさんあると思います。

**井手** 東京や大阪の旅行会社さんが作る福岡ツアーを「発地型商品」と呼ぶのに対して、来ていただく側、つまり福岡の人たちが作るものを「着地型商品」といいます。着地型商品を売るにはツイッターや Facebook、ブログによる発信がまさに向いています。「私が薦めたい」「私の嫁にぜひ行かせたい」といった企画に対して、「いいね」ボタンを押してもらおう。「私」に信頼性があり、「私」がいいという情報がお客さまを呼び込む力になるため、“一人称マーケティング”とも言えます。また、外国人にとって九州は「島」です。「島」の玄関口である福岡市が、「島」全体の情報発信をできていないのは残念です。「福岡以外に別府にも嬉野にも行って見て」という気持ちや、九州のハブ拠点として福岡の観光案内所が全九州の情報を持つくらいの気構えがあってもいいのではないのでしょうか。

### ■25年後に向けた取り組みは

**帆足** 25年後を目指して福岡が観光面で伸びていくには、どうしていけばよいのでしょうか。

**山下** 福岡市民が国際観光都市に住んでいる感覚を徹底して持たなければいけないと思います。大震災後も福岡だけは元気がよく、全国からは九州でビジネスができるのでは、と非常に注目しています。そういう素晴らしい地域に住んでいる自覚を持って欲しいですね。それから「福岡に来て下さい」と言うだけでなく、自分たちも飛び出して行くことです。出国率は東京が 24%、大阪が 14~15%なのに対して、福岡は 11%にとどまり、年間約 50 万人しか海外に出掛けていません。週末はアジアへ気軽に出

掛けるなどして、できれば15%は海外へ行ってほしい。皆さんが海外で現地の人と交流することが、福岡の観光にとって実は大事なのです。

上田 祭りのような伝統や文化は、子どもたちが大人の中に交じっているため、自然と根付いていきます。けれども博多のまちは子どもが少ないので、交流人口を増やしていかないとはいけません。ハード面では、そこにいけば博多のものが全部そろそろような、博多の名所となる「門前町」をつくりたいと思っています。イメージとしては、それぞれの職人が博多人形を作ったり、博多織を織ったりしている様子などが見られる空間ですね。市役所へのお願いとしては、ぜひ「博多部局」を作ってもらい、博多のまち中に観光地をつくる方向を示していただきたいですね。福岡では、初期投資の資金提供があれば、あとは民間が「俺も、俺も」とついてきますから。「地元にたくさんいいものがあるんだよ」と言っていけば、まち全体の活性化にもつながるのではないのでしょうか。



井手 「データで語る福岡の今・未来」を見て興味深かったのは、福岡は「住んでよかったまち」「住んでみたいまち」の上位にランキングされながら、観光の部分では弱いというギャップです。そこで戦略の一つとして、留学生の積極的な受け入れを市の施策としてやってはどうでしょう。2～3年後に韓国、中国などの母国へ帰った留学生たちに、「福岡はいいね」と言ってもらうのです。これからの「集客交流」では、お客さまを受け入れるワンストップ窓口の「観光まちづくりプラットフォーム」が必要と言われ、観光庁でそれを作る動きが出ています。これまでの窓口だった観光協会やコンベンションビューローのような大きなものではなく、NPOなどを含む小さな団体がそれぞれの強みを活かしてワンストップの情報窓口になるのです。小さな団体をつなぎ合わせる戦略で、「第3の公」と呼ばれます。それらが同時多発的に情報発信し、観光客の受け入れを担うようなことができないか考えています。何百年も続いている立派な「山笠」を編集加工したり、博多の生活スタイルを「博多スタイル」として永遠に残しながら、お客さまが見やすいようにしたり、お金をいただいてガイドする仕組みを、誰かが作るとよいのですが。

山下 「観光まちづくりプラットフォーム」ができると、集客交流の分野でどんどんビジネスが生まれます。新しいものを作るというより、皆さんの地域にあるものを使ったビジネスができるのです。「バルウォーク福岡」や「体験バス」もその一つです。観光業というよりソーシャルビジネスに近く、誰でも参加できます。今、各地で民間や行政が一堂に会し、観光客と地域の人を結ぶ新しい組織作りの動きが進んでいます。軸足を「観光」から「集客交流」に変えたまちづくりを考えていただきたいと思います。それから、「福岡市民がどれだけまちを面白がっているか」も大事でしょう。観光客のためというより、地域住民が主役になることです。それがほかの地域の人の旅心をくすぐるのですから。



帆足 今日は原点回帰と言うのでしょうか、「自分たちの住んでいるまちを見つめ直し、魅力ある素材にして、分かりやすく利用しやすく変えながら、自分たちも面白がって発信していく」という結論が出たように思います。そのためには、福岡市に住む皆さん一人一人の動きが大事になります。「いらっしゃい」とお客さまをお迎えする「おもてなしのまち・福岡」を育んでいきたいと思っています。

## 会場からの質問

**質問1** 福岡の食といえばラーメンですが、ラーメンを通した福岡観光PRのヒントを教えてください。

山下 「食は胃袋で食べるのではなく、脳で食べる」と聞いたことがあります。観光と食を結び付けるには、食にまつわるストーリー性が必要です。博多ラーメンの歴史的背景を含めた物語性や作法、食

べられる場所や時間などで、集客力を上げていけるのではないのでしょうか。

**質問 2** 留学生に福岡を売り込んでいくためには、どんな工夫が求められるのでしょうか。

**井手** 外国人に食を楽しんでもらいたくても、宗教上の制約があるケースがあります。特にイスラム教の方は「ハラール」といって豚肉は食べません。そうしたことにも対応していく必要があります。

**山下** イスラム圏には裕福な人が多く、観光庁は今年の「ビジット・ジャパン・キャンペーン」にサウジアラビアを加えました。イスラム圏は巨大マーケットで、レストランやホテルでハラール食に対応することは必須になっています。今後、福岡のホテルでも、ビュッフェ会場に食材の表示がされていくでしょう。国際観光都市を目指すのであれば、飲食店の方々も勉強していただきたいですね。留学生を呼ぶために一番重要なのは、彼らの困り事を減らして暮らしやすくする環境づくりです。アルバイト先の確保なども含まれます。また、福岡市で学んだ留学生が、市内で就職しやすい環境が整うと、福岡に行きたくなくなるでしょう。そういう点で民間の力も必要です。



### 3. 資料

#### (1) パネリストのプロフィール

井手 修身 氏 (NPO 法人アイデア九州・アジア代表)

アイデアパートナーズ株式会社代表取締役、NPO 法人アイデア九州・アジア理事長  
株式会社リクルートで、地域活性化事業部、旅行情報「じゃらん」事業、『観光会議きゅうしゅう』編集長を経て、2006年 「人材×マーケティング」で観光・集客事業の再生を行う会社『アイデアパートナーズ(株)』を起業し、九州を中心に旅館・ホテルの再生支援と地域活性化のプランニングに携わる。

2010年『NPO法人アイデア九州・アジア』を設立し、九州とアジアを繋ぐ新しい中間支援組織を仕掛ける。2010年11月に福岡の街を飲み食べ歩きするまちづくりイベント「バルウォーク福岡」を開催する。内閣官房『地域活性化伝道師』、総務省『地域力創造アドバイザー』他。

上田 啓蔵 氏 (「はかた部ランド協議会」議長)

西門蒲鉾本店代表。昭和23年生。まねき蒲鉾(大阪市)にて修業後、西門蒲鉾本店入社。先代社長(上田利一)死去により社長(三代目)就任。博多祇園山笠には、博多祇園山笠恵比須流西門・中小路相談役(元・町総代)として関わる。その他にも、はかた部ランド協議会議長、博多町人文化連盟事務局、博多情緒めぐり実行委員会会長など博多部の地域活動に数多く携わっている。

山下 真輝 氏 (株 JTB 旅行事業本部地域交流ビジネス推進室)

平成5年株式会社 JTB に入社し、大分支店に配属。平成20年に株式会社 JTB 九州本社の地域活性化事業推進室長に就任し、福岡市ビジターズインダストリー推進協議会戦略ワーキング委員として福岡市の国際観光都市づくりにも関わる。平成22年2月より JTB グループ本社において観光立国推進担当マネージャーとして観光庁における様々な政策に関わり、全国各地の観光振興のサポートや訪日外国人観戦客誘致、受入体制整備なども行っている。

帆足 千恵 氏 (財福岡観光コンベンションビューロー)

1966年生まれ。九州大学社会学部卒業後、法務省入省、保護局福岡保護観察所勤務。90年株式会社プランニング秀巧社入社「シティ情報ふくおか」編集や別冊の編集、旅行情報誌をてがける。01年リクルート「九州じゃらん」で外国人を誘客するインバウンド事業を開始。04年西日本リビング新聞社、09年5月より財団法人福岡観光コンベンションビューロー広報事業部広報事業係長。業務のかたわら、韓国人向け九州の宿泊施設が予約できるサイト「九州路」アドバイザーなど。

(2) 配布資料

**新VISION**  
アジアのリーダー都市  
ふくおかプロジェクト

# アジアのリーダー都市 ふくおか!プロジェクト

## 第4回 フォーラム

**日時** 2011年7月9日(土)  
開演14:30(17:00終了予定)

**会場** 博多小学校 表現の舞台  
(福岡市博多区奈良屋町1-38)

**内容**

14:30 **開会**  
**講演**  
「祇園山笠と博多のまち」  
上田啓蔵氏(はかた部ランド協議会議長)

15:00 **データで語る福岡の今・未来**  
山下永子氏((財)福岡アジア都市研究所専門研究員)

15:20 **休憩**

15:30 **パネルディスカッション**  
**テーマ** おもてなしが育むまち

■パネリスト 井手修身氏(NPO法人イデア九州・アジア代表)  
上田啓蔵氏(はかた部ランド協議会議長)  
山下真輝氏(JTB旅行事業本部地域交流ビジネス推進室)

■コーディネーター 帆足千恵氏(福岡観光コンベンションビューロー)

17:00 **閉会**

主催：福岡市

### プロフィール



**パネリスト**

**井手修身氏**  
NPO法人イデア九州・アジア代表  
イデアパートナーズ代表取締役

関リクルートで、地域活性化事業部旅行情報「じゃらん」事業、『観光会議きゅうしゅう』編集長を経て、2006年「人材×マーケティング」で観光・集客事業の再生を行う会社「イデアパートナーズ」を起業し、九州を中心に旅館・ホテルの再生支援と地域活性化のプランニングに携わる。2010年『NPO法人イデア九州・アジア』を設立し、九州とアジアを繋ぐ新しい中間支援組織を仕掛ける。11月に福岡の街を飲み食べ歩きするまちづくりイベント「ハレウォーク福岡」を開催する。内閣官房『地域活性化伝道師』、総務省『地域力創造アドバイザー』。



**パネリスト**

**上田啓蔵氏**  
はかた部ランド協議会議長

西門蒲鉾本店代表、昭和23年生まれ。まねき蒲鉾(大阪市)にて修業後、西門蒲鉾本店入社。先代社長(上田利一)死去により社長(三代目)就任。博多祇園山笠には、博多祇園山笠思比須流西門・中小路相談役(元・町殿代)として関わる。その他にも、はかた部ランド協議会議長、博多町人文化連盟事務局長、博多情緒めぐり実行委員会会長など博多の地域活動に数多く携わっている。



**パネリスト**

**山下真輝氏**  
JTB旅行事業本部  
地域交流ビジネス推進室

平成5年関 JTB に入社し、大分支店に配属。平成20年に関 JTB 九州本社の地域活性化事業推進室長に就任し、福岡市ビジネスインタストリー推進協議会戦略ワーキング委員として福岡市の国際観光都市づくりに関わる。平成22年2月より JTB グループ本社において観光立国推進担当マネージャーとして観光庁における様々な政策に関わり、全国各地の観光振興のサポートや訪日外国人観光客誘致、受入体制整備なども行っている。



**コーディネーター**

**帆足千恵氏**  
福岡観光コンベンションビューロー

1966年生まれ。九州大学社会学部卒業後、法務省入省。保護局福岡保護観察所勤務。90年関プランニング秀巧社入社。シティ情報ふくおか編集や別冊の編集、旅行情報誌をてがける。01年リクルート「九州じゃらん」で外国人を誘客するインバウンド事業を開始。04年西日本リビング新聞社、09年5月より(財)福岡観光コンベンションビューロー広報事業部広報事業係長。業務のかたわら、韓国人向け九州の宿泊施設が予約できるサイト「九州路」アドバイザーなど。

## 第5回

## 人をひきつけるクリエイティブなまち

### 1. 概要

- ▽タイトル 「人をひきつけるクリエイティブなまち」  
▽日時 7月16日(土) 14時30分開会/17時00分閉会  
▽会場 福岡アジア美術館あじびホール  
▽内容 ・データで語る福岡の今・未来  
・パネルディスカッション  
▽パネリスト 伊藤 総研 氏 (伊藤総研㈱代表)  
江口 カン 氏 (KOO-KI 代表/映像ディレクター)  
藤 浩志 氏 (藤浩志企画制作室/美術作家)  
▽コーディネーター 伊藤 敬生 氏 (九州アートディレクターズクラブ代表)

### 2. 提言内容、会場の様子

第5回フォーラムは7月16日、福岡アジア美術館・あじびホール(博多区下川端町)で開かれ、福岡アジア都市研究所の専門研究員・山下永子氏による解説「データで語る福岡の今・未来」に続いて行われたパネルディスカッションでは、「人をひきつけるクリエイティブなまち」をテーマに、ゲスト、コーディネーターの個性豊かな4人が熱い論議で会場を沸かせました。



#### ◎パネルディスカッション

##### クリエイティブな人や要素が絡む仕組みが必要

- アイデア勝負の環境がクリエイティブなジャンプ力を鍛える 伊藤敬生氏  
「対話の場」や「地域実験の場」が面白いまちをつくる 藤氏  
満たされた現状を超え、他の都市への発信・提案を 江口氏  
「動くんだったら動こう」の強さが不足 伊藤総研氏

(文中敬称略)

#### ■自己紹介

**伊藤敬** 今日、福岡というまちが持つ特徴やその秘密を、ゲストの皆さんと話していきます。それぞれの自己紹介を、これまで手掛けた作品の写真や映像を映しながらお願いします。まず私というのは、電通九州でアートディレクターの仕事をしています。僕はドキュメンタリーで広告を作ることが多く、例えば天神のファッションビル「マツヤレディス」(現・ミーナ天神)のサマーセールで「Sale」というまちがオーストラリアにあると知り、現地へ行って「Saleまで5\*」とか「Saleへようこそ」などという表示をグラフィックで展開しました。広告業界で「福岡はすごく面白い」とよく言われますが、その理由は、「いいライバルがたくさんいるので必然的に作品の質が上がり、同時にクリエイターらの個性がついてくる」からではないでしょうか。デザインで九州経済を元気にできたらいいな、と考えています。



**藤** 仕事を東京から出身地の鹿児島に移していた1994年、「第4回アジア美術展」に出品するため福岡市に3カ月間住んだのが、僕と福岡との縁の始まりです。同展でアジアの作家たちと知り合い、僕の中にあつた「自分たちの土地の風景が（開発などで）失われていることへの違和感」を初めて共有できました。当時は福岡アジア美術館の建設などで福岡が動いていて、「ミュージアム・シティ・プロジェクト」と称して、福博のまち中でいろんな表現活動をしようとする人がたくさんいて、活動を支える仕組みがありました。今回のフォーラムのテーマについては、クリエイティブなものの「鑑賞者」を増やしたいのか、「作る人」を増やしたいのかで、話は大きく変わってきます。「作る側」の立場で言えば、自分の中にある「もやもや」が、いろんな人と出会い、対話することで、「何かが生まれるかもしれない」というイメージとしてわき出てきます。僕は、そのイメージを作り出そうという「態度」を示している人、ともいえます。文化、芸術など完成されたものばかりが求められるけれど、実際に福岡でそれを作る所、作業場がほとんどないのに「作る人」を集めようとしているのはおかしな話です。「対話の場」や「地域実験の場」が新しい連鎖につながって面白い人を呼び込み、面白い時間が過ごせるまちに福岡がなればいいな、と思っています。

**伊藤総** 僕は、メディアの仕事と広告作りの仕事が半々というスタンスでいます。雑誌「BRUTUS」では、「松本人志特集」「吉本隆明特集」などの企画を立ち上げ、中心的役割でそれぞれの特集を手掛けました。ウェブと既存メディアの組み合わせで新しいことができないかいろいろ試してもいます。例えば、「ほぼ日刊イトイ新聞」13周年企画で、「イトイ」を数字にした1101人で東京ドームへ野球観戦に行き、その様子を動画共有サービス「Ustream」とコミュニケーション・サービス「Twitter」を使い、ウェブの中か外かが分からなくなるような状況を楽しむこともやってみました。出身は福岡ですが、現在は東京で仕事をしています。今年から月1回ペースで、「3・11」以降は週1回ペースで福岡に帰ってきています。

**江口** 映像でエンターテインメントがやりたくて仲間と「KOO-KI」という会社をつくりました。ジョージアの缶コーヒーのCMなど、「熱い男（を描く）と言えば江口カン」とみられているようです。福岡をベースに仕事をしていましたが、自分が作ったCMをたくさんの人に見てほしい、より面白いものを作りたいと思っているうちに、東京の仕事の方が増え、今は毎週東京に行っています。「福岡パルコ」のCMもやりましたが、その時は福岡のことをすごく考えましたね。「パルコ様が来た」みたいに見える福岡の人たちは「なんだ偉そうに」と反発すると考え、「頑張ってますんで応援してください」と下からいく態度が感じられるものになりました。最近、携帯ドラマ「つぶやき三四郎」を作りました。

#### ■東京と比べた福岡の魅力

**伊藤敬** 広告業界で福岡にはクリエイティブな人がたくさんいます。どんな魅力がその人たちを引き付けているのでしょうか。そのクリエイティブさを、今後はどう伸ばしていけばいいのでしょうか。

**藤** 広告はこうあるべきだ、芸術はこうあるべきだという「重石」が、福岡にもあるのですが、「重石」をかわしながらの遊びが多い気がします。そこで重要なのは、遊びを面白がる仲間の存在です。

**伊藤敬** 広告界の事情を話せば、福岡は東京に比べると制作予算が非常に少ないです。その分、アイデアで勝負するしかないからクリエイティブなジャンプができる素地があるのではないのでしょうか。

**江口** 「重石」については、東京の方が圧倒的に大きいですね。簡単に言えば「(クライアントにとっては)金をたくさん払ってるから俺の言うことを聞いてくれよ」ということです。東京ではなかなかありませんが、福岡の仕事ではクライアント企業の社長と直接話ができたりします。「この社長を笑わせたらCMは成功だな」とターゲットを明確にして仕事に入ることができるのがいいですね。



**伊藤 総** 今日のテーマは「人をひきつけるクリエイティブなまち」ですが、僕は福岡のまちをクリエイティブと感じたことは、正直言ってありません。「クリエイティブなまち」をクリエイティブな人や要素の集積地の意味で考えると、しっくりきませんね。伊藤敬生さん、藤さん、江口さんがいて何かしよう、なら分かるんですが。ところで「3・11」以降、東京の人の価値観は大きく変わりました。みんな、自分の地元のことを考え、「必ずしも東京でなくてもよくない？」となった。以前、僕の中には東京を去り福岡で仕事をするのは“都落ち”みたいなイメージがあったけれど、今は逆に「地方で仕事をする方がかっこよくない？」という感覚があります。藤さんが言った、「場をつくる」という状況が福岡に生まれれば、みんながどんどん流通していくんじゃないかと思います。

**伊藤 敬** このテーマで話をもらった時、「福岡をクリエイティブなまちにしたい」というところまで、正直に言えば思っていないませんでした。福岡は飯がうまい、空港まで近いなど暮らしやすい、呼吸しやすいから、ここを拠点にしていこうという感覚です。震災以降、東京のクリエイターたちが福岡に移住していますが、だからといって福岡の仕事をしているわけではない。生活基盤を置く場所として福岡を選んでいるのが現状では。



**江口** 確かに、面白い作品を作って人を喜ばせるのに、飯がうまい、住んでいて気持ちがいいというのは、重要な要素だと思います。福岡に来た知人たちは、「沖縄やハワイの空港に降り立った時と同じような、“いいムードのざわざわ感”がするまち」と言いますね。ところで僕の売りは、あんな作品を「福岡に住んでいるのに」作っている、ということになっているから、意地でも福岡から東京に通おうと思っています（笑）。

**藤** 僕が東京を離れた理由の一つは、東京のアートシーンの中にいることで、自分の時間の確保が非常に難しいと感じたことです。もう一つは作品づくりで非常に重要な「余裕のある空間」の問題でした。当時、これからの制作拠点を選ぶのに、①夕日が沈む海の近く②敷地が広くて自由に使い、家賃も安い農家のようなところ③国際空港まで1時間で行けるところ—という3つの条件を挙げ、世界地図で探しました。いま糸島市内で借りているのは養鶏場跡です。とにかく広いから、2万本のペットボトルを使った作品なども手掛けることができました。それから、一緒にやっていく人の層の厚みという問題もありました。東京は美術関連者だけでも相当多く、銀座、神田、青山など活動のエリアや、作品の属性や傾向で細かく分化されていて、実は狭い世界の人たちとばかり顔を合わせていました。福岡で飲んでいると、役所の人、企業の人、農家さん、学生など年齢も職業もバラバラな人たちと出会えます。福岡くらの都市規模の方が、いろいろな人とつながりやすく、そこも福岡の魅力に映ります。



**伊藤 敬** 東京にたまに行くときとすごくいい展覧会などを見て、いろいろな刺激を受け吸収することが、僕の中では重要です。その得るものは、東京に住んでいた時より離れた今の方が多気がします。広告業界の仕事の仕方を言えば、分業化が進んでいる東京と違い、福岡ではデザイナーがコピーも書いてしまうなど、何でも1人でやらないといけなかったりします。結果として、自立までの期間が早く、人材

が育ちやすい環境にあると言えます。

**伊藤 総** そもそも、「クリエイティブなまち」というのが、映像や美術を作り出すことだとすると、まち全体というより個々のクリエイターのテクニカルな話っぽくなる気がします。福岡に時々帰ってきて、「この活動は面白い！」「このプロジェクトは面白い！」ということがないですね。滋賀県で米を作る若者約 30 人が集まり、「どうやったらこの産業を面白くできるか」と、自分たちの文化をつくろうとする動き、言い換えれば価値変換に挑む動きがあります。「クリエイティブなまち」というのは、勢いがある人たちが「次の時代」に行こうと動いているまちを指すのではないのでしょうか。

**江口** その意味で、福岡は幸せ過ぎ、恵まれ過ぎているため問題意識がかき立てられにくくなり、総研さんが言うような「クリエイティブなまち」にはなりにくいかもしれませんね。ぶっちゃけて言うと、福岡の人は地元のクリエイターに対して、リアクションが薄い感じがします。ところが、その人が海外や東京で評価されると、ものすごく受け入れてくれる。

**藤** 僕も最初は外から来た人だったので、多少ちやほやされましたが、3年でみんな飽きますね(笑)。クリエイティブな活動や作品というのは、それを期待したり鑑賞したいと求めている人がいないと、成り立ちません。

## ■福岡への期待と注文

**伊藤 敬** 福岡のまちはこれから、どういうふうになっていけばいいと思いますか。注文も含めてお願いします。

**江口** クリエイター個々の話でいくと、これまでの話で出てきたように福岡は実験、練習がしやすい環境にあるから、人が育ちやすい。ところが、経済的な部分を含めてアウトプットする場が少ないため、育った人材が流出しています。福岡のまちを例えると、家庭や生活が満たされている人間といった感じ。「このままでいいんじゃないの」という問題意識の弱さに根本原因がある気がします。その状態から上を目指すのは相当努力が要って難しいこと。それでも福岡が、他の都市を引っ張るような発信や提案ができるか、ということが迫られているのではないのでしょうか。東区の人工島に映画村みたいな巨大な撮影所を作り、バンバン撮影できるといいなと思うけれど、「利益が出ない」という調査結果が出たことで、話が終わっています。そこで、「何とかしていこうよ」とならないのが福岡なのではないでしょうか。

**伊藤 敬** いろんなことに恵まれ、いろんな可能性があるから、逆に何かに特化できない、という面があるかもしれませんね。だまされたと思いついて特化してやらないといけないのでは。

**伊藤 総** 福岡は「個」の力はすごくいいですよ。でも、このまちの顔が見えていない気がします。「アジアとつながるまち」と決まり文句のように言われますが、本当にアジアに溶け込んでますか？福岡に居るとアジアに行きたくなる気分になりますか？ なにか優しい感じ、見合っている感じがして、「動くんだったら動こう」という強さが足りないと感じます。巨大撮影所の話でも、それをつくるためのクリエイティブなアイデアは、果たして出されたんでしょうか。



**藤** 福岡が住みやすいというなら、「今のままでいいじゃん」というものを本当に突き詰めていけば、一つの自分を超越する表現になり得るかもしれません。あるいは全く違うところから次の世代の価値観、表現が出てくると思っています。「クリエイティブシティーをつくろう」という大きな重石をすること自体がよくないのでは。感性をつくる、心を使う機会を提供するのは本来、文化施設の役割かもしれませんが、まちの中でいろんな活動をすることで何かがつながっていく仕組みが、福岡のまちでは未開拓に見えます。

**伊藤 敬** 今はいろんなものが再構築される時代です。デザイン、建築、アートな人など業界の垣根が取り払われボーダレスになっています。いろんな人のスキルやものを組み合わせ、ぶち当たっている問題が解決できれば、福岡のまちは次の高いステージに上がります。そのタイミングにきていると考えています。

## 会場からの質問

**質問** クリエイティブなまちになろうとすれば、変わった学生が集まる装置である総合芸術大学があった方がよいと思います。クリエイティブさと大学の関わりについて、どのように考えますか。



**藤** 僕は、芸術大学では日本で一番古い京都市立芸術大学を出ました。その大学は有名な講師がいないなど、芸術に対する「重石」がなく、当時は芸術のマーケットもギャラリーもなかったから、学生は自分たちで活動をつくらないといけなかったんです。福岡には「つくる場」を設けるのと同時に、「育てる場」や「いろんな人が集まる仕組み」が必要だと思います。

**江口** 僕は九州芸術工科大学（現・九州大学芸術工学部）出身です。学内には入学8年目で4年生をしている人などもいて、藤さんの言う“もやもや”を考える場でもありました。福岡市がそういう学校をつくってくれるといいですね。

## 3. 資料

### (1) パネリスト・コーディネーターのプロフィール

伊藤 総研 氏（伊藤総研(株)代表）

1974年、福岡県生まれ。県立修猷館高校を経て、横浜国立大学卒。在学時より、フリーランスとして活動。雑誌編集（「BRUTUS」「Casa BRUTUS」）、広告企画、映像制作、WEB制作、構成作家、カフェ、ショップ運営、など、現在に至るまで活動は多岐に渡る。

江口 カン 氏（KOO-KI 代表／映像ディレクター）

'67年福岡生まれ。CMや短編映画、ドラマなどの演出を手がける。人間のひた向きの姿を繊細かつダイナミックに描くことに定評がある。'09年カンヌ国際広告祭金賞、Boards Magazine（カナダ）「Directors to Watch」選出。'10年&'11年クリオ賞（US）審査員。

藤 浩志 氏（藤浩志企画制作室／美術作家）

京都市立芸術大学大学院美術研究科修了後、パプアニューギニア国立芸術学校講師、都市計画事務所勤務を経て藤浩志企画制作室を設立。対話と地域実験の場を作る美術類のデモンストラーションを実践。<http://geco.jp>

伊藤 敬生 氏（九州アートディレクターズクラブ代表）

1962年長崎市生まれ。長崎大学教育学部美術科卒業後株式会社サンリオ入社。商品開発に従事。以後、アートディレクター奥脇吉光氏に師事。セゾンカード・ヤクルト珈琲たいむ・住友林業・シャープ・宝酒造・集英社・ポリスターレコード等の広告制作に携わる。その後フリーを経て、電通九州入社。現在、NTTドコモ・MrMax・JR九州・福岡地所・九州大学・TAMAYA・西日本シティ銀行・長崎県・霧島酒造・イムズ・如水庵等を担当。同社クリエイティブディレクション1部部長。九州アートディレクターズクラブ代表。

(2) 配布資料

新VISION  
アジアのリーダー都市  
ふくおか!プロジェクト

## アジアのリーダー都市 ふくおか!プロジェクト

### 第5回 フォーラム

**日時** 2011年7月16日(土)  
開場 14:00 開演 14:30(17:00終了予定)

**会場** 福岡アジア美術館・8階あじびホール  
(福岡市博多区下川端町3-1 リバレインセンタービル8階)

**内容**

14:30 **開会**

**データで語る福岡の今・未来**  
山下永子氏(財)福岡アジア都市研究所専門研究員)

---

14:50 **トークセッション**

**テーマ 人をひきつけるクリエイティブなまち**

**■ゲスト**

- 伊藤総研氏 (伊藤総研代表)
- 江口カン氏 (KOO-KI代表/映像ディレクター)
- 藤 浩志氏 (藤浩志企画制作室/美術作家)

**■コーディネーター** 伊藤敬生氏 (九州アートディレクターズクラブ代表)

17:00 **閉会**

主催：福岡市

**プロフィール**



ゲスト

**伊藤総研氏**  
伊藤総研代表

1974年、福岡県生まれ。県立修猷館高校を経て、横浜国立大学卒。在学時より、フリーランスとして活動。雑誌編集(FRUTUS/Casa BRUTUS)、広告企画、映像制作、WEB制作、構成作家、カフェ、ショップ運営、など、現在に至るまで活動は多岐に渡る。



ゲスト

**江口カン氏**  
KOO-KI代表/映像ディレクター

'67年福岡生まれ。CMや短編映画、ドラマなどの演出を手がける。人間のひた向きな姿を題材にフジテレビに描くことに定評がある。'09年カンヌ国際広告祭金賞、Boards Magazine (カナダ) [Directors to Watch]選出、'10年&'11年クリオ賞(US)審査員。



ゲスト

**藤 浩志氏**  
藤浩志企画制作室/美術作家

京都市立芸術大学大学院美術研究科修了後、ハブアニューギニア国立芸術学校講師、都市計画事務所勤務を経て藤浩志企画制作室を設立。対話と地域実践の場を作る美術類のデモンストレーションを実践。  
<http://geco.jp>



コーディネーター

**伊藤敬生氏**  
九州アートディレクターズクラブ代表

1962年長崎市生まれ。長崎大学教育学部美術科卒業後株式会社サンリオ入社。商品開発に従事。以後、アートディレクター奥脇吉光氏に師事。セゾンカード・ヤクルト・珈琲たいむ・住友林業・シャープ・宝酒造・集英社・ポリスターレコード等の広告制作に携わる。その後フリーを経て、電通九州入社。現在、NTT ドコモ・MrMax・JR九州・福岡地所・九州大学・TAMAYA・西日本シティ銀行・長崎県・露島酒造・イムズ・如水庵等を担当。同社クリエイティブディレクション 1 部門長。九州アートディレクターズクラブ代表。

34

## 1. 概要

- ▽タイトル 「スポーツとまちの元気」  
 ▽日時 7月22日(金) 19時00分開会/21時00分閉会  
 ▽会場 福岡アジア美術館・あじびホール  
 ▽内容  
 ・データで語る福岡の今・未来  
 ・パネルディスカッション  
 ▽パネリスト 伊藤 清隆 氏 (リーフラス㈱代表取締役社長)  
 小林 至 氏 (福岡ソフトバンクホークス㈱取締役)  
 下田 功 氏 (アビスパ福岡㈱代表取締役専務)  
 ▽コーディネーター 森本 博樹 氏 (西日本新聞社スポーツ本部長)

## 2. 提言内容、会場の様子

第6回フォーラムは7月22日、福岡アジア美術館・8階あじびホール(博多区下川端町)で開催されました。福岡アジア都市研究所専門研究員・山下永子氏による「データで語る福岡の今・未来」の解説の後、プロスポーツや子どもたちのスポーツに関わる仕事をしているパネリスト3人が、「スポーツとまちの元気」をテーマにさまざまな意見を交わしました。



## ◎パネルディスカッション

## 「する」「見る」スポーツで子どもの健全育成とまちの存在感アップを

- 正しい指導者を入れ中学部活の正常化を 伊藤氏  
 地域愛の象徴・ホークスは幸せ 小林氏  
 スポーツクラブがまちの「公共財産」になれば 下田氏  
 福岡市に高校野球決勝が開ける球場を 森本氏

(文中敬称略)

## ■自己紹介と福岡・九州のスポーツ活動

**森本** 今日は、「なでしこジャパン」が世界一に輝いた後といういいタイミングでの開催です。まず、パネリストの皆さんに自己紹介を兼ねて、福岡市・九州のスポーツ活動について語ってもらいます。

**小林** 私は、今から20年ほど前、東京大学野球部を経て、ロッテに投手として入団し、3年間、プロ選手として過ごしました。以降は、アメリカで7年ほど過ごし、日本に戻ってきてからは、大学でスポーツ経営学などを教えておりました折、ソフトバンクホークスのオーナー・孫正義氏に声を掛けられ、再び、野球の世界に戻ってくることになりました。以来、7年間がたちました。福岡市と弊社との関係では、今年7月に「包括連携協定」を結びました。多方面で連携し、相互の魅力や福岡市のプレゼンス(存在感)を高めていく仕組みを整えていきます。ファンの皆さまに喜んでもらい、市に貢献するにはホークスが優勝することです。秋には日本一のパレードを行い、福岡、九州の経済活性化にも寄与したいです。



**伊藤** 当社は小学生以下の子どもたちを対象にした、野球、サッカー、剣道、空手、バスケット、テニスのスポーツスクールを運営している会社です。会員は全国に2万8千人ほど。スポーツ以外ではごみ拾いなどを通して環境を考えさせる活動や、田植え、文化伝統などの体験活動も行っています。年間5万人が参加するスポーツ合宿では、自立心の育成を行い、サッカーを通じた国際交流も図っています。また、中学校に社員を派遣し「部活動の正常化」を目指してもいます。私たちは、子どもたちのスポーツ環境など社会が抱える問題を、公園など公的空間を利用してビジネスの手法を使いながら解決する「ソーシャルビジネス」を展開しているのです。スポーツを通して子どもたちを良くし、それによって社会全体を良くしていきたい。今後は福岡からアジア、世界へ出て行きたいと思っています。

**下田** 私はアビスパ福岡にきて16年です。大学までサッカーをしていたこともあり、当初は現場でプロ選手の指導もしていました。その後は子どもたちの指導や、スポーツを通じたまちづくり、人づくりなどの地域貢献活動に取り組んできました。スポーツには、仲間と一緒に体を動かす喜びや楽しさがあります。福岡市内の小学校、幼稚園を訪れての集団遊び、ドッジボール大会、大人も含めたサッカースクール、高齢者のボール遊びなどを通して、体を動かすことやスポーツの素晴らしさを体験してもらっています。また、障害者スポーツのブラインドサッカーの全国大会を開催していますが、これによってスポーツの新しい価値を発見することもできました。

## ■地域におけるスポーツの役割

**森本** スポーツが社会と地域で担う役割についての考えを聞かせてください。

**下田** スポーツの大きな役割は青少年の健全育成です。昔のような根性論ではなく、子どもたちが自ら考え、自ら力を引き出せるようにすることが大切です。また、閉塞感が漂う今の世の中で、一緒にスポーツをして体を動かすことで心の壁が取り払われる効果もあります。ヤフードームにホークス応援に行き、3万5千人が一体化してつながった感覚を体験しました。スポーツが持つさまざまな価値を社会でどう生かすかが大事です。

**伊藤** 当社のスポーツスクールでも、リーダーシップや思いやり、協調性、コミュニケーション、やる気、根気、そして人間力が身に付くようにしています。スポーツは幼少期、成長期の子どもたちの性格成形に大きな影響を与えます。そのため、体罰やしごきでなく正しい指導法を持つ指導者が、明るく楽しくスポーツに取り組ませ、子どもたちの健全な成長につなげるのが一番大切ではないでしょうか。



**小林** スポーツを通して、相手やルールを尊重することを覚えるのは、社会生活を送る上で大変重要で、効果も大いにあります。また、社会の高齢化で健康保険制度が厳しい状況にある今、「する（Do）スポーツ」が医療費の削減で力を発揮すると言われていています。一方、ソフトバンクホークスは、「見る（See）スポーツ」として、つまり、健全な娯楽として、市民に寄与したいと考えております。コミュニケーションレスの現代に、あいさつ代わりにホークスの勝ち負けが共通の話題となれば、非常にありがたいこと。「する」「見る」の両面で効果があるのはスポーツツーリズムです。ハワイはホノルラマラソンが一大収入源ですし、野球ファンが米国・シアトルに行けば、セーフコ・フィールド（マリナーズの本拠地）に行くでしょう。まちが「するスポーツ」と「見るスポーツ」を持つことで、まちのプレゼンスが高まり、経済的にも潤い、社会に貢献できると考えています。

## ■プロスポーツを支える地域のあり方

**森本** 次に、プロスポーツを支える市民、地域というテーマに移ります。いま、市民や地域に一番支

えてもらいたいのはアビスパ福岡ではないでしょうか。

**下田** アビスパ福岡は、母体企業を持たないクラブです。全てのプロ野球球団そしてJリーグでも経営規模の大きいクラブは、殆どの場合、財政面において母体企業に支えられています。アビスパのような母体企業を持たないクラブは、地域に支えられなければ存続できません。Jリーグではこれまで、いい選手の獲得のためにお金をつぎ込む運営を続け、赤字をため込み大変なことになった例はたくさんあります。欧米には「スポーツクラブはまちが支える」という考え方がありますが、地域がスポーツクラブを“公共財産”として扱うようになれば、市民が支えてくれるはずですが、弱い息子でも応援しない親がいないように、チームが仮に試合に負けても応援し続けてくれる市民・地域を築けるような関係にしないとイケません。アビスパはずっと負けるわけではありません。必ず勝ちます。頑張りますので、よろしくお祈りします。



**森本** アビスパの対極にありそうなソフトバンクはどうですか。

**小林** 個人・法人を問わず、市民はチームを支えるメインプレーヤーであると認識しています。ホークスの年間観客動員数 240 万人は阪神、巨人に次いで 3 番目。市民、県民に支えられて地域に根づき、地域に密着しており、プロ野球界で非常に重要な役割を担っています。一つ言えば、行政、福岡市がもう少し支援してくれればという思いも持っています。アメリカの例ですが、プロスポーツの球場はほとんどが公営です。マリナーズは年間賃料 6 千万円で球場を 24 時間、365 日、自由に使えます。アメリカのようにはいかないかもしれませんが、もう少し、地域にトッププロスポーツがある意味を再認識していただければなあ、という思いはもっております。

**伊藤** 当社は、なでしこリーグ「福岡 J・アンクラス」のマネジメント支援をしています。アンクラス選手はみんな、アルバイトで生計を立てていたので、選手が先生となる女子サッカースクールを開講しました。スクール会員の子どもたち 200 人が、家族と一緒に先生がプレーするアンクラスの試合観戦に行きます。それで観客動員数が見込めます。地域で女子サッカー人口が千人を超えるとコンスタントに動員できます。これがビジネスモデル。この方法だと企業スポンサーだけに頼らない自主運営が可能です。

## ■福岡市の優位性と課題

**森本** スポーツの観点で見た福岡市の優位性と課題は何ですか。

**小林** 福岡はアジアのゲートウエーだから、距離的な近さをどう生かすか。プロ野球で言えば、韓国、台湾、中国などの選手を球団で獲得すれば、観光客の誘致につなげやすい環境にあります。また、地元意識が非常に強いのも福岡の優位性でしょう。ホークスが、地域愛、地域コミュニティのアイデンティティの象徴として思ってもらえているのは、幸せなことです。

**下田** 福岡は、ホークス、アビスパ、ライジング福岡 (bjリーグ)、ラグビートップリーグの九電、サニックス、柔剣道などの武道も含めてスポーツが盛んなのが特徴であり、優位性です。一方、外遊びをしなくなった子どもたちの体力低下という現状があります。体を動かしたくましく、生きる力を子どもたちにつけるというスポーツの役割を考えると、指導者の育成が重要です。ボランティアで指導し、勝たせることが子どもたちのためとだけ思っている視野の狭い指導者が多いからです。そんなチームでは成長の早い 4、5 月生まれの子どもが重宝されるだけ。逆に成長速度が遅い子ども達は、ふるいにかけれスポーツを続けられなくなってしまいうケースが多々あります。プロは指導者育成の役割も担うべきだと思っています。

**伊藤** 私も小林さんと同様、福岡の優位性は、アジアに日帰りも可能な近さだと思います。ソーシャルビジネスの視点からは、アジアの課題解決に目を向けています。中国を例に出すと、一人っ子政策の影響で子どもに協調性がなくわがままな面があるようで、母親は子どもがスポーツを通して協調性を身に付けられれば、と願っています。スポーツに対する考え方でも、子どもにやらせるならオリンピック出場へ、という感じもあるため、体力がなかったり自閉症気味だったりする子どもたちは、スポーツができていく環境にあります。上海に設けた当社のサッカースクールは、そういう子どもも受け入れてお

り、泣いて感謝してくれる母親もいました。私たちはアジア、世界の子どもが抱える問題を、スポーツを通して解決し、子どもたちを健全にしていきたいと考えています。

**森本** 私から福岡市への要望としては、高校野球の決勝戦ができる球場がほしいことです。平和台野球場が閉鎖されて以降、全国の県庁所在地のうち決勝戦ができないのは福岡市だけでは。発掘調査が行われている鴻臚館（こうろかん）跡の上に、二層構造で球場を造ってはどうか。



## ■最後に言いたいこと

**森本** では、最後にこれだけは言うておきたいと思うことをどうぞ。

**下田** 私たちはホークスさんと同じように、地域密着を図っているいろんなものを発信し続けます。「年に一度はレベルファイブスタジアムに行かなくては」と思ってもらえれば幸いです。

**小林** 当社の社是は「目指せ！世界一」です。野球の場合、サッカーのようなマーケットの世界的な広がりはなく、環太平洋地域に限られますが、そこにどう進出していくかを日々考えています。そのためには魅力的なチームにしなくてはなりません。英国のマンチェスター市はサッカーチーム、マンチェスター・ユナイテッドがあるおかげでまちのプレゼンスが高まりました。市民、県民の皆さんも、ホークスを押し上げていくことで、一緒に福岡の名前を世界にとどろかせようではありませんか。

**伊藤** 子どもたちを取り巻くスポーツの問題は中学校の部活動です。スポーツ指導のできない先生による無理、無茶な練習で体を痛めて子どもがつぶれたり、子どもたちだけの練習でいじめが起きることもあります。こんないびつなスポーツ環境は世界に例を見ません。正しい指導法や指導者が学校に入れば、正常化していきます。市民、行政の皆さんと一緒に、中学校の部活動問題を解決していくことができれば、日本でトップアスリートが今の百倍、千倍も出てくると確信しています。

## ■会場からの質問

**質問 1** 小林さん、アビスパ福岡はどうしたら強くなると思いますか。

**小林** スポーツチームが強くなるには、育成と補強しかありません。そのノウハウを引き継いでいくことです。現在、結果が出ていない、ということは、アビスパは恐らくどちらかに問題があったのですが、現在は、篠田善之監督のもと、改善が進んでいるようですので、数年以内にいいチームになると思います。

**質問 2** ソフトバンクホークスのアジア戦略を教えてください。

**小林** 球団としてできるのは、韓国や台湾のスーパースターを獲得して、それらの国や地域の関心を喚起し、観光を呼び込むか、自分たちで出張っていくか、ということくらいです。プロ野球全体では、そろそろアジアリーグの話が出てもいいころでは。日本の頭打ちのマーケットの中で、アジアリーグをどう主導していくかだと思います。

**質問 3** 学校教育や子育て支援施設の場で、指導者支援をしていくためのアイデアや課題があれば伺いたい。

**下田** アビスパ福岡には育成、普及の指導者が約 20 名いて、月 2 回、年間 24 回の指導者研修を行っています。外部の指導者にも無料参加していただいています。研修の講師は持ち回り、指導を受けるのは、同僚の指導者達になります。指導者が、自分の指導法を同僚から客観的に評価してもらうことで改善していく仕組みを作ること、指導者同士がお互いに助言し合える関係を作ることが大事です。

**伊藤** 私たちは昨年、専門学校にスポーツマネジメント科を設立し、スポーツマネジメント士を輩出しています。当社は、きちんと研修を受けた指導者を正社員として 300 人ほど採用していますが、今後も年間 100 人程度ずつ増やしていく意向です。適正なスポーツ指導ができる人を日本中に増やしていきたいのです。トップアスリートに指導方法を学んでもらい、セカンドキャリアとして生計が成り立つような仕組みを、すべてのスポーツで展開するのがわれわれの使命と思っています。

**質問 4** 家庭の経済的な理由で、やりたいスポーツ用具が買えない、有料プログラムに参加できないとして、スポーツの機会を逃して諦める子どもがいるのではないかと。あらゆる環境の子どもがスポーツの

機会を平等に受けるには、どうしたらいいでしょうか。

**下田** ボランティアの指導者がいることは悪いことでないけれど、弊害を生んだのも事実。お金ももらった指導者がしっかり子どもと向き合うようにしないと、指導者は育ちません。経済的余裕のない子どもたちにとって、自治体が支援する総合スポーツクラブに入るのがいい方法だと思います。しかし、総合スポーツクラブもなかなか思うようにその数は、増えていません。子ども達が、いつでもどこでも気軽にスポーツに関われる環境の整備は、急務と思います。

**伊藤** 当社のスポーツスクールは月額5千円前後です。正しいサービスを提供するために最低限のお金をいただいています。無料で教えるのがいいもの、という意識は変えてほしいです。家庭で5千円を出すのが厳しければ、お父さんの1回の飲み代を充ててもらいたいですね。

### 3. 資料

#### (1) パネリスト・コーディネーターのプロフィール

伊藤 清隆 氏 (リーフラス㈱代表取締役社長)

愛知県出身。1963年11月21日生まれ。国立琉球大学教育学部卒。趣味はスポーツと読書。2010年、学校法人スポーツ&航空学園理事長に就任。2010年4月、初の自著「100%正社員主義」を発行。

小林 至 氏 (福岡ソフトバンクホークス㈱取締役)

福岡ソフトバンクホークス取締役兼執行役員(編成・育成担当)。1968年1月30日生まれ、神奈川県出身。東京大学から1991年ドラフト8位でロッテ入団。退団後、コロンビア大学大学院修了。ゴルフチャンネル職員、江戸川大学教授などを経て現職。

下田 功 氏 (アビスパ福岡㈱代表取締役専務)

1962年静岡県生まれ。小学校4年生からサッカーを始め、静岡県立藤枝東高校、順天堂大学でサッカー部に所属。83年関東大学サッカー1部リーグ準優勝。85年には青年海外協力隊トレーニング科学普及担当員として中米コスタリカ国文化青年スポーツ省スポーツ局へ就任。95年に帰国した後、ワールドカップ2002年日本招致委員通訳などを務め、96年アビスパ福岡のユースセクションコンディショニングコーチに就任。以降、育成普及統括、ホームタウン推進部長などを経て、2010年より現職。福岡県サッカー協会理事。

森本 博樹 氏 (西日本新聞社スポーツ本部長)

1955年宮崎県生まれ。78年慶応大文学部卒業後、スポーツニッポン新聞に入社。主に高校野球、ゴルフを担当。90年西日本新聞社に入社。ダイエーホークスを担当し、その後、運動部デスク、大阪支社勤務を経て、2005年から編集委員となり、ホークスのコラムを担当。07年6月より運動部部長。09年4月より現職。

(2) 配布資料

**新VISION**  
アジアのリーダー都市  
ふくおか!プロジェクト

# アジアのリーダー都市 ふくおか!プロジェクト

## 第6回 フォーラム

**日時** 2011年7月22日(金)  
開場 18:30 開演 19:00 (21:00終了予定)

**会場** 福岡アジア美術館・8階あじびホール  
(福岡市博多区下川端町3-1 リバレインセンタービル8階)

### 内容

19:00 **開会**

**データで語る福岡の今・未来**  
山下永子氏(財)福岡アジア都市研究所専門研究員

---

19:20 **パネルディスカッション**

テーマ **スポーツとまちの元気**

■パネリスト

**伊藤 清隆氏** (リーフラス副代表取締役社長)

**小林 至氏** (福岡ソフトバンクホークス取締役)

**下田 功氏** (アビスパ福岡副代表取締役専務)

■コーディネーター **森本 博樹氏** (西日本新聞社スポーツ本部長)

21:00 **閉会**

主催：福岡市

## プロフィール



**パネリスト**

**伊藤清隆氏**  
リーフラス副代表取締役社長

愛知県出身。1963年11月21日生まれ。国立地球大学教育学部卒。趣味はスポーツと読書。2010年、学校法人スポーツ&航空学園理事長に就任。2010年4月、初の自著「100%正社員主義」を発行。



**パネリスト**

**下田 功氏**  
アビスパ福岡副代表取締役専務

1962年静岡県生まれ。小学校4年生からサッカーを始め、静岡県立藤枝東高校、順天堂大学でサッカー部に所属。83年関東大学サッカー1部リーグ優勝。85年には青年海外協力隊トレーニング科学術及担当員として中央・コスダリカ国文化青年スポーツ協会スポーツ部へ就任。95年に帰国した後、ワールドカップ2002年日本招致委員連帯などを務め、96年アビスパ福岡のユースセクションコンディショニングコーチに就任。以降、育成普及統括、ホームタウン推進部長などを務め、2010年より現職。福岡県サッカー協会理事。



**パネリスト**

**小林 至氏**  
福岡ソフトバンクホークス取締役

1968年1月30日生まれ。神奈川県出身。東京大学から1991年ドラフト8位でロッテ入団。退団後、コロンビア大学大学院修了。ゴルフチャンピオン。江戸川大学教授などを経て現職。



**コーディネーター**

**森本博樹氏**  
西日本新聞社スポーツ本部長

1955年高崎県生まれ。78年慶応大文学部卒業後、スポーツニッポン新聞に入社。主に高校野球、ゴルフを担当。90年西日本新聞社に入社。ダイエーホークスを担当し、その後、運動部デスク、大阪支社勤務を経て、2005年から編集委員となり、ホークスのコラムを担当。07年6月より運動部部長、09年4月より現職。

40

## 第7回

## 人が仕事を生み、仕事人が人を呼ぶ

### 1. 概要

- ▽タイトル 「人が仕事を生み、仕事人が人を呼ぶ」
- ▽日時 7月28日(木) 19時00分開会/21時00分閉会
- ▽会場 アクロス福岡円形ホール
- ▽内容
- ・データで語る福岡の今・未来
  - ・パネルディスカッション
- ▽パネリスト 安藤 貴文 氏 (PicoCELA(株)ソリューション営業部<九州大学発 IT ベンチャー>)  
池内 比呂子 氏 (株テノ. コーポレーション代表取締役社長)  
柳瀬 隆志 氏 (嘉穂無線(株) (グッデイ) 取締役営業本部長)
- ▽コーディネーター 坂本 剛 氏 (株産学連携機構九州代表取締役、九州大学産学連携センター客員教授)

### 2. 提言内容、会場の様子

第7回フォーラムは7月28日、アクロス福岡円形ホール(中央区天神)で開かれ、福岡アジア都市研究所の専門研究員・山下永子氏による解説「データで語る福岡の今・未来」に続いて行われたパネルディスカッションでは、「人が仕事を生み、仕事人が人を呼ぶ」をテーマに、福岡で働くパネリストとコーディネーターの4人が、体験に基づく論議を繰り広げ、参加者は熱心に聞いていました。



#### ◎パネルディスカッション

#### 起業しやすい社会づくりと多様な支援を

アジアの勢いに乗って成長する福岡の企業に魅力 安藤氏  
能力とアイデアに満ちた女性の起業支援を 池内氏  
福岡で働くことの魅力を中央に発信しては 柳瀬氏  
女性力の有効活用が地域活性化の鍵をにぎる 坂本氏

(文中敬称略)

#### ■自己紹介

**坂本** 今日は、なるべく多面的な立場の方に発言していただきたいと思い、この3人をパネリストに選びました。まずは自己紹介と、福岡で働くようになった経緯などをお話してください。

私は久留米市出身です。1966年の丙午(ひのえうま)年という、ベビーブームのさなかにありながら人口が非常に少ない年に生まれました。九州大学工学部を卒業後、大企業のエンジニア、中小企業で経営改善の仕事、そしてベンチャー企業とさまざまな仕事経験を経て、九州大学の産学連携を統括する組織である知的財産本部で大学発ベンチャーの支援に携わりました。昨年、九州大学が子会社化した「(株)産学連携機構九州」の社長に就任しました。

**安藤** 出身は大分市ですが、10歳の時、父の仕事の関係で福岡市に引っ越して来ました。地元の小学校・中学校から久留米の高校に進み、東京の大学に長く在籍した末、昨年3月に中退。アルバイトをしながら就職活動を続けましたが、100社ほど受けても芳しい結果がもたらえませんでした。それまでずっ

と首都圏で就職したいと思っていたのですが、いろいろ考えるうちに、福岡で働くという選択肢が出てきました。成長している企業と一緒に自分も成長していきたい。素晴らしいサービスを提供している会社に勤めたい。そんな考えとともに福岡から出直そうかなという気持ちが芽生え、去年 11 月に福岡に戻って来ました。

福岡ではアルバイトをしながら仕事探しをし、今年 1 月に厚生労働省の緊急人材育成支援事業の職業訓練で、それまで全く縁のなかった IT 分野の勉強を始めました。その中で「PicoCELA (ピコセラ)」という会社に縁があり、IT の世界に飛び込みました。



**池内** 私は短大を卒業して 10 年間、外資系の会社で働きました。26 歳で社内結婚し、子どもが欲しくて会社を辞めたのですが、一度仕事を辞めると再就職がなかなか難しく。30 歳を超えて大したスキルもない状況で、セミナーを受講したり小さな事業をやってみたり…。そこで思ったのは、女性が会社で 10 年間働いても、キャリアを積めるわけでも管理職になれるわけでもない。それならベンチャーを立ち上げようと。

キーワードは「少子高齢化」でした。どうやったらビジネスが成り立つだろう。女性の視点を生かせるビジネスって何だろう。さまざまな試行錯誤の末に、40 歳で「テノ・コーポレーション」を立ち上げて 13 年になります。手のぬくもりまでも提供する会社という意味で、「女性のライフステージを応援する」がコンセプトです。育児や家事や介護をしながら女性が働き続けられる社会を作るためのビジネスを提供しようと、保育事業・介護事業・育児事業の 3 本柱でやっています。

**柳瀬** 福岡市の小学校から久留米の中学校・高校に進みました。大学から東京に行き、社会人の期間と合わせて 13 年間で東京で過ごし、3 年半前に福岡に戻ってきました。今 35 歳で子どもが 3 人います。

大学卒業後は三井物産に入社し、海外の工場から食品を輸入してコンビニや外食産業に売る仕事をしました。2004 年にはマクドナルドのポテトの仕事を取り、私は日本で一番多くの冷凍コンテナをアメリカ西海岸から輸入する人になりました。3 年半ほどそういう仕事をしてとても楽しかったのですが、そろそろ自分の力を試してみたいと思い、3 年前に福岡に戻り家業である「嘉穂無線」に入社しました。最初の 1 年間は「ホームセンター・グッデイ」の店員を経験し、現在は営業本部長として CM の企画や仕入れの仕事をしています。

## ■求人と就活のミスマッチ

**坂本** ここから先は、福岡市がどういう街であれば、新しい雇用を生み出すことができ、福岡を離れた人が戻って来たときに魅力的な仕事に就けるのかをディスカッションしていきます。

福岡は住みやすいまちだと言われる一方で、就業機会があまり多くないというデータもあります。でも実際のところは、仕事はあるけどうまくつながっていないのではないかと、いい会社なんだけど知名度が低いので人を募集している割にはなかなか採用できないジレンマがあるのではないかと、そのあたりのご意見を伺います。

**池内** 企業の 8 割は中小企業ですが、新卒者の多くは 2 割しかない大企業への就職を望む傾向にあります。大手企業と中小企業とに対する意識の格差が大きいんですね。一方では、安定して働けるならどこでもいいと考える人も少なくありません。福岡はサービス業が発達しているので、どうしても雇用形態にネックがあり、主婦の 5 割以上が働いているものの、その多くが正規雇用ではありません。加えて景気の悪化で、男性も派遣やパートが多くなっているという現実もあります。

このように、大手企業と中小企業をめぐるミスマッチに加え、雇用形態にもミスマッチがある。福祉業界がいつも人材不足に悩んでいるように、求人はたくさん出ているにもかかわらず、そこで働く人がいないのが現状ではないでしょうか。



**柳瀬** 当社もなかなかいい人材が集まりません。グッデイの知名度は94%と高いのですが、就職となると別問題。パート比率8割の小売業に、仕事としての魅力を感じてもらえていないのかもしれない。しかし商社で働いた経験からいうと、販売先である小売業は、とても大きな影響力があります。実際に働くイメージと、採用活動をやるときのギャップが大きいように感じています。

**坂本** 福岡市は学生の多いまちですが、就職となると大手志向が強く、多くは福岡を離れて東京や大阪に行ってしまう。福岡に残るとすれば、地元の手続き企業か行政機関ぐらいしかありません。また、東京の大手企業で働いている人がいずれ福岡に戻りたいと思っても、福岡に魅力ある仕事がないという声も聞きます。福岡には非常に有望な中小企業があるのに、情報発信が活かしていないのがミスマッチの原因ではないでしょうか。社員数名のベンチャー企業に入った安藤さん、いかがですか？

**安藤** 私は経歴からして大手は無理だったんですが（笑）、非常に苦しい経済情勢の中で、就職活動を続ける人が安定志向になるのは無理もないことだと思います。そういった中で私が今の会社に引かれたのは、社長を含め社員全員が、アジアや世界を目指して成長していこうという意思を全面に出していたことです。この会社と一緒に自分もアジアの勢いに乗って成長していきたいと思いました。社員が10名にも満たない小さな会社なので、社長と直にコミュニケーションが取れたことも魅力でした。セーフティーネットさえしっかりしていれば、チャレンジングな会社に飛び込んでもいいと私は思っています。

## ■女性の能力の活用

**坂本** 創業のキーワードの一つは「女性の活用」ではないでしょうか。



**池内** 景気の悪化に伴い、夫婦で働かないと家族が食べていけない時代が来ています。育児休業率が下がっているのも、所得が減ると生活を維持できないからです。福岡市の一人暮らしの独身女性の所得は年収200万円以下が7割。商業はどんどん発達しているのに消費が伸びない福岡で、今、何をすべきでしょうか。

一番の鍵は、女性の所得増戦略だと思います。男性よりも消費力が高い女性の所得を増やすことが、福岡市の経済活性につながると確信しています。そのためには、女性の起業家や個人事業主をたくさん作っていくこと。年収が200万円しかない人たちが、500万円でも1000万円でも稼げるようにすることです。今後発達していくビジネスは、福祉やサービス業や観光。女性が活躍できる場であり、生活者の視点でできるビジネスです。生活者の視点を持つ女性の強みを生かしたベンチャーを、たくさん作っていくことが重要では。

**坂本** 私も、福岡市を活性化するためには、女性の能力をいかに活用するかが鍵だと思っています。今はITが発達しているので、会社を作らなくても個人事業主のネットワークで仕事ができます。そういう面を行政機関が支援するのもいいのではないのでしょうか。

さっき安藤さんがセーフティーネットに触れましたが、私が思う最大のセーフティーネットは、「チャレンジングな仕事をしている人が、安定した職を持つ人と結婚すること」。そのための策として、起業家予備軍の男性と行政機関の女性、あるいは女性の起業家と男性の公務員の合コンなどが、効果的な

のではないのでしょうか。

また、大学を卒業した人が福岡にしながらグローバルな仕事をするためには、当然ながらベンチャーは必要だと思います。

**柳瀬** 商社で仕事をして思ったのは、資金の問題はとても大事だということです。アイデアだけでなく、ちゃんとお金を回していかないと事業は継続していかない。福岡で起業する人が多いけれど、つぶれる会社も多いのは、そのへんのノウハウを持った人が少ないせいではないのでしょうか。そういう面を教えてくれるような仕組みがあった方がいいと思います。

## ■福岡市への提言

**坂本** 最後に、福岡市が今後、新しい産業や雇用を生み出していくためには何が一番必要なのか、提言をお願いします。

**安藤** チャレンジングとセーフティーネットがセットになることで地域が発達していく、と私は考えています。セーフティーネットも単に金銭的な支援だけでなく、職業訓練みたいに人と人とのコミュニケーションが大切です。その一方で、チャレンジの芽をつぶさないような仕組みをどんどん作っていかないと、福岡がアジアの中でイニシアチブをとっていくのは難しいのではないのでしょうか。

**池内** 日本が人口減少社会にあることに対する危機感を、もっと持たないといけないと思います。2025年を考えるなら、まず少子化対策を打って。女性たちが仕事を辞めずに働ける社会をつくってほしい。今は日曜日にも夜も仕事がある時代です。多様な支援をして、女性が生涯働ける社会、かつ女性が子どもを産める社会にしていくこと。それが、経済にも何にでも大きな影響があるということ、自治体だけでなく企業や私たち個人も認識してやっていかなければならないと思っています。

**柳瀬** 東京の大企業に勤める30代～40代の中堅社員が、福岡市の企業に転職したいと思うような、福岡市の魅力をアピールするキャンペーンを東京で展開してはどうでしょうか。また、60代以降のリタイアする人たちに対して、東京では夢の庭付き一軒家が福岡なら持てることをPRするのもいいと思います。高校生や大学生が東京に就職したがるのは仕方のないことで、私も東京で働いたことで視野が広がりました。まずは若い人材を東京や大阪に排出し、いずれ戻ってほしいというキャンペーンをやり、そういう生き方があることを示すのも、一つの方法かと思います。



## ■会場からの質問

**質問1** 福岡の女性が起業するためには、どんなスキルや能力を向上させるとよいのでしょうか。

**池内** 私は福岡市のアミカスで開催された起業家セミナーの卒業生ですが、40人ほどの受講生の中で起業したのはわずか1～2人なんです。柳瀬さんがおっしゃるように、アイデアはあるけど事業に落とす力がない、あるいは数字が読めない。そこが一番の問題点ではないのでしょうか。もう一つ大切なのは志ですね。何のために会社をするのか。それをしっかり持つことが必要だと思います。

**質問2** 起業する際に一番難しいと感じたことと、福岡で起業したからこそできたことは何でしょうか？

**池内** 女性たちが事業をする上で一番苦労するのは、資金面ではないのでしょうか。私はサラリーマンの夫がいたので、安定した収入があり、借り入れするときは保証人になってくれた。その横でベンチャーを立ち上げることができて、本当にありがたかったですね。

私が起業した1999年は介護制度が始まった年でした。何兆円という市場で大手企業が頑張ろうというときに、保育事業はどうなのか調べてみたら、全国で一番売り上げがあったのが1億円で、このマーケットなら頑張れると思いました。九州では私のしている事業が珍しいので、いろんなところが広報で使ってくださいたりします。今、東京でも同じ事業をやっていますが、多くのライバルの中で差別化をしていかなければなりません。九州でノウハウを身に付けて東京に行けたことは、大変大きなメリット

でした。

**質問3** ITベンチャー企業は、東京の方が数が多くて活動しやすいイメージがありますが、九州と東京を比較してどう感じますか。

**安藤** 東京ではアルバイトでしか働いたことがないので単純な比較はできませんが、九州はアジアに近いというのが、私が帰ってきた大きな理由の一つです。25年後の福岡は明らかに、成長地域であるアジアと日本の結節点を担っていると思います。福岡が日本を引っ張っていくんだとおっしゃる起業家の方が非常に多いように感じます。そういった地域で勝負できる喜びは、福岡ならではの。また、東京ではできないことが九州ならできるところにも面白さがあります。

**質問4** なぜ福岡では企業内保育が進まないのでしょうか。

**池内** わが社が今一番力を入れているのは、医師不足、看護師不足が深刻な病院の中の保育所で、80カ所ほど手掛けています。普通の事業をやっている企業は、今は保育所を作らなくても求人に困らない状況にあります。福岡市に限らず、景気の悪化が理由で進まないのではないのでしょうか。

**質問5** 今の仕事ではない仕事に就けるとしたら、どんなことがしたいですか。

**柳瀬** ホームセンターに限らず、事業をやるのが楽しいと感じています。チャンスと可能性があれば何にでも挑戦してみたいですね。

**池内** 会社の規模がずいぶん大きくなったので、今度は一人だけでやれる事業、たとえばおでん屋さんなどやってみたいですね。私がおばちゃんに座っていて、起業家が集まってきて、みんなで事業や福岡の話をするのもいいかなあって。

**安藤** 昔からやりたいと思っているのは、スポーツクラブの運営です。でも今の池内さんの話を聞いて、自分もこぢんまりとした飲み屋をやりたいなという気になっています。いろいろな人とあれこれ話しながら楽しくお酒を飲むのもありかなと。

**坂本** 私はこれまでいろんな職業を経験し、自分自身が経営を実践するという目標もある程度は達成しました。あとは、公務員のような仕事を一度は体験してみたいなと思っています。

### 3. 資料

#### (1) パネリスト・コーディネーターのプロフィール

安藤 貴文 氏 (PicoCELA(株)ソリューション営業部<九州大学発 ITベンチャー>)

1983年大分県大分市生まれ。2002年久留米大学附設高等学校卒業。2010年慶應義塾大学経済学部経済学科中途退学。2011年2月PicoCELA株式会社に入社。ソリューション営業部に所属。現在に至る。

池内 比呂子 氏 (㈱テノ、コーポレーション代表取締役社長)

1959年長崎生まれ。短大卒業後、外資系の会社のOLとなる。85年結婚を経て、10年間勤務した会社を退職。その後、「自分の会社を持ちたい」一心で、経営、経済の勉強をし、「女性のライフステージを応援する」をコンセプトに1999年家庭総合サービス会社を設立。現在、株式会社テノ、コーポレーション代表取締役社長、特定非営利活動法人育児・生活支援福岡理事長、(社)福岡中小企業経営者協会副会長、(社)九州経済連合会九州女性の会副会長、(社)九州ニュービジネス協議会ウーマンズフォーラム副委員長。

柳瀬 隆志 氏 (嘉穂無線(株)(グッデイ)取締役営業本部長)

福岡県福岡市出身。東京大学経済学部卒。

2000年三井物産株式会社入社。大手CVS、外食チェーン等向けに冷凍食品等の輸入・販売業務に従事。2008年に三井物産を退社し、嘉穂無線株式会社に入社。2009年4月より現職。

坂本 剛 氏 (㈱産学連携機構九州代表取締役、九州大学産学連携センター客員教授)

福岡県久留米市出身。九大工学部卒業後、大企業・中小企業・ベンチャー企業を経験し、九大知

の財産本部にて大学発ベンチャー支援を行う。2010年4月から現職、新たな産学連携ビジネスの構築を目指す。2008年3月九大ビジネススクール(QBS)修了。

(2) 配布資料

**新VISION**  
アジアのリーダー都市  
ふくおか!プロジェクト

**アジアのリーダー都市  
ふくおか!プロジェクト**

**第7回 フォーラム**

**日時** 2011年7月28日(木)  
開場18:30 開演19:00 (21:00終了予定)

**会場** アクロス福岡・1階円形ホール  
(福岡市中央区天神1-1-1)

**内容**

19:00 **開会**  
データで語る福岡の今・未来  
山下 永子氏 ((財)福岡アジア都市研究所専門研究員)

19:20 **パネルディスカッション**  
テーマ **人が仕事を生み、仕事が人を呼ぶ**

■パネリスト **安藤 貴文 氏**  
(PicoCELA㈱ソリューション営業部 (九州大学発ITベンチャー))

**池内 比呂子 氏**  
(㈱テブ、コーポレーション代表取締役社長)

**柳瀬 隆志 氏**  
(嘉穂無線㈱ (グッデイ) 取締役営業本部長)

■コーディネーター **坂本 剛 氏**  
(㈱産学連携機構九州代表取締役/九州大学産学連携センター客員教授)

21:00 **閉会**

主催：福岡市

**プロフィール**

**パネリスト**

**安藤 貴文 氏**  
PicoCELA㈱ソリューション営業部 (九州大学発ITベンチャー)  
1983年大分県大分市生まれ。2002年久留米大学附設高等学校卒業。2010年慶應義塾大学経済学部経済学科中途退学。2011年2月PicoCELA株式会社に入社。ソリューション営業部に所属。現在に至る。

**パネリスト**

**池内比呂子 氏**  
㈱テブ、コーポレーション 代表取締役社長  
1959年長崎生まれ。短大卒業後、外資系の会社のOLとなる。85年結婚を経て、10年間勤務した会社を退職。その後、「自分の会社を持ちたい」一心で、経営、経済の勉強をし、「女性のライフステージを応援する」をコンセプトに、1999年家庭総合サービス会社を設立。現在、株式会社テブ、コーポレーション代表取締役社長、特定非営利活動法人育児・生活支援福岡理事、(社)福岡中小企業経営者協会副会長、(社)九州経済連合会九州女性の副会長、(社)九州ニュービジネス協議会ウーマンズフォーラム副委員長。

**パネリスト**

**柳瀬 隆志 氏**  
嘉穂無線㈱(グッデイ) 取締役営業本部長  
福岡県福岡市出身。東京大学経済学部卒。2000年三井物産株式会社入社。大手CVS、外食チェーン等向けに冷凍食品等の輸入・販売業務に従事。2008年に三井物産を退社し、嘉穂無線株式会社に入社。2009年4月より現職。

**コーディネーター**

**坂本 剛 氏**  
㈱産学連携機構九州代表取締役  
九州大学産学連携センター客員教授  
福岡県久留米市出身。九大工学部卒業後、大企業・中小企業・ベンチャー企業を経験し、九大知財財産本部にて大学発ベンチャー支援を行う。2010年4月から現職。新たな産学連携ビジネスの構築を目指す。2008年3月九大ビジネススクール(QBS)修了。

## 第8回

## 都心のまちづくり

### 1. 概要

- ▽タイトル 「都心のまちづくり」
- ▽日時 8月7日（日） 14時00分開会／16時30分閉会
- ▽会場 福岡アジア美術館あじびホール
- ▽内容 第1部：基調講演「都心の鍼治療型アーバンデザイン」  
出口 敦 氏（東京大学大学院新領域創成科学研究科教授、  
九州大学大学院人間環境学府 客員教授）
- 第2部：トークセッション  
・データで語る福岡の今・未来  
・トークセッション
- ▽パネリスト 岩永 真一 氏（NPO 法人グリーンバード福岡チーム事務局長、  
福岡テンジン大学学長）  
大坪 恵太郎 氏（福岡地所㈱開発事業本部課長）  
酒井 咲帆 氏（㈱アルバス代表）  
原口 可奈子 氏（編集者・ライター／Wonderscope）
- ▽コーディネーター 出口 敦 氏

### 2. 提言内容、会場の様子

第8回フォーラムは8月7日、福岡アジア美術館・8階あじびホール（博多区下川端町）で開かれました。東京大学大学院新領域創成科学研究科教授・出口敦氏による「都心の鍼（はり）治療型アーバンデザイン」と題した基調講演に続き、「データで語る福岡の今・未来」として、福岡アジア都市研究所専門研究員・山下永子氏がグラフや図を使い解説。トークセッションでは「都心のまちづくり」をテーマに、4人のゲストとコーディネーターの出口氏がさまざまな意見を交わしました。



#### 第1部：基調講演「都心の鍼治療型アーバンデザイン」

##### 港と都心をつなぐ「風の道」が必要

東京大学大学院新領域創成科学研究科教授、九州大学大学院人間環境学府 客員教授・出口敦氏



私は今年4月から東京で勤務していますが、その前まで九州大学に18年間勤めながら、「We Love 天神協議会」や「博多まちづくり推進協議会」の設立など、さまざまなまちづくりの活動に関わらせてい

ただきました。

福岡のまちは、もともと旧博多駅、博多港、天神をつなぐ環状構造を骨格としたまちとして発展してきました。主に環状線に沿って商業集積地がつくられましたが、現在、環状線はなく、地下鉄がそれに代わる公共交通の骨格となっています。博多湾の臨海部もこの70年ほどでかなり埋立てを中心とする開発が進みました。臨港地区として位置付けられたこともあり、距離的に近い市街地との関係性も薄れたまま発展します。これだけ海に近い都心は全国的にも珍しいのに、機能的にも、環境的にも、視覚的にも海とつながっていないのは非常に残念です。都心部を更に魅力的にするためには、都心部と臨港部を是非つなぎ合わせてほしいと思っています。

そのために、これまでの経験を踏まえて、私なりにこれからの都心部のまちづくりの基本的考え方を次の3点にまとめてみました。

#### ①粋な福岡スタイルの独創

例えば、福岡の屋台は路上で日常的に営業する許可をえている点で、全国でもユニークです。また、長屋形式の商店街で空き店舗が1つもない天神の新天町商店街は、独自の経営方法で活力ある商店街を成り立たせており、注目に値します。都市高速の建設手法も、福岡市外の太宰府ICまでの部分を福岡市道としてつないでいった独創的とも言えるスタイルの事業手法が光ります。こうした福岡独特のスタイルとも言える独創的な発想でチャレンジする街であり続けてほしいと思います。

#### ②九州らしさを味わう環境醸成

福岡の都心は、九州全体から集まる食材やお酒などの食文化を楽しめる店が多く集積しているまちです。デザインに工夫を凝らしたオシャレで小規模な店が多いのも特徴です。また、博多織やお菓子などの様々な博多独自のデザインされた商品をビジネスに結びつけるのが博多商人本来の役割でもあると思います。街のデザインとは、味覚を含む五感で街全体が楽しめる環境をデザインすることであり、そのためにも美味しさやデザインされた美しさを楽しむ店が建ち並ぶストリートの魅力を創り出していくべきです。

#### ③多彩な博多人育成と活躍の場マネジメント

都市の環境が良き人材を育て、そこで育った人が都市の新たな魅力を育てていくといった好循環を生み出せる都市こそが、真に力のある都市です。地元の若者はもとより、福岡の魅力に惹きつけられてよそから来た人が、福岡に住みながら自身の芸術・音楽、もしくはビジネスを開花させ、新しい文化を福岡で開花させ、福岡の都市文化の新たな蓄積がまた次の世代の人々を惹きつけていく。そうした好循環を常に意識しながら産官学民連携で多彩な人々の活躍の場をどんどん提供し、マネジメントしていくべきだと思います。

以上の基本的な考え方を共有した上で、都市開発とエリアマネジメントに取り組むべきと考えますが、ハードな都市開発に関しては、都市の鍼治療のような考え方で再開発を進めることが求められます。福岡市の都市開発はこれまで交通システムの整備とうまくリンクしてきませんでした。地下鉄七隈線の整備と都市開発事業はリンクしていませんし、それぞれの事業がバラバラに進められてきたという印象です。

都市空間のデザインに関しては、鍼治療のような考え方で都市開発を誘導し、交通システムの整備と一体化して進めていくべきです。人間の体が、血流や神経などの交点となるツボを押すことで血の巡りが良くなりリフレッシュされるように、都市にもそこを押すと魅力が格段にアップし、人の流れや環境が改善されるツボがあります。そうした福岡の都心のツボと言える場所を経験則から特定し、ツボの都市再開発と交通システムの整備を一体的に行う都市の鍼治療型アーバンデザインに関する研究に取り組む「都市ツボ研究会」の成果の一部を紹介します。

専門家の方々や学生をメンバーとする研究会では、今後の福岡の都心部の開発上、重要な地区と言える「都心部のツボ」の候補地として、築港本町、須崎公園、水鏡天満宮、天神南、清川・柳橋、博多三角地、御供所一の7つを選び、それぞれの地区の再開発事業と交通システムの整備を含めた実践的な都市デザインを研究しています。



このうち築港本町について解説します。この地区では、ベイサイド、中央埠頭（ふとう）、博多埠頭を含めた総合的な将来像を描き、地区を構成するブロックごとの役割を明確にした上で交通利便性を重視したプランを検討し、提案しています。需要が増えているこの地区のコンベンション機能を拡張し、国際ターミナルのある埠頭は大規模なデューティーフリーショップ（DFS）と組み合わせながら国際色豊かな集客地区として活性化する計画を検討しました。

この地区で最も重要なのは、大博通りと博多港の交点の部分です。検討の結果、ちょうど交点にある福岡サンパレスの機能を移転することによりこの交点の場所を公園化し、海からの涼しい風を都心部に引き込む「風の道」を創り出す都市デザインを提案しました。

同時に、都心部と国際線・国内線それぞれのターミナルを新たなBRT（バスラピッド交通）という交通システムでつなぎ、外環状線が全線開通するのを機に外環状線上を巡回するバス交通や、都心部とアイランドシティや空港などをつなぐ高速バスを走らせる際の結節点になり得る地区と考え、その将来像を描きながら検討を進めています。

水辺のオープンスペースとなっている船泊まりは埋め立てずにそのまま保全し、門司港レトロ以上の魅力的な水辺のレクリエーション地区として整備すべきです。

この地区の計画は、行政的には港湾局、住宅都市局、市民局などにまたがるので役所の縦割り行政では難しいのですが、市民や来街者の立場に立ち、市長さんのリーダーシップにより都市ツボとして極めて重要な築港本町地区の整備を是非とも図っていただきたいと思います。

また、都市再開発は、公共財としての土地を再活用していくことでもあります。公共性が極めて高い都心の再開発は、これまでのやり方ではうまく運ばなくなってきました。公開の場においてみんなでアイデアを出し合い、課題を共有し、関係者を巻き込んでいく仕掛けがもっと必要ではないでしょうか。

そういうまちづくりを議論し情報発信する場となる「アーバンデザインセンター」を福岡市に設置することを提案します。同センターのような施設は国内外の様々な都市や地区に設置されていて、まちづくりをイメージする模型が展示され、オープンカフェなどがセットになって市民が将来像を語り合い、共有できる施設となっていたりします。福岡市には未だにそうした施設がありません。そうした意味では福岡市のまちづくりの取り組みは非常に遅れていると言えます。私は現在「柏の葉アーバンデザインセンター（UDCK）」のセンター長を務めています。これは、千葉県柏市「柏の葉」地域の公民学が連携したまちづくり拠点です。

（参考 <http://www.udck.jp/>）

今回の一連のフォーラムで議論したことを実現するためにも、こうした動きの延長としてアーバンデザインセンター（UDC）のような施設の設置を進め、市民参加のまちづくりの拠点を創っていくことが、福岡市には必要です。福岡市クラスの都市であれば、各区に加え、都心部、アイランドシティ、九大学研都市の合計10か所程度のUDCを公民学連携して設置するべきでしょう。



また、最後に都心部のエリアマネジメントの必要性に触れておきます。都市はつくれば終わりというわけではなく、使い続け、その変化をマネジメントしていくことも極めて重要です。大きな建物の建て替えの長周期（30～50年）、建物改修などの中周期（5～10年）、祭りなどの短周期（半年～1年）と、いろいろなサイクルの変化が都市には起きています。

それら周期の違う変化をまとめ上げ、歯車のようにうまく組み合わせていくことこそが都心部における最も重要なエリアマネジメントの役割です。既成市街地型のエリアマネジメント組織が確立した事例

は日本に未だないので、みなさんの力によって是非、福岡の都心でエリアマネジメントのモデルを創り上げ、都市を鍼治療のような考え方と方法によって、持続的な都心のまちづくりを進めていただきたいと思います。

## ◎第2部：パネルディスカッション

### まだまだ引き出せる都心の魅力

「まちの交流プロデューサー」輩出したい 岩永氏  
交通インフラは不十分、BRT導入しては 大坪氏  
ステップアップできる受け皿あれば 原口氏  
居心地よくコミュニティーが生まれる都心に 酒井氏

(文中敬称略)

#### ■自己紹介

**出口** まずは、それぞれの自己紹介をお願いします。

**岩永** 東京・渋谷で生まれた「グリーンバード」の福岡チームの事務局長をしています。「グリーンバード」はまちを掃除しながら、掃除する姿のかわいさをまちの人たちに見てもらうことで、自発的な参加を促すプロモーションも兼ねた活動をしていて、福岡では毎週月、火、木曜日に天神地区で取り組んでいます。小学校で環境学習の講師をしたり、夏場は7年前から「福岡打ち水大作戦」も行っています。ほかには、好奇心のある人なら生徒、先生のどちらとしても参加できる学びのプロジェクト「福岡テンジン大学」の学長をしています。毎月第4土曜日に、参加者同士がコミュニケーションできる体験型の授業を開きます。さらに、博多区の違法駐輪対策に取り組むプロジェクトチーム「b-c-y-c-l-e」の立ち上げも行いました。



**大坪** 私は東京で大学生活を送りながら、「こんなに人の多い東京で社会人をするのは無理」と思い、出身地・鹿児島との間にある福岡を選択し、福岡地所に入社しました。これまで「マリノアシティ福岡」（西区）と「リバーウォーク北九州」（北九州市小倉北区）の開発と運営をした後、九州・福岡のまちづくりをするため世界中からお金を集める「福岡リート投資法人」へ転籍。現在は福岡地所で9月30日にオープンする「キャナルシティ博多 イーストビル」の開発の仕事をしています。また、「天神明治通り街づくり協議会」に参加するなど、次の“つぼ”を探している最中です。

**原口** 福岡のまちと人をつなげるタウン情報誌「f Sketch」編集部で、ファッション、ヘアサロン、カフェ、レストランなどを中心に取材し、福岡のよさを発信する仕事をしてきました。まちの魅力を、そこで暮らしたり働いている人を案内人に立てて紹介するページも担当し、まち歩きの楽しさを知りました。プライベートで「福岡路地市民研究会」や「福岡ビルストック研究会」にも参加し、そこで自分より上の年代の人たちのまちに対する思いやまちづくりへの視点を知るきっかけもいただきました。「f Sketch」が昨年夏に休刊となったので、現在は1人で企画・編集・ライターをしています。

**酒井** 私は「九州大学ユーザーサイエンス機構子どもプロジェクト」に参加するため九州に来ました。「絵本カーニバル」の企画や地域での子どもの居場所研究などを行い、そこで学んだことをまちで生かしてみたいと思い、警固の一軒家を飲食店、デザイン事務所、私が運営する写真屋「アルバス」でシェアしています。2階のギャラリーを人が集まる場所として使いたくて、展覧会、映画鑑賞会、スクールワークショップなどを企画してきました。家族のアルバム作りが認知症の人にもよい影響を与えることを講演してもらったりもしました。そうした場づくりと、写真屋の経営のバランスの取り方について考

えているところです。



■福岡都心部の魅力と欠けているところ

**出口** 次に、天神や博多など都心部の魅力は何か、逆に欠けているところは何かを教えてください。

**岩永** 魅力は20代、30代を中心にした活気のある若者が多く集まることです。欠けているのは、まちに対するプライドがあまりない点ではないでしょうか。古い建物などが壊されるのはまちの景観が壊されることなのに、それを何とも思わないような感じがあります。人口の増加でマーケットが膨らみ、新しい商業施設を造った方が利益が上がる、という背景もあったのでしょうか。歴史の詰まったまちであるはずなのに、そのストーリーさえ見えてこないのは残念です。

**出口** 地域独自の歴史や文化に対する重要性が、あまり共有されてこなかったということですね。

**大坪** 明治通り、大博通り、渡辺通り、城南線に囲まれた都心エリアは、実は東京ディズニーランドと同じサイズです。その都心部の機能がコンパクトに集中していて、世界で一番買い物がしやすい都市と言われたりしています。自然やゴルフ場にも近く、朝からゴルフをして昼からは仕事や家族サービスも十分できる、そのスケール感がいいですね。欠けているのは交通インフラではないでしょうか。九大のセミナーで公共交通について検討したとき、種類や路線はいろいろあるけれど十分使われていないとか、自転車果たして乗りやすいかといった課題が見えました。それから、東京では都心の公園はきれいに整備されていますが、福岡の都心部には荒れた公園もあり、憩える場所がちょっと少ない気がします。それでキャナルのリニューアルに際して、施設内の運河の上にベンチを置くなどかなり手を入れました。



**出口** 私は東京で生活し始めてからの通勤時間が往復3時間です。福岡にいた頃は片道15~20分でした。福岡は移動に掛かる時間が短い分、可処分時間が非常に多く、1日24時間を有効に使えるのもアドバンテージではないでしょうか。

**原口** 福岡の魅力は、きれいでスタイルがいい女性が多いところです。福岡は今泉・大名地区を中心に、全国的にもヘアサロンが密集しているまちと言われています。福岡の女性は美意識が高く多種多様な価値観を持っているからこそ、それだけたくさんのヘアサロンが成り立ち、きれいな人を生み出しているのではないのでしょうか。反面、映画、音楽、演劇などのイベントがたくさん開かれているのに、それを知らない人が意外に多いのはもったいないです。劇団四季の「福岡シティ劇場」が少し前にクローズしたし、「福岡ブルーノート」から変わった「ビルボードライブ福岡」も無くなってしまいました。本物の文化にお金をもうちょっと出して触れればいいのに、と感じています。

**酒井** 魅力なのは、会社や家族以外の人と出会えるカフェなどの場所が多いところです。それは第三の居場所にも、都心で休憩できる空間にもなっています。欠けているのは、景観に時間の蓄積がないので風土が感じられない点です。例えば、大好きな人から歴史的建造物や隠れ家みたいところで告白されたらほろっとくるだろうけれど、福岡の都心で言われてもどきっとしないな、みたいなの(笑)。計画して造りましたというのが透けて見えるのではなく、その場を長く大事にしていって生命を感じられるよ

うな都心にすることが必要じゃないかと感じています。

**出口** 私は講演の中で都心のつぼを示しましたが、皆さんが考えるイチオシのつぼはどこだと思いますか。

**大坪** キャナルシティはつぼになると思います。新博多駅の誕生で、天神一極集中から天神・博多駅の二極になりましたが、まだ街中の回遊は不足しています。来街者がまちを回遊しないのはよくない、とわれわれは頑張っているところです。今度、キャナルシティが増床し、はかた駅前通りに面するためキャナルシティの位置が分かりやすくなります。博多駅との回遊性を高めた上でキャナルが憩いの場になれば、「次はちょっと御供所へ行ってみようか」「柳橋まで足を延ばそうか」となるのでは。そこで重要なのが、御供所やお寺などがもっと開いてくれることです。そうでないと、単に博多駅—キャナル—天神という導線ができるだけで、都心全体の盛り上がりにつながらないのです。

#### ■魅力アップと課題解決への提言

**出口** 都心部が課題を解決してさらに魅力アップしていくには、どのようにしていけばいいでしょうか。また、「アジア」をどうとらえ、どう活かせばいいと考えますか。それらを踏まえ、25年後の福岡都心のまちづくりに向けた提言をお願いします。



**岩永** 福岡のまちでマナーの悪さや犯罪の多さが指摘されていますが、それはまちへの無関心が生んだ結果だと思います。私は、人と人がどんどんつながる場を提供することで、人の目が届き悪いことができない“ムラ”社会のような文化を、このまちにつくっていきたいです。また、世代を超えて人がつながることでコミュニケーション上手な人が増えますが、その中から「まちの交流プロデューサー」と呼べる人たちを輩出していきたいと考えています。

**大坪** まちづくりにおけるプロデューサーは、行政が主導的にやっていくべきものだと思います。その際に、市民の意見を幅広く聞いても、決して全ての意見を取り入れようとせず、その中から大事だと思う意見は取り入れ、主体性を持って頑張っていたきたいです。またアジアについては、今日ここで出た話が全部実現したら、アジアの中でも憧れの都市、住んでみたい都市になるでしょう。ただし言語の問題があります。まち中で困っている海外の人を見たら英語で話し掛け、コミュニケーションできる市民が増えたら、福岡の好感度は上がります。そうした経験がある人が留学生として来福し、仕事があればずっと住んでくれるかもしれませぬ。そうなれば、アジアのリーダー都市とまでいなくても「海外の人から好かれる都市」になると思います。

**原口** 福岡市が「アジアのリーダー都市」になるというのは、若干おこがましい気がしています。いま、アジアの人たちに対するおもてなしがちゃんとできているか疑問だからです。福岡のまちがアジアの人たちにとって魅力的になるためには、困り事が起きたときに駆け込める「交番」のように、アジアで使われているいろいろな言語をしゃべれる人をカフェなどに配置しておくとか、日ごろからアジアの映画や食文化などにいつでも触れられる機会を増やすなど、もっと工夫が必要ではないかなと思います。また、福岡の今後の魅力アップのためには、音楽をはじめいろいろな分野で芽が出た人に、東京に行かなくても福岡でさらに活躍できるステージを提供できる受け皿をつくり、新陳代謝のいいまちにできればいいのではないかと考えています。



**酒井** 多くの人は都心部を、「(都心部が持つ商業的機能などを)活用する場」とみている気がします。でも、ずっととどまっておきたい、いっそ住みたいくらい居心地がいい場所に、あるいは何でも相談したり自分の考えを深めることができる仲間がいるコミュニティがどんどん生まれる場所になっていけば、もっと面白いまちになるのではないのでしょうか。「アジアのリーダー都市」の関連では、アジアを舞台に活動できる人—例えばアジアでも有名な写真家—を育てることのできるまちにしたいです。

### ■会場からの質問

**質問1** 都心のツボの観点から、博多港の国際ターミナル付近の仕掛けづくりが重要だと分かりましたが、事業開発をする立場からはどのようなものがあればよいと思いますか。

**大坪** これは九大のセミナーの中で検討したのですが、福岡の都心部内に、路線バスを軌道系交通並みの幹線輸送システムとするBRT（バス・ラピッド・トランジット）を導入して、埠頭などを結んではどうでしょうか。BRTができれば都心部から埠頭へ人がすいすい行けるので、これまで以上に面白いエンターテインメントをやってもいいのでは。

**質問2** まち歩きで市外の人にお薦めのスポットはどこでしょうか。

**原口** 天神の三越から警固方面に向かうと入っていく「けやき通り」です。店がクローズしている時間でも街並みがきれいで、道も平坦だから歩いていても気持ちよく楽しめます。

**質問3** まちに対するプライドを市民に持ってもらうには、まちづくりへの参加が一番だと思います。でも、興味を持っていない市民にまちづくりへ参加してもらうには、どんなことが必要ですか。

**岩永** 世の中の人のうち、いろんなものに興味を持って自ら足を運ぶ人が20%、逆に全く興味を持たず自発的には動かない人が20%、その中間で浮遊層とも呼べる人が60%いる、と考えています。以前の僕は浮遊層にいた1人です。「グリーンバード」も「テンジン大学」も、福岡のことに関わっていく、もしくは福岡のことを知るきっかけにしてもらうプロジェクトです。まずまちのことを知れば、ゆくゆくはまちづくりに関心が出る人が出てくるのではないのでしょうか。

**質問4** 出口教授が描いている「都市ツボデザインプロジェクト」は、どんな資金源で取り組もうとしているのでしょうか。

**出口** 研究会では事業性についても検討しています。公共事業も伴いますが、できるだけ民間資金を活用しながら、短期でなく中長期に採算を取る事業スキームで考えることにより、土地代を顕在化させない方法による都市再開発を研究しています。



**質問5** 「アーバンデザインセンター」の具体的な運営方法や資金源は？

**出口** 「柏の葉」の場合、市の開発公社や民間ディベロッパーが予算を出し、参加している大学も一部予算を付けています。そうした予算を組み合わせることで運営しています。私や学生はボランティア的に活動しています。（福岡で取り組む場合も）地元関連企業の資金や大学の資源や人材を如何に活用しているかが課題になると思います。

### 3. 資料

#### (1) パネリスト・コーディネーターのプロフィール

岩永 真一 氏 (NPO 法人グリーンバード福岡チーム事務局長、福岡テンジン大学学長)

カエルメディア/NPO 法人グリーンバード福岡チーム事務局長/福岡テンジン大学学長/福岡打ち水大作戦理事/We Love 天神協議会コミュニケーション WG  
販売促進企画制作からイベント運営、WEB プロモーションなどを経験し 2009 年に独立。その裏側で、グリーンバードに参加したり、天神のまちづくりや福岡打ち水大作戦などに関わり、2010 年に福岡市と共働した福岡テンジン大学を設立。

大坪 恵太郎 氏 (福岡地所(株)開発事業本部課長)

1974 年鹿児島県生まれ。マリノアシティ福岡の開発・運営、リバーウォーク北九州の開発・運営を担当した後、株式会社福岡リアルティに転籍。福岡リート投資法人の立ち上げ、物件の組み入れ、上場、物件運用業務を担当。現在はキャナルシティ博多イーストビルの開発、天神明治通り街づくり協議会、がんばろう日本福岡・九州推進協議会事務局などの業務に携わる。

酒井 咲帆 氏 (株アルバス代表)

1981 年兵庫県生まれ。写真家。株式会社アルバス代表。2006 年に「九州大学ユーザーサイエンス機構子どもプロジェクト」の参加で福岡へ。まちな人々との対話・交流、とくに子どもを取り巻く風景を写真を通して考える。中央区警固に写真屋「アルバス写真ラボ」を営み、現在はそこを拠点にまちづくりに携わっている。

原口 可奈子 氏 (編集者・ライター/Wonderscope)

東京の通信社出版局にて書籍編集を担当後、「ケイコとマナブ 福岡版」、ブライダルマガジン「Lei wedding」とタウン情報誌「f Sketch」編集部を経て、現在フリーランスの編集者・ライターとして福岡市を中心に活動中。

出口 敦 氏 (東京大学大学院新領域創成科学研究科教授、九州大学大学院人間環境学府 客員教授)

東京大学大学院新領域創成科学研究科社会文化環境学専攻 教授  
九州大学大学院人間環境学府 客員教授  
東京都出身。1990 年東京大学大学院博士課程修了 (工学博士)。九州大学助教授、MIT 客員研究員、九州大学教授を経て、2011 年 4 月より現職。専門分野は都市デザイン学・都市計画学。著書に「アジアの都市共生」(編著、九州大学出版会) など多数。

(2) 配布資料

新VISION  
アジアのリーダー都市  
ふくおか!プロジェクト

## アジアのリーダー都市 ふくおか!プロジェクト

### 第8回 フォーラム

**日時** 2011年8月7日(日)  
開場 13:30 開演 14:00 (16:30終了予定)

**会場** 福岡アジア美術館・8階あじびホール  
(福岡市博多区下川端町3-1 リバレインセンタービル8階)

**内容**

14:00 **開会**  
**基調講演**  
**「都心の鍼治療型アーバンデザイン」**  
出口 敦氏 (東京大学大学院新領域創成科学研究科教授  
九州大学大学院人間環境学府 客員教授)

---

14:50 **データで語る福岡の今・未来**  
山下 永子氏 ((財)福岡アジア都市研究所専門研究員)

15:05 **トークセッション**  
**テーマ 都心のまちづくり**

**ゲスト**

- 岩永 真一氏 (NPO法人グリーンバード福岡チーム事務局長  
福岡デンシン大学学長)
- 大坪恵太郎氏 (福岡地所前地域開発事業本部課長)
- 酒井 咲帆氏 (前アルバス代表)
- 原口可奈子氏 (編集者・ライター/Wonderscope)

**コーディネーター** 出口 敦氏

16:30 **閉会**

主催：福岡市

**プロフィール**



ゲスト

**岩永真一氏**  
NPO法人グリーンバード  
福岡チーム事務局長  
福岡デンシン大学学長

販売促進企画制作からイベント運営、WEBプロモーションなどを経験し2009年に独立。その裏側で、グリーンバードに参加したり、天神のまちづくりや福岡打ち水大作戦などに関わり、2010年に福岡市と共働した福岡デンシン大学を設立。



ゲスト

**大坪恵太郎氏**  
福岡地所前地域開発事業本部課長

1974年鹿児島県生まれ。マリノアシティ福岡の開発・運営、リバーウォーク北九州の開発・運営を担当した後、株式会社福岡リアルティに転籍、福岡リート投資法人の立ち上げ、物件の組み入れ、上場、物件運用業務を担当。現在はキャナルシティ博多・イーストビルの開発、天神明治通り街づくり協議会、がんばろう日本福岡・九州推進協議会事務局などの業務に携わる。



ゲスト

**酒井咲帆氏**  
前アルバス代表

1981年兵庫県生まれ。写真家。株式会社アルバス代表。2006年に「九州大学ユーザーサイエンス機構子どもプロジェクト」に参加で福岡へ。まちの人々との対話・交流。とくに子どもを取り巻く風景を写真を通して考える。中央区豊園に写真屋「アルバス写真ラボ」を営み、現在はそこを拠点にまちづくりに携わっている。



ゲスト

**原口可奈子氏**  
編集者・ライター/Wonderscope

東京の通信社出版局にて書籍編集を担当後、「ケイコとマナブ 福岡版」、フライダルマガジン「Lei wedding」とタウン情報誌「Sketch」編集部を経て、現在フリーランスの編集者・ライターとして福岡市を中心に活動中。

**基調講演講師**  
**コーディネーター**



**出口 敦氏**  
東京大学大学院新領域創成科学研究科教授  
九州大学大学院人間環境学府 客員教授

東京都出身。1990年東京大学大学院博士課程修了(工学博士)。九州大学助教授、MIT 客員研究員、九州大学教授を経て、2011年4月より現職。専門分野は都市デザイン学・都市計画学。著書に「アジアの都市共生」(編著、九州大学出版会)など多数。

## 1. 概要

- ▽タイトル 「誰もが思いやりを持ち、すべての人に優しいまち～ユニバーサルシティ福岡」  
 ▽日時 8月19日（金）19時00分開会／21時00分閉会  
 ▽会場 アクロス福岡円形ホール  
 ▽内容 ・データで語る福岡の今・未来  
 ・パネルディスカッション  
 ▽パネリスト 張 愛 氏 （外国語翻訳、中国ビジネス支援）  
 西 政宏 氏 （福岡県立柳河特別支援学校英語教諭）  
 平井 康之 氏 （九州大学大学院芸術工学研究院准教授）  
 和栗 百恵 氏 （福岡女子大学国際文理学部准教授）  
 ▽コーディネーター 定村 俊満 氏 （㈱ジーエータップ代表取締役社長）

## 2. 提言内容、会場の様子

第9回フォーラムは8月19日、アクロス福岡円形ホール（中央区天神）で開かれ、福岡アジア都市研究所の専門研究員・山下永子氏による解説「データで語る福岡の今・未来」に続いて行われたパネルディスカッションでは、「誰もが思いやりを持ち、すべての人に優しいまち～ユニバーサルシティ福岡」をテーマに、パネリストとコーディネーターの計5人が、それぞれの立場から25年後の福岡に思いを巡らせました。



## ◎パネルディスカッション

## 『絆』や『縁』でみんなが楽に暮らせるまちに

障がいあっても気楽に外出できるまちに 西氏  
 「自分のままでいい」が本当に優しい社会 張氏  
 一人一人が「振れ幅」を広げ、多様なことを“自分事”に 和栗氏  
 みんなが一緒に考えて問題解決できる社会に 平井氏  
 幸せを感じるもとは選択の自由や連帯意識 定村氏

(文中敬称略)

## ■ユニバーサルシティを考えるヒント

**定村** 今日のテーマにある「ユニバーサルシティ福岡」というのは、高島市長が思いつきで言い出した言葉だそうですが、まだ実態はなく、その正体をつかむことが、このフォーラムの目的の一つでもあります。

今、全国の行政が取り組んでいるバリアフリーやユニバーサルデザインは、障がい者、高齢者と健常者の間にある壁を取り除こうというものです。「ユニバーサルシティ」の考え方には、外国人と日本人、女性と男性、子どもと大人、このまちの訪問者と居住者、お金を持っている人とあまり持っていない人、そういう関係も含まれると思います。まず、これらの間にどんな壁があるのかを知ることが、ユニバー

サルシティの考え方のヒントになるのではないかと考えています。



### ■それぞれの立場で感じている壁

**定村** 今日は、いろんなキャラクターの方にパネリストとして来ていただきました。まずは、ご自分がどういう立ち位置にいて、どういう壁を感じているかをお話してください。

**西** 私は全盲で、日ごろは盲導犬を使用し、時々白杖でも歩きます。住まいは佐賀県、職場は柳川市で、2週間に1回は福岡市に遊びに来ます。

視覚障がい者を取り巻く福岡市の状況は、とてもよくなっているように思います。歩きやすく、気軽に行けるまちになってきました。困っていたら「何かお探しですか」などと声を掛けていただくことも多く、とても助かっています。

ただ、いつ事故に遭ってもおかしくないと覚悟して出掛けているところもあります。点字ブロックの整備は充実してきたものの、その上に自転車や車が止まっていることが少なくありません。盲導犬の拒否事例も相変わらずです。その点、天神地区は9割方受け入れてくれるので安心です。天神以外の地域では、盲導犬のトイレを探すのも一苦勞です。盲導犬に限らず、いろんな状況の人に合ったトイレの整備も、これからの課題だと感じています。

ガイドヘルパーを使って行けるところにも制限があり、目が見える人だったら自分で普通にできることなのに、助けがもらえない。そのことに疑問も感じています。



**張** 私は1991年に福岡に来て、翻訳会社で働いた後、独立して起業し、2000年に日本の国籍を取得しました。それ以来、安心して福岡に住んでいます。

当時、市内の公共施設はまだまだ外国語の表記が不十分でしたが、最近は地下鉄やバスやデパートなど、多くの場所で中国語・韓国語・英語のアナウンスや案内表示を見聞きするようになりました。福岡市のホームページも中国語・韓国語・英語のバージョンがそろっていて、外国人も福岡の暮らしに役立つ情報を得ることができます。東京や他の地域に比べて、すごく進んでいると思います。

通訳として迎えた中国の人たちは、福岡は日本の中で一番親近感があって客をもてなす心が十分伝わってくると、口をそろえて言います。

**和栗** 私の専門は大学教育の高等教育研究という分野で、その中でも特に体験学習に力を入れています。2年前、福岡女子大学の改革で体験学習を取り入れるときに福岡に来ました。

福岡女子大の学生たちは「振れ幅」がすごく少なく、自分が知っている狭い範囲で日々生活しているように感じます。そんな中で、カキの養殖体験や商品開発、近隣の福津市での地域づくり活動など、大学では会わないような人たちとのやりとりを通して、「振れ幅」を少しずつ広げてくれたらと思っています。普段当たり前と思っていることが、外に出ることによって当たり前ではないことに気づき、そこで頑張ることによっていろいろなことが“自分事”になる。今日のテーマであるユニバーサルシティは、多くの人が多様なことを“自分事”にしたときにかなうのではないかと考えています。

**平井** 福岡に来て11年目になりますが、非常に住みやすいまちだなと感じています。私は大学で「生

活空間デザイン」と「インクルーシブデザイン」を教えています。「インクルーシブデザイン」というのはユーザー参加型のデザインで、これまで除外されてきたユーザー層を包含（インクルード）し、かつビジネスとして成り立たせるという考え方です。一般的なデザインと違うのは、障がい者・高齢者・子どもといった多様なユーザーとともにビジョンやアイデアを創造し、それを可視化（五感化）するというプロセスを経て、「ために」ではなく「ともに」作る場所。それには、日常生活の中のいろいろな気づきが重要です。あなたと私の違いを認識することで、お互いに理解し合い、「こんなのがあったらいいな」というみんなの思いを形にする。「私の価値」を「われわれの価値」に、そして「みんなの価値」に広げていくのです。



### ■25年後の福岡に願うこと

**定村** 福岡というまちの中で、多様なキャラクター、性格、立ち位置の人が生活しています。みんなと一緒に幸せになるためには、25年後の福岡はどんなまちになっていたらいいでしょうか。

**西** 歩きやすくなったとはいっても、やはりまだ頑張っている感があります。今はほとんど迷わずに天神を歩けますが、年を取って耳が聞こえにくくなったり記憶力が衰えたりしたら、今と同じように歩きやすいとは思わないかもしれません。25年後の福岡は、もっと気楽に散歩気分であらうと出掛けられるまちになってほしいですね。

ハード面でカバーできない部分については人の支援ということになるのですが、（障がい者への対応について）意識の高い人が10%か20%しかいないと、支援がその人たちに集中してしまいます。また、支援が必要なときに、その人たちがまちを歩いていなかったり先を急いでいたりすると、空白の時間や空白の場所が出てきます。だから、もっと裾野が広がって40%、50%、60%の人が社会をよくしていきたいと思わないと、住みやすいまちになっていかないだろうと感じます。そういった意味では、ユニバーサルデザインには、「住民の心のデザイン」も含まれるのかなと。

**張** 数年前に亡くなった祖母は40年近く目が不自由だったので、まちで目の不自由な方を見ると家族のように感じてしまいます。また、私の子どもが通っていた大名小学校と舞鶴中学校には、弱視やダウン症のお子さんがある学級がありましたが、毎日一緒に過ごしていると奇異な目で見ることなくなり、優しい気持ちを持ち豊かな心に育ったように思います。障がいのある方が普通にまちの中を歩けるようになれば、市民もだんだん普通に受け入れるようになるのではないのでしょうか。

社会の中で壁を感じているのは障がい者だけではなくありません。男性になりきれないと職場でやっていけない女性。日本人になりきれないと日本で暮らしていく外国人。大人に気を遣いすぎる子ども。こんなふう無理して向かい側に行かなくても、「自分は自分のままでいいのだ」と思えるようになったとき、本当に優しい社会になったといえるのではないのでしょうか。



**和栗** 私はそれほど長く福岡にいないだろうと思っていますが、25年後の63歳になった自分が、また福岡に行ってみたく思ったり、周りの人に対して「福岡はすごくいい所よ」と言えるようなまちになっていたらいいなと思います。

仕事絡みでいえば、福岡女子大がお茶の水女子大や日本女子大と並んで、全国の女子高生が行きたいと思う大学になっていたらいいですね。そして学生たちが大学の中だけで講義を受けるのではなく、常

に実社会と行き来して現場で学びながら役に立ち、現場もそんな学生から元気をもらって学生を育てることを楽しいと思う。そんな状態になっていることを願いながら、日々仕事をしています。

**平井** 25年後といえば75歳。西さんの話にもあったように、気を使わずに自分で動き回れて、「一人で」と「みんなで」の割合がちょうどいい社会であってほしいと思います。そのためには人の意識がすごく大事で、できるだけみんなと一緒に考えて問題意識を共有し、それを解決するためのきっかけをたくさん作れる社会だといいですね。さまざまな気づきをみんなで理解して、一緒にいろいろ作って試してみる。そういうことを福岡市の方でも考えて実現していけるような、双方向の社会になればいいなと思っています。

### ■みんなが幸せになるためにはどうすれば？

**定村** ハード整備も大事ですが、住んでいる人の力や意識の問題も含めて、ソフトのありようが鍵を握るのではないかという気がしています。楽に相手のことを考えられて、頑張らずにみんなが幸せになるためには、どうすればいいでしょうか。



**西** 一つは、あえて社会の中に出て行くことでしょうか。障がいのある人が、不便でも歩きにくくても、まちの中に出て行く。障害のない人と同じ場所で、あえて一緒に学んだり仕事をしたりしてみる。あるいは女性が、働きにくいことや関わりにくいことがあっても、あえて女性の少ない職場で仕事をやる。そういうパイオニア的な人は必要だろうと思います。その一方で、皆さんに学びを深めていただく。一部の人に任せておくのではなく、みんなで解決しなければならないということを学び合い、情報交換し合うような場所が必要なのではないでしょうか。

**張** 福岡市の優位性の一つでもある観光客を増やすために、さまざまな形で海外に出掛けて福岡をPRすべきだと思います。たとえば日本国内外の著名人を観光大使に任命するとか。行政が経済界ともっと連携し、25年後の観光客の意識を想定した環境づくりをしてほしいと思います。福岡を訪れた外国人が一番魅了されるのは、山笠に代表される伝統文化です。そして福岡市がこれから目指す心のユニバーサルは、一つの文明でもあります。万国の人から親しまれ愛されるまちになることを期待しています。

また、日本に住む外国人の中には、外国人というだけでハンディがあったり、生活する上で不便さや不愉快さを味わっている人もいます。外国人を迎える側の意識の変化も大事だと思います。

**翻訳・通訳の傍ら、悩み相談の仕事もしていますが、25年後は子育て中の母親たちがひとりひとり心から笑顔でいられるようなまちであってほしいとも願っています。**

**和栗** 一人一人が意識して「振れ幅」を広げる体験を積む工夫が必要だと思います。そのために私にできるのは、日々の仕事の中でそのような機会を設けることと、私自身ももっと「振れ幅」を広げること。今日も西さんにお会いしたことで、ずっとたなざらしにしてきた名刺の点字化をしようと思いました。

驚いたり、怒ったり、なんで？と思うことなく「そのままでいいよ」というのは、無関心につながります。何となく世の中にそういうメッセージがあふれているような気がします。学生たちには「もっと反応して」「もっと怒って」と言うんですが、「振れ幅」をいつも振らしていくような努力を、自分の中でも周りでも起こしていきたいです。



**平井** デザインの考え方で、一度未来に飛んで今に戻るという発想方法があります。来年ではなく10年後やもっと先のビジョンを考えて、じゃあ今何ができるかということで戻ってくる。25年後を考えるためには、コストや納期といったものを全部外して、「こんなものがあつたらいいんじゃない？」というアイデアをみんなで出し合って、そのビジョンに向かって今何ができるかを考える。そういうやり方もあるかなと思っています。日常の中の「何か変だな」「なんでこんなことができないのかな」ということにみんなで気付いて、じゃあどうしたらいいかということでアクションを起こす。そうすると、25年後は違う世界になるのではないのでしょうか。

## ■会場発言を受けて

**参加者** この会場に来ている人は、おそらく好奇心が強く、おせっかいで、他人に対していろいろなことを語りたがる人が多いと思います。ある意味、おっちょこちょい。でもそれが博多の人間で、一種の誇りでもあります。そういう市民になろうよ、というアクションプランが要るような気がします。

**張** 今の話には、すごく共感できます。私自身、何の肩書きもない市民の親切なサポートのおかげで、仕事と育児を両立できたと思っています。お金持ちの外国人に対しても、お金持ちじゃない外国人に対しても、同じように、いわゆる「おっちょこちょい」をみんなでしていくと、福岡はますます成熟度を増して、アジアや世界に誇れるまちになるのでは。

**定村** いいですねえ。ユニバーサルシティではなく、おっちょこちょいシティ（笑）。

さて、「子ども幸福度」や「国民幸福度」の調査結果を分析すると、幸せを決める決定的な要因はお金ではありません。生活の中で選択の自由があるか、男女の平等があるか、共同体の連帯意識がきちんと働いているか。そんなことが、幸せを感じるもとになっています。

これからは日本も価値を変えないといけません。GDP（国内総生産）などではなく、もっと日本人が昔から大切にしてきたもの。それはきっと、「絆」や「縁」ではないのでしょうか。多様な立ち位置、性格、キャラクターの人が一緒に相手のことを思い、みんなが楽に生活できるまち。みんながありのままに知り合い、気軽に付き合い、肩の力を抜いてサポートできるまち。25年後の福岡がそうなるために、高島市長が言いだした政策が動いてくれるといいな、という気がしました。

「ユニバーサルシティ福岡」の計画はこれからです。実現させるためには具体的な方法が要ります。論文募集もしていますので、どんどん意見を出してください。ぜひ、みんなで考えましょう。



## 3. 資料

### (1) パネリスト・コーディネーターのプロフィール

**張 愛 氏**（外国語翻訳、中国ビジネス支援）

1965年中国四川省生まれ。1986年四川大学外国語学部日本語科卒業。1988年監査法人トーマツの研修生として来日。1991年より福岡を拠点に日中韓広域で同時通訳者としても活動中。2000年に日本国籍取得。

**西 政宏 氏**（福岡県立柳河特別支援学校英語教諭）

1976年、佐賀県生まれ。西南学院大学英文学科卒。2000年、福岡県採用。現在英語教師として柳河特別支援学校に勤務。全盲で盲導犬使用。音声・点字地図作製グループ「くすくすマップ」代表。

平井 康之 氏 (九州大学大学院芸術工学研究院准教授)

1961年大阪生。九州大学大学院 芸術工学研究院 デザインストラテジー部門 准教授。医療、博物館、製品開発など様々な領域で、多様なユーザーとともにデザインする「インクルーシブデザイン」の研究と実践を行っている。

和栗 百恵 氏 (福岡女子大学国際文理学部准教授)

東京都町田市出身。スタンフォード大学大学院修了後、スリランカや日本の NGO で国際協力に従事。その後、中央大学、早稲田大学、大阪大学にて大学教育における体験学習を実践。抜本的改革が進む福岡女子大学に 2009 年 10 月着任。

定村 俊満 氏 (㈱ジーエータップ代表取締役社長)

1951年北九州市生まれ、九州芸術工科大学画像設計学科卒業。専門領域は環境デザイン、コミュニケーションデザイン。地下鉄七隈線のトータルデザインが世界で評価され、京都、オスロ、ヘルシンキ等、多くのUD国際会議で基調講演をおこなっている。NPO FUKUOKA デザインリーグ副理事長、社団法人日本サインデザイン協会常任理事、山口大学工学部非常勤講師。

(2) 配布資料

**新VISION**  
アジアのリーダー都市  
ふくおか!プロジェクト

**アジアのリーダー都市  
ふくおか!プロジェクト**

**第9回 フォーラム**

**日時** 2011年8月19日(金)  
開場 18:30 開演 19:00 (21:00 終了予定)

**会場** アクロス福岡・1階円形ホール  
(福岡市中央区天神 1-1-1)

**内容**

19:00 **開会**  
ユニバーサルシティについて  
定村 俊満 氏 (㈱ジーエータップ代表取締役社長)

19:13 **データで語る福岡の今・未来**  
山下 永子 氏 ((財)福岡アジア都市研究所専門研究員)

19:30 **パネルディスカッション**  
**テーマ** 誰もが思いやりを持ち、  
すべての人に優しいまち～ユニバーサルシティ福岡

■パネリスト 張 愛 氏 (外国語翻訳、中国ビジネス支援)  
西 政宏 氏 (福岡県立柳河特別支援学校英語教諭)  
平井 康之 氏 (九州大学大学院芸術工学研究院准教授)  
和栗 百恵 氏 (福岡女子大学国際文理学部准教授)

■コーディネーター 定村 俊満 氏 (㈱ジーエータップ代表取締役社長)

21:00 **閉会**  
主催：福岡市

**プロフィール**

**パネリスト**

**張 愛 氏**  
外国語翻訳、中国ビジネス支援  
1965年中国四川省生まれ。1986年四川大学外国語学部日本語科卒業。1988年監査法人トーマツの研修生として来日。1991年より福岡を拠点に日中翻訳で同時通訳者としても活動中。2000年に日本団体取組。

**西 政宏 氏**  
福岡県立柳河特別支援学校 英語教諭  
1976年、佐賀県生まれ。西南学院大学英文学科卒業。2000年、福岡県採用。現在英語教師として柳河特別支援学校に勤務。全盲で盲導犬使用。盲声・点字地図製作グループ「くまぐまマップ」代表。

**パネリスト**

**平井康之 氏**  
九州大学大学院芸術工学研究院 准教授  
1961年大阪生。九州大学大学院 芸術工学研究院 デザインストラテジー部門 准教授。医療、博物館、製品開発など様々な領域で、多様なユーザーとともにデザインする「インクルーシブデザイン」の研究と実践を行っている。

**パネリスト**

**和栗百恵 氏**  
福岡女子大学国際文理学部 准教授  
東京都町田市出身。スタンフォード大学大学院修了後、スリランカや日本の NGO で国際協力に従事。その後、中央大学、早稲田大学、大阪大学にて大学教育における体験学習を実践。抜本的改革が進む福岡女子大学に 2009 年 10 月着任。

**コーディネーター**

**定村俊満 氏**  
株式会社ジーエータップ 代表取締役社長  
1951年北九州市生まれ。九州芸術工科大学画像設計学科卒業。専門領域は環境デザイン、コミュニケーションデザイン。地下鉄七隈線のトータルデザインが世界で評価され、京都、オスロ、ヘルシンキ等、多くのUD国際会議で基調講演をおこなっている。NPO FUKUOKA デザインリーグ副理事長、社団法人日本サインデザイン協会常任理事、山口大学工学部非常勤講師。

## 1. 概要

- ▽タイトル 「25 年後のために～次世代の育成」
- ▽日時 8 月 27 日（土） 14 時 00 分開会/16 時 30 分閉会
- ▽会場 福岡ビル 9 階大ホール
- ▽内容
1. データで語る福岡の今・未来
  2. トークセッション
    - 第 1 部「25 年後の福岡を語る」
      - ▽ゲスト
        - 古池 梨紗 氏（福岡雙葉学園高等学校 2 年生）
        - 庄 善勇 氏（九州大学大学院修士課程）
        - 三船 正士 氏（書家、九州大学 21 世紀プログラム課程 4 年）
        - 楊 帆 氏（九州大学大学院博士課程）
      - ▽コーディネーター
        - 加藤 暁子 氏（「日本の次世代リーダー養成塾」事務局長）
    - 第 2 部「次世代の育成」
      - ▽ゲスト
        - 栗栖 慎治 氏（NPO アジア太平洋こども会議・イン福岡専務理事）
        - 中垣 量文 氏（株全教研 常務取締役管理本部長）
      - ▽コーディネーター兼ゲスト
        - 加藤 暁子 氏

## 2. 提言内容、会場の様子

第 10 回フォーラムは 8 月 27 日、福岡ビル 9 階大ホールで開かれ、福岡アジア都市研究所の専門研究員・山下永子氏による解説「データで語る福岡の今・未来」に続いてトークセッションが行われました。

第 1 部では、「25 年後の福岡を語る」をテーマに福岡市在住の高校生や大学生、留学生が体験に基づくさまざまな意見を交わし、続く第 2 部では子どもに携わる事業を展開しているパネリストが「次世代の育成」をテーマに議論を繰り広げました。



## ◎トークセッション第 1 部「25 年後の福岡を語る」

## 一人ひとりが活躍する、きれいなまちふくおか

- 一人ひとりの意識を変え、マナーの向上を 古池氏
- 日本の経営方法を学び中国で生かす 庄氏
- 地域で体験を通じて学ぶ機会を 三船氏
- 福岡が中国とアジアの交流の拠点に 楊氏

（文中敬称略）

## ■自己紹介とパネリストの活動状況

**加藤** まず自己紹介を兼ね、今、どんなことをやっているかお話しください。

**古池** この夏、日本の次世代リーダー養成塾に8期生として参加しました。今は、もう学校が始まっているので学園祭の準備などで忙しい毎日を送っています。

**庄** 私は九州大学経済学部修士1年の庄善勇と申します。現在は夏休みですので、麻生グループの会社でインターシップとして働いています。

**三船** 九州大学21世紀プログラム課程です。「日本の次世代リーダー養成塾」には高校2年生のときに第3期生として参加しました。現在は大学に通う傍らで書家アーティストとして全国で講演活動や作品の展示販売をしています。

**楊** 九州大学工学部博士課程です。私は中国留学生学友会の会長として、中国と日本の文化や芸術の架け橋の役割も行っていきます。



**加藤** 庄さんは中学生の頃から日本語を学んでおられるようですが、きっかけは何でしょう。また、学友会会長を務める楊さんが福岡を選んだ理由は何でしょうか。

**庄** 私は大連出身です。日本語を選択した理由は、私のおじさんの1人が旅行会社に勤めていて日本人観光客向けのガイドをやっています。その影響があるかもしれません。

**楊** 福岡を選んだ理由は、日本はものづくりの技術があり、さらに九州大学は化学が強いので福岡に来ることにしました。また、今年から中国人の国費留学もどんどん増えています。その他、専門学校生も増えています。

## ■福岡の良いところ、悪いところ

**加藤** 三船さんは天神などで書家アーティストとして活躍し、また大学では道州制について勉強したりしているようですが、福岡市の良いところはどんなところでしょう。

**三船** 福岡市に住み始めたのは3年前。福岡市の印象は人情味があるところです。以前から子どもと活動するボランティアをやりながら、子どもにポストカードをプレゼントしていました。それが書家として活動するきっかけとなりました。キャリアアップのために天神の路上で活動を行った時もありましたが、幅広い年齢層の方から声をかけていただきました。目新しいことに関心をもってくれる地域だと思います。



**加藤** 高校生や留学生の立場で、福岡市の良いところはどんなところでしょう。

**古池** 街がきれいだというのと、人か温かいところだと思います。

**庄** 私は2003年に大分大学で交換留学していました。大分市と比べると福岡市の方が都会っぽいです。そして街がきれいで、三船さんがおっしゃったように人情味があると思います。

**楊** 私も福岡は街がきれいだと思います。奨学金が15万円ほどでていますが、他の都市では厳しいでしょうが、福岡市では十分やっています。

**加藤** 私は東京出身で、1982年に就職した最初の赴任地が福岡でした。サツ回りの記者でしたので、とにかく刑事さんたちが親切でした。その後、経済部の記者もしました。取材対象が帰って来られるまで外で待つのですが、奥様方は「家に入りなさい」「一人暮らしなら食べていかんね」と声をかけてくださいます。こんなまちはほかにないですね。人が温かくて、優しい。この部分を是非とも売りにすべきではないかと思っています。

留学生の皆さん、親元を離れて心細い思いもすると思いますが、いかがですか。庄さん、友だちは出来ましたか。

**庄** いっぱいできました。友だちとよくカラオケや遊びに行ったりします。

**加藤** それでは、問題点はどうでしょう。

**三船** 福岡の方はよくも悪くもお祭好きなイメージ。路上をしていた当時、夕方5時以降になると仕事帰りにお酒を飲んで、団体で大騒ぎする方々もいらっしゃいました。路上の道具を10cmくらい下げたおかないと足を踏まれたりした覚えも。駐輪のことなども問題になっていますが、歩行者と自転車がぶつかる場面も目にします。マナーの点では気になることがあります。

**古池** たまに学校で「学校の近くで変質者が出るので気をつけるように」などと言われることがありますが、これはよくないところだと思います。

**庄** 実は、おととい自転車を盗られました。駐輪の安全には、問題があると思います。

**加藤** 福岡では飲酒運転の問題、駐輪の問題など新聞社でもキャンペーンをはったりしています。このようなところは改善した方がいいと私自身も思います。歩道が狭くて、自転車や歩行者が離れづらいのではないかと思います。三船さんいかがですか。

**三船** ストリートで活動した経験があるからこそ、今の自分があるのですが、課題が山積しているように思います。よく路上で外国人がパフォーマンスをしたりしていますが無許可で実施している方が多くいますし、歩道や公共の場のマナーは行政などで調整した方がよいのではないかと思います。

**加藤** 福岡は留学生の人数がとても多いですが、中国留学生学友会の会長をされていて、実際、福岡の方との交流の場はありますか。

**楊** 民族音楽を聴いたり、福岡市でのイベントを一緒に行ったりしています。また地方で英語教室をしたりしています。

## ■夢を実現する場としての福岡

**加藤** 庄さんは麻生グループの企業でインターンをされています。外国人と日本人との橋渡しとして、どんな仕事をしていますか。

**庄** 麻生グループのひとつである、ユニバースクリエイティブは、もともとは日本人学生の就職支援を行っていましたが、現在は主に留学生の就職支援を行っています。去年は主に福岡市と北九州市で留学生向けの就職説明会をしました。その他DMを送ったり、企業に電話を掛けたり、訪問したりしています。



**加藤** 中国の企業と日本の企業で違いはありますか。

**庄** 中国では日本人観光客向けのガイドのアルバイトをしたことがあります。比べてみると、日本企業の方がスタッフに対して思いやりがあると思います。具体的には自分の考えをすぐに上司に言うことができます。

**加藤** 三船さんはストリートを卒業して今は、書家アーティストとして企業とおつきあいしてはいかがでしょうか。

**三船** 福岡の企業さんとイベントをすることもありますが、県外の企業さんとイベントをすることもあります。主にメーカーさんの販売会の際にお客様にその場で作品を作って差し上げたり、額縁つきで贈答用に作品販売をしています。また大きな筆を使って書道パフォーマンスを行っています。福岡の企業の特徴は、人情味がある、思い切りが良い点。そのおかげで私もひとりの書家として企業様に御支援をいただけていると思います。金銭面、待遇などの面でも感謝ばかりです。企業側の要望が高い時もありますが、期待が高いことの表れと受け止めており、大変有難く思います。

4月まで就職活動をしていましたが、履歴書に書家としての活動を書き込むと、次回は企画書を持ってきなさいと言われました。

**加藤** 大学生ではなく、仕事のパートナーとしてみられたわけですね。続いて、庄さん、楊さん。卒業後はお国に帰りたいたいのでしょうか、それとも日本に留まりたいのでしょうか。

**楊** 大学ではレアアースの研究をしています。中国には資源は豊富にありますが、レアアースの技術は日本の方が高いので、日本と中国、両国の利益を考えて、架け橋になりたいと考えています。



**庄** 私は10月あたりから就職活動をしていく予定です。日本のメーカーに就職して10年間は働きたいと考えています。**現在**、管理会計を学んでいまして、トヨタのカンバン方式を研究しています。(トヨタではないが、)ホンダ杭州を見学に行ったことがあります。原価マネジメントはやはり凄いと思いました。そのとき日本で原価マネジメントを学びたいと決心しました。今は、カンバン方式を中国にどのように導入していけばよいかを研究しています

**加藤** 中国の企業の中に日本の方式を入れていくのは難しい点もあると思いますが、その点はいかがですか。

**庄** 日本の経営方法を中国に取り入れて、現地スタッフを募集する際に日本の文化をどれだけ理解しているかは大切だと思いますので、できるだけ日本に留学経験のある人を採用したいという企業が多くあります。私の考えでは日本企業の技術を導入する際に留学経験のある人材がいた方が企業文化も生きると思います。

**加藤** 日本のお2人の今後の夢を聞かせてもらえますか。

**古池** 将来の夢は、みんなが幸せになれるような、福岡を元気にするようなイベントをしたいと思います。



**三船** 私は、大学で地方分権のゼミに入っていますが、今後は書家アーティストの活動も融合して地方や公共空間を舞台に、アートをテーマにしたイベント企画を行っていきたくと考えています。それに加えてアーティスト側の視点として、アーティストが生活をしていながら日常的に表現していけるシステムを構築したいと思います。福岡が文化的にも発展していけるきっかけづくりができればいいなと考えています。

**加藤** データで、「福岡は住みやすいまちだけれど、文化的にはまだ余地がある」という話がありましたが、活動されていて要望はありますか。

**三船** アクターの順位がアーティスト31位というのがありましたが、これは決して不満があるわけではなく、伸びしろのある31位だと思います。福岡はイベントの数は多いものの、歌やパフォーマンスなどアーティストが活動できる場が少ないと思います。

公共空間における問題点などを洗い出して、日常的に文化に触れる機会を増えていくことが、今後福岡市が伸びるために重要なことではないかと思っています。

今度、9月10日に福岡市役所で「好いとうよ FUKUOAKA」というイベントを大学生が企画しており、私のようなパフォーマーも出ます。福岡を中心に活動されている歌手の方も出ます。また企業や大学がブースで出店もします。行政やパフォーマーと一緒に、いろんな世代の方が関わっていくイベントは面白いと思いますし、大事だと思います。

## ■教育に必要なこと

**加藤** データで、「のんびり暮らしたい」というのがありました。競争の激しいベビーブーマーの世代から一転して、のんびり暮らしたいという意識は、昭和34年生まれの私から見ると大丈夫かなと思いますが、それは私の価値観。今の高校生からみていかがですか。

**古池** そういう考えをもっている意味では良いことだと思う反面、悪い側面もあると思うので、一概

に良い悪いは言えないと思います。さきほどの小学生の意識調査結果については、私も「それでいいのかな」と思いました。

**加藤** だいたいどのくらい勉強しているのでしょうか。8月16日から学校がはじまっていることに驚いたのですが。

**古池** 「2～3時間は勉強するように」と学校から言われています。16日から補習という形なのですが、主要教科を普通の授業と同様に進んでいます。授業に出ないと、どんどん遅れるので全員出席しています。

**加藤** 中国や韓国の学生は凄い競争だというイメージがありますか、実際はどうですか。

**庄** 中国の受験戦争は厳しいと思います。私は高校生のときは朝7時には校に行って、夜7時まで学校で勉強していました。

**楊** 中国の受験戦争に比べると福岡の高校生はずいぶん楽だと思います。

**加藤** 「日本の次世代リーダー養成塾」では著名な方に1時間講演をさせていただいて30分質疑応答の時間を設けています。ほとんどの子が手をあげて質問して、その後20人ずつくらいでディスカッションをします。学校ではディスカッションする時間がなく、先生が一方的に授業をしているようですが、三船さんはディスカッションを学校に取り入れていく必要性は感じませんか。

**三船** ディスカッションは必要だと感じます。高校2年生のとき2週間「日本の次世代リーダー養成塾」に参加した後、高校の授業に戻ったときは大きなギャップを感じました。学校ではみんな静かで、先生が「質問ないか」といわれても誰も手をあげません。手をあげるとクラスメイトに白い目でみられるような雰囲気があります。積極的に発言することは良いこと、質問することで理解も深まりますし、座学の勉強にもつながります。

そして、学校教育も大切だと思いますが、それ以上に地域での生涯教育も大切だと思います。書家をする前に12年間、古賀市の育成会で指導員のボランティアをしていました。子ども達が自分で考えて行動することや体験したことから学ぶことが大事。体験する機会が減ってきていると思うので、今後伸ばしてほしいです。

## ■25年後の福岡に望むこと

**加藤** 25年後の福岡について、こうなったらいいなという意見をおきかせください。

**庄** 福岡に最初に来たとき、きれいなまちだと思いました。25年後もっともっとよくなってほしいです。

**楊** 福岡は中国に最も近い都市です。25年後、中国とアジアの交流の拠点になって欲しいと思います。

**古池** 自転車のマナーなどの問題点があがっていましたが、意識が変わっていけば良いと思います。

**三船** 25年後も人と人とのつながりが変わらない福岡でいて欲しいと思います。

## ◎トークセッション第2部「25年後の福岡を語る」

### あいさつから始め、アジアの交流拠点をめざそう

コミュニケーションを促す機会づくりを 栗栖氏

地域の教育力向上と知的探究心を満たすまちづくりを 中垣氏

福岡がアジアの交差点に 加藤氏

(文中敬称略)

## ■自己紹介とパネリストの仕事の内容

**加藤** まずはお二方の紹介をお願いします。

**栗栖** アジア太平洋子ども会議では、アジアの30数国40地域から11歳の子ども250名が福岡でホームステイをしてもらいます。もう23年になりますので、福岡に来た子どもたちは延べ8000人にのぼります。これは海外の子どもたちを福岡に呼ぶプロジェクトですが、2つ目として春に福岡の子どもたちを海外に送り出すミッションプログラムがあり、今年も7か国に行って参りました。3つ目は、8,000人の卒業生が組織したフェイスクラブが25か国にあり、いろんな活動をしています。お金を集めて、タイで学校をつくったり、バングラディッシュでは無料歯科検診を行っています。これも子ども会議の一環です。9月24日に「思いやりが生まれた日」というタイトルで子ども会議の事業報告を行います。映

像を交えて、こども会議のストーリーを説明させていただく会を開きます。無料ですのでみなさまご参加ください。



**中垣** 私どもは、北部九州に 60 教室程、学習塾を運営しています。子ども達の学力の向上と志望校への合格がミッションです。来年で創業 50 年ですが、創業者である父はもともと聾学校の教師でした。その経験から、素質と環境とやる気の相乗効果で、すべての子どもは無限に伸びる可能性を持っていることを実感し、塾を始めました。現在もその精神は受け継がれ、子どもたちが自ら学ぶ能力を身につけることを目標に日々の活動に取り組んでいます。

今日のテーマが「次世代の育成」ということで、さきほど若い皆さんが人前で堂々と自分の意見を言う姿を見て、自分が若いときは恥ずかしくて人前では話せなかったことを思い出しました。

**栗栖** 私は第 1 部の皆さんの共通点を考えていたのですが、4 人とも目標が明確だということ。夢がある。まちを元気にしたいとおっしゃっていましたが、自分が高校生のときにそんなことを考えたかどうか。あるいは、三船さんはストリートパフォーマンスをしているとのこと。三越の横でミュージシャンの歌を聴くのが好きですが、よく人前で歌が歌えるなど感心します。彼らにはミュージシャンになりたいという夢があるのでしょうか。そして留学生のお 2 人もわざわざ隣の国まで来て勉強されています。みんな夢に向かっていく行動力があるのでしょうか。先ほどデータで説明された日本の若者の意識調査とはギャップがあるな、と思いました。

そのギャップを埋めるためには今日出て来られたような方がリーダーになる必要があると思います。それを見て「ぼちぼち行こうか」という若者の意識が変わるといいと思います。

#### ■いまの子どもたちに欠けていること

**加藤** 小学生から高校生まで年齢の幅がありますが、中垣さんは今の子どもをどのように見えていますか。

**中垣** 例えば、あいさつについてですが、塾に来たときに元気にあいさつする子はもちろんいるのですが、まったくしない子の割合が増えているような気がします。また、人の話をじっと聞く姿勢が身につけていない子どもの割合が増えています。

なぜこうなったのか。子どもは大人の背中を見て育ちます。家庭や地域の教育力の低下が原因ではないでしょうか。子どものためにどうするべきか大人が問われていると思います。

**加藤** 私も同感です。リーダーたるもの、自ら進んで行くべきと思っておられますので、8 年前に「日本の次世代リーダー養成塾」をはじめたとき、掃除やあいさつについても何も言いませんでした。しかし、高校生になってもあいさつができない、ほうきの使い方も雑巾の絞り方がわからない子どもがいました。また、携帯電話は預からずにいましたが、電話を掛けてくるのは親ばかりで、子どもの心配ばかりしています。

そのほか、授業の前に起立して礼をすること、先生に対してリスペクトするのは日本の美德だと思っていましたが、今の学校ではやっていない。お客様が来られていても、先生の前でも体育館では体育座りのままのあいさつでした。子どもの教育が必要なのはもちろんですが、親の教育も必要かと思えます。



#### ■国際都市福岡に必要なこと

**加藤** 福岡には国際都市という面があると思いますが、栗栖さんいかがでしょう。

**栗栖** 博多駅に名物おまわさんがいます。道行く人に元気にあいさつされるのですが、大人たちは黙って通り過ぎるだけ。ある時「おまわりさん、ごくろうさま」と大きな声が聞こえたので振り返ったら、高校生でした。そこにいた大人たちはどう思ったでしょうか。

20数年前、私どもの工場がある島根県の益田に初めて行ったときの話です。工場に着くまでに小学生からお年寄りまで、十数名の方が見ず知らずの私にあいさつをされました。現地のスタッフに話したら、当然という感じだったことに驚きました。そこは、現在もあいさつをするまちです。福岡市もあいさつをするまちになれば素敵だと思います。思いやりの気持ちを持つこと、「元気？」と声を掛けることは国際化の第一歩だと思います。

**加藤** 今後、海外とりわけアジアとの係わり合いなくして日本は生き残っていけないと思います。子どもに国際感覚を身につけさせるために必要なことは何だと思われますか。

**中垣** まずは、外国人とのコミュニケーションの場を増やすことだと思います。英語と日本語とのギャップが大きいですが、音声言語は小さい頃から体験していれば習得可能です。今年から小学5、6年生の英語が必修化されましたが、文部科学省から具体的な指導がないので各学校では手探り状態です。英語に触れる場、体験する場を増やすことが大事だと思います。

**栗栖** 海外からこども会議に参加する子どもは、英語が話せても話せなくてもワンワン言い合いますが、日本の子どもは片隅でポツンとしている場面があります。しかし、みんなの前では話しかけたりしないけれど、2人だけになると身振り手振りで懸命に交流しようとしています。話をしなければならぬ、コミュニケーションをとらなければならない環境をどれだけ作ってあげられるかだと思います。

**加藤** 私たちは、学校で文法などを習ううちに、正しく話さなければいけないという思いが強くなって、中学校から大学まで10年間英語を習ってもしゃべれません。もったいないですよ。間違ってもいいからコミュニケーションをとるということが大事だと思います。

日中韓で学生サミットを開いたとき、中国人、韓国人は人の話を聞かずバンバンしゃべっていました。日本人はしゃべらないけれど人の話をよく聞いていて、まとめることはしっかりできていました。しゃべり続けるだけがいいんじゃないかと、まとめることも大事な役割だと思いますので、日本の美德を活かせる。そういう意味で福岡はアジアの交差点みたいなかたちで、できることがあると思います。

## ■学校教育に必要なこと

**加藤** 学校教育についてご意見をお聞かせください。

**中垣** 学校の先生はとにかく忙しいです。クレームの対応やその報告書の作成などいろいろな事務的の仕事が多すぎて子どもと触れ合う時間が不足気味です。また、高校自体、〇〇大学に〇人合格させたということに傾注しているような気がします。大学合格のための教科学習は必要ですが、考えを深めるための討論の場が学校教育のなかで必要だと思います。グローバルな時代、様々な国と共存しコミュニケーションをとっていかなければなりません。討論をし、自分の考えを他人にきちんと伝える能力を学校で育む必要があると思います。

**栗栖** 先日、バン格拉ディッシュへ縫製工場の見学に行きました。案内してくれた駐在員の方は、ひどくブロークンな英語でしたが通じていました。きれいな英語でなくも自信をもってコミュニケーションをとろうとしているから通じるのだと思いました。外国人と話す環境が必要だと思いますが、福岡にいとこの機会がありません。福岡市には留学生がたくさんいるので、学校登校やこども会議、教育委員会などとも連携をとって場づくり、環境づくりをつくっていくのが大事だと思います。

**加藤** 今年、「日本のリーダー養成塾」でアンケート調査を行いました。「わが国の国家的課題とは」という問に対する答えをアトランダムに紹介します。「非常時に対応できる人材が政府にいない」「勉強は楽しいし生きていくためには必要だと思うが、自らの気づきがないと学習意欲が湧かないので、教育体制や受験体制を根本から変える必要がある」「いまのままでは希望がもてない」「政治家は指導力がない、本質を伝えない報道にも問題があるので教育を変える必要がある」「英語教育を充実していかないと国際的な場で戦えない」「日本文化の継承、言語と文化は密接な関係がある」「日本は資源がない国、人材だけでここまで来たのだから、人材育成に失敗した今、教育を見直す必要がある」などです。上から目線の意見でしたが（笑）。

かつて上海航路があって、長崎から中国にどんどん人が渡っていました。今は福岡からビートルも出ていますし、歴史的にも中国、韓国との関係が深いことは、大きなメリットだと私は思います。20年以上続いているこども会議、まさにグラスルートですよ。大人の世代が日常的にこのようなことをやっていると次世代が新しい時代をつくっていくのではないのでしょうか。

「日本の次世代リーダー養成塾」をはじめて8年になります。改革派の方々とやるということで、立ち上げ当初は福岡を皮切りに、全国いろんな都市を持ち回りでやろうということでしたが福岡市だけでずっとやっています。協賛金を出してくださる財界があります。大人の方々の下支えがある、官民一体となってやっていける土地柄を大事にしていくべきだと思います。

**栗栖** 東京の企業は、日本という大きな目線で捉えているのだと思いますが、福岡の場合は、福岡のためにどうなのか、福岡の子どもたちにどう良いのということに大変こだわられます。「資金は出すから福岡のために、子どもたちのために有効に使いよ」とプレッシャーをもらうことで、我々も良い事業にしようと思います。財界の方や行政方とは緊張感のあるいい関係が出来上がっていると思います。

**中垣** 子ども会議は、青年会議所時代にお手伝いをさせていただきました、23回も続いているイベントは他にはないと思います。活動を支える郷土愛といいましょうか、福岡、九州を愛する気持ちが皆さんにあります。人情味豊かで住みやすいということで、通勤族でリタイア後に福岡に住んでいる方がたくさんいます。みんなで支えていくまちになればいいと思います。



#### ■25年後を見据えて福岡に望むこと

**加藤** やさしいまち、思いやりのあるまち、アジアに開かれたまちとして、今後、25年後を見据えて今日から出来ることについて、思いつかれることがあったらお願いします。

**栗栖** リオだったらカーニバル、カンヌだったら映画祭というイメージがあります。福岡だったら国際交流が盛んなまちというようになったら素敵だと思います。こども会議でも大人になったら、また行きたい、帰りたいと思ってもらいたい。留学やビジネスで帰ってきたくなる福岡になってほしい。交流できるまち、住みやすいまちになればいいなと思います。

コミュニケーションするために語学力の高いまち、留学生の力を是非借りたいと思います。今日一日は英語だけでしゃべるような授業や韓国にある英語村みたいなものが福岡にあっても良いと思います。思いやりのある人が多いまち、そのためにはまずは「あいさつ」からではないでしょうか。

**中垣** 子どもは体験不足なのです。家の近所で親や同級生以外と交流する場がたくさんあり、地域であいさつをして、みんなで子どもを育てる場づくりによって、家庭と地域の教育力を高めることが必要だと思います。

また25年後、元気な福岡であるために、知的探求心を満足させる場、知の拠点づくりをして、我々みんなで支えていくことが必要ではないでしょうか。ひとつの例ですが、糸島に「懐庵」という数学道場があります。東大の数学科を出た森田真生さんが主催で、いろんなジャンルの日本のトップレベルの方々と交流しています。このような知的でわくわくする場所を大学も含め、つくっていくことが、25年後を見据えたアクションプランになると思います。



**加藤** 大人にできることはいっぱいあります。福岡は夢を叶えられる最高の場所だと思います。

#### ◎質疑応答

**質問** 「アジア太平洋こども会議」は日本のなかでも素晴らしい事業だと思います。卒業生が手を取りあって組織化することは考えていらっしゃいますか。

**栗栖** こども会議がなぜ交流しているかと言いますと、こども同士が交流することで友情が芽生え、大人同士の友情が芽生え、そして国同士の友情が芽生えるということです。20周年にブリッジクラブ・

インターナショナル・オーガナイゼーションという、卒業生の集まりであるブリッジクラブが 25 か国に出来ました。今、フェイスブックで 1,000 人くらいのメンバーが常に情報交換しています。いまは 25 周年の節目に大同窓会をやるかと話しています。

**質問** 「日本の次世代リーダー養成塾」で出会った、今まで会ったことのない刺激を受けたのはどんな子でしたか。それと普段出会わない人たちとともに過ごすことで、どのように変わりましたか。

**古池** 留学生や海外から来ている参加者でした。海外との教育制度の違いに驚きました。例えば英語教育や発言力について、同じ日本人であってもこんなに違うのかと感じました。何が変わったかという、学校での見方を気にしなくてよかったり、人の意見を聞いて考えるようになった点です。

**三船** 3 期はアジア圏の留学生も参加していて、総勢 180 名でした。留学生と交流した点が大きかったです。国によって個性があって、なかでも韓国の方は自己主張が強くて、芯をもって話しているように感じました。自分の意見をしっかり言うということの大切さを学びました。自分が変わったこととしては、それまでは海外にばかり目を向けていたけれど、住んでいるまちについていかに無知であったかを気づかされました。それ以降は、日本のことや自分の地域について学ぶようになりました。

**質問** 福岡市は外国人の採用の受け皿は多いですか。

**庄** 福岡市は他の都市に比べて少ないと思います。私は修士課程の 1 年ですが、2 年生は東京や大阪に行かないと就職活動はうまくいかないと言っています。

**楊** 私は博士課程なので就職はまだ考えていません。チャンスはあると思いますが、福岡は他の県に比べてメリットは小さいと思います。

**質問** 平均的な若い人をやる気にさせるためには。

**中垣** 一番頭の痛いところです。子どもの探究心をどう刺激するかだと思います。自然体験や子どもたちが好きなことをディスカッションして考えてみるキャリア教育の場など、とにかく体験する場を作ってあげることが大事だと思います。

**古池** 私も学校では前に出て意見をどんどん言うわけではありません。静かにしている子でも自分の意見はもっているの、みんなでサポートしてその子の良いところが出るように心がけています。

**栗栖** ここにいらっしやる夢をもった方と違う子も多くいます。いかに環境をつくってあげて、大人がポンと背中を押してあげられるかということだと思います。

**質問** 留学生が福岡に住みたいと思うために足りない点はなんだと思いますか。

**楊** 教育の面では問題ないと思いますが、大学の寮は半年しか入れませんので、半年後民間の賃貸アパートに住まなければなりません。しかし、保証人の問題があって思うようになりませんので、制度が変わることで福岡市を選択する可能性が高くなるのではないのでしょうか。

**質問** 郷土愛、愛着を深めるには何が必要だと思いますか。

**三船** 福岡に残りたい学生は多いけれど、地元の企業で就職できる会社が少ないので東京、大阪に出て行かざるを得ないと思っている学生が多数いる。中小企業を含めて若い人に対しての雇用問題の改善や彼らを見守る雰囲気づくりが必要だと思います。

**中垣** 中小企業は優秀な学生を採用したいと思っていますが、就職情報サイトに掲載するには 200 万円くらい費用がかかります。そんな費用は中小企業では難しい。インターシップを活用することを含めて、地元の社長さんが直接学生と話が出来る場づくり、地域社会に貢献しているトップのビジョンを自ら語る場が必要だと思います。

**栗栖** 中小企業はいい人材を採用したいと思っていますので、不景気するときこそチャンスに捉える経営者は多いのではないのでしょうか。インターシップや職場体験の活用がもっと活発になれば、新たな雇用につながるのではないのでしょうか。

**質問** 教育機関以外に必要なこと、福岡の魅力を上げるポイントはなんだと思われますか。

**栗栖** 国際交流都市、福岡では英語力を上げることをまちぐるみできればと思います。韓国の英語村のようなものが福岡市にあれば素晴らしいと思います。民と官で力を合わせていくことが大事だと思います。

**中垣** 九州、福岡という視点で連携を誰がどのように担っていくかがキーポイントだと思います。大学・学校—企業—行政の連携により、知の拠点づくりを頑張らなければなりません。



**加藤** アジアの交差点の話をしてしましたが、英語は、単語や文法を憶えなければならないなど学校でやらねば感があります。インターネットカフェがあるように英語カフェみたいなものが天神にできたらいいかもしれないですね。日本人だけではうまくいかないと思いますので、留学生も一緒になって、日本語をしゃべったら罰金十円などと楽しんでやればいいですね。

私は博多駅の名物おまわりさんのことを知らなかったのですが、みんながそのおまわりさんみたいになればいいと思います。中国や韓国の方だけでなく、ノルウェーやバングラディッシュの方など、いろんな国の人たちが「また福岡に行きたい」、「ここに来て良かった」と思えることをおもてなしの心で一人ひとりがやってあげればいいと思います。

「ひとりでやって何が出来る」と思うかもしれませんが、リーダー養成塾で最後に言っていることがあります。「これは始まりできっかけである。ここから1人ひとりがどう変わるか。」ポジティブ思考でこれも出来る、あれも出来るとネアカ人間倍増計画でやっていけたら、福岡は次世代に向けて明るいまちになれると思います。

### 3. 資料

#### (1) パネリスト・コーディネーターのプロフィール

##### 第1部

古池 梨紗 氏 (福岡雙葉学園高等学校2年生)

庄 善勇 氏 (九州大学大学院修士課程4年)

三船 正士 氏 (書家、九州大学21世紀プログラム課程)

楊 帆 氏 (九州大学大学院博士課程)

加藤 暁子 氏 ※第2部参照

##### 第2部

栗栖 慎治 氏 (NPO アジア太平洋子ども会議・イン福岡専務理事)

1963年福岡生まれ。87年専修大学卒業、86年ベビー用品のニシキ株式会社入社。98年に同代表取締役就任。30歳の時に福岡青年会議所仮入会時、子ども会議の福岡ドームでのイベントで着ぐるみを着て参加したのがきっかけ。2009年よりNPO アジア太平洋子ども会議・イン福岡専務理事に就任。

中垣 量文 氏 (㈱全教研 常務取締役管理本部長)

1956年生まれ。大学卒業後、10年間メーカーに勤務。その後株式会社全教研へ入社。現在常務取締役管理本部長。2004年より関連会社の株式会社インフィニットマインドの代表取締役を兼任し、社会人や企業向け教育も実施。

加藤 暁子 氏 (「日本の次世代リーダー養成塾」事務局長)

1959年東京生まれ。大学時代、原爆の事実を米国に伝え、米国の高校生を日本に受け入れるボランティア活動に多くの時間を費やす。毎日新聞に入社し福岡に配属。娘を出産した後、東京本社に転勤。96年初の子連れ特派員として香港へ。アジア全域の経済を担当。2001年に榊原英資・

慶大教授に師事し、慶大研究員、早大学公共政策研究所客員研究員などを経て、日本の次世代リーダー養成塾事務局長。

(2) 配布資料

新VISION  
アジアのリーダー都市  
ふくおか!プロジェクト

アジアのリーダー都市  
 ふくおか!プロジェクト

第10回 フォーラム

**日時** 2011年8月27日(土)  
 開場 13:30 開演 14:00 (16:30 終了予定)

**会場** 福岡ビル9階大ホール  
 (福岡市中央区天神1-11-17)

内容

14:00 **開会**  
**データで語る福岡の今・未来**  
山下 永子 氏 (財)福岡アジア都市研究所専門研究員

---

14:20 **トークセッション**

**テーマ 第1部 25年後の福岡を語る**

■**ゲスト** 古池 梨紗 氏 (福岡雙葉高等学校2年生)  
 庄 善勇 氏 (九州大学大学院修士課程)  
 三船 正士 氏 (書家、九州大学21世紀プログラム課程4年)  
 楊 帆 氏 (九州大学大学院博士課程)

■**コーディネーター** 加藤 暁子 氏 (「日本の次世代リーダー養成塾」事務局長)

**テーマ 第2部 次世代の育成**

■**ゲスト** 栗栖 慎治 氏 (NPOアジア太平洋こども会議・イン福岡専務理事)  
 中垣 量文 氏 (㈱全教研 常務取締役管理本部長)

■**コーディネーター** 加藤 暁子 氏  
兼ゲスト

16:30 **閉会**

主催：福岡市

第2部 トークセッション出演者プロフィール



ゲスト

栗栖 慎治 氏

NPO アジア太平洋こども会議  
・イン福岡専務理事

1963年福岡生まれ。87年専修大学卒業。88年パピー用品のニシキ株式会社入社。98年に同代表取締役就任。30歳の時に福岡青年会議所会入会時、こども会議の福岡チームでのイベントで着るみを着て参加したのがきっかけ。2009年よりNPO アジア太平洋こども会議・イン福岡専務理事に就任。



ゲスト

中垣 量文 氏

株式会社全教研  
常務取締役管理本部長

1956年生まれ。大学卒業後、10年間メーカー勤務。その後株式会社全教研へ入社。現在常務取締役管理本部長。2004年より関連会社の株式会社インフィニットマインドの代表取締役を兼任し、社会人や企業向け教育も実施。



ゲスト兼  
コーディネーター

加藤 暁子 氏

「日本の次世代リーダー養成塾」  
事務局長

1959年東京生まれ。大学時代、原爆の事実を米国に伝える。米国の高校生を日本に受け入れるボランティア活動に多くの時間を費やす。毎日新聞に入社し福岡に配属。娘を出産した後、東京本社に転勤。96年初の子連れ特派員として香港へ。アジア全域の経済を担当。2001年に柳原英典・慶大教授に師事し、慶大研究員、早大学公共政策研究所客員研究員などを経て、日本の次世代リーダー養成塾事務局長。

## 1. 概要

- ▽タイトル 「人が集い、躍動する都市を目指して」
- ▽日時 10月30日(日) 14時00分開会/16時30分閉会
- ▽会場 福岡市役所 15階講堂
- ▽内容
1. 市長挨拶
  2. 「25年後のふくおか」提言論文表彰式
  3. 基調講演：日本「再創造」～「プラチナ社会」実現に向けて～  
講師：小宮山宏氏（㈱三菱総合研究所理事長、東京大学総長顧問）
  4. パネルディスカッション「人が集い、躍動する都市を目指して」
- ▽パネリスト 小宮山 宏 氏  
鍋山 徹 氏（㈱日本政策投資銀行産業調査部チーフエコノミスト）  
野田 順康 氏（国連ハビタット福岡本部 本部長）  
中村 文香 氏（九州大学経済学部4年）
- ▽コーディネーター 大久保 昭彦 氏（西日本新聞社 都市圏総局長）

## 2. 提言内容、会場の様子

25年後の福岡市の新たなビジョンについて有識者らが意見を交わす「アジアのリーダー都市ふくおか！プロジェクト」リレーフォーラムが10月30日、同市役所講堂で開かれた。同市主催で6月からスタートしたフォーラムの11回目で、これが最終回。高島宗一郎・福岡市長のあいさつに続き、三菱総合研究所理事長で東京大学総長顧問の小宮山宏氏が「日本『再創造』～「プラチナ社会」実現に向けて」と題して基調講演。パネルディスカッションでは、4人のパネラーが「人が集い、躍動する都市を目指して」をテーマに熱く語り合った。コーディネーターは西日本新聞社の大久保昭彦都市圏総局長。

## ◎高島福岡市長の冒頭挨拶

「人、環境、都市が調和したまちをアジアへ発信」



私は福岡市を「アジアのリーダー都市」にしたい。リーダー都市には、経済的な豊かさを目指すだけでなく新しい価値観への挑戦が必要だ。すばらしい自然環境を育み、子どもや高齢者を政策でしっかり包み込むことで、市民の「生活の質」を高めることをより大切にしたい。福岡市は人と環境と都市の調和が取れたまちを体現し、その姿をアジアに発信できる。福岡市の特性や今後の可能性を考えた新しいビジョンを皆さんと共有していきたい。

## ◎「25年後のふくおか」提言論文表彰式

／高島福岡市長より、受賞者を代表し、優秀賞受賞の古舘美紀さんに賞状ならびに副賞を授与



## 第1部：基調講演「日本『再創造』～「プラチナ社会」実現に向けて」

### 課題解決の新モデルを世界に提案へ

三菱総合研究所理事長、東京大学総長顧問・小宮山宏氏



私が福岡市に提案したいのは、「プラチナ社会」をつくろうということ。プラチナ社会とは、地球温暖化と高齢化の二つの問題を解決することにより、もう一つの課題である「需要不足と雇用問題」を同時に解決するポスト工業社会のモデルだ。

日本ではほとんどの人が家やテレビを持ち、2人で1台の車を持っている。先進国では21世紀前半に、人が必要とするものの多くを持つ「人工物の飽和」に達し、需要不足に陥る一。これが、先進国を襲っている経済的苦悩の本質的な原因だろう。

そのことは、日本の経済史を振り返ると分かる。戦後、白物景気が起き、砂糖、セメント、肥料という白い粉が飛ぶように売れた。三種の神器（白黒テレビ、洗濯機、冷蔵庫）、後に新三種の神器（車、クーラー、カラーテレビ）を国民がこぞって買ったから産業が伸び、生活も豊かになって高度成長を果たした。

日本が今も強みを発揮する自動車、コンピューターなどの産業でアジアを中心に展開をするのは重要。だが、アジアが世界経済を引っ張る時期は、そう長くない。25年後の将来像を描くのに、今のモデルでは進めない。

一方、高齢社会では、過疎地でのきずなをどう保つか、医療の提供が十分行えるかなど課題は山積。しかし、世界の先進国は確実に高齢化する。日本は高齢化をネガティブにとらえず、この課題を解決してアジア、世界に新しいモデルを提供し、同時に日本も強くなるろう。

また、温暖化の主原因の二酸化炭素排出問題で、日本は“乾いた雑巾”で絞れない（減らせない）と言われている。製造業など「ものづくり」では、エネルギー効率がほぼ世界一なので減らすのは困難だが、家庭、オフィスなどの「くらし」では減らせる。エネルギー消費の少ない家電への買い替え、断熱性の高い二重ガラスの住宅への採用などで、8割減は可能だ。

25年後の福岡市を議論するのに、役立つモデルはない。だから将来像は「どうなるか」でなく「どうするか」という姿勢に懸かっている。

## ◎第2部：パネルディスカッション「人が集い、躍動する都市を目指して」

### 戦略練り魅力的な都市の実現を

「福岡の個性」のアピールが重要 鍋山氏  
福岡は「日本の第2エンジン」に 野田氏  
「母国への貢献」サポートを 中村氏  
周辺地域を活用する知恵も必要 小宮山氏

(文中敬称略)

### ■「市民幸福度90%」の現状

—「25後の福岡市を私たちがつくるために、どういう都市を目指すか」という今日のテーマを考える前に、各パネラーはいまの福岡をどんな都市と感じているか。

鍋山 福岡都市圏（9市8町）の産業別総生産額を2000年—07年で比較すると、小売・卸売の減少

が目につく。東京の企業の支店縮小などの影響で卸売が減っていて、これからの福岡を考えるときのマイナス材料だ。一方、福岡市のG R P（域内総生産）の08年から15年までの伸び率は1.7%と予測されている。これを上積みするには、産業構造の中身を変えていく必要がある。



**野田** 福岡は、いろんな機能を吸引するブラックホールと化した東京から千<sup>キ</sup>も離れているため直接的な影響を受けにくく、「日本の第2エンジン」になる、と私は考えている。空港へのアクセスタイムを含めた福岡市の3時間アクセス人口は8千万人で、これは東京の4倍。福岡市が持つ商圏はかなり大きい。また、市民幸福度は90%で、英の雑誌「モノクル」で住みやすい都市ランキングに必ず挙がり、居住性の高さは世界のトップ10に近いのでは。居住性、利便性が高い都市には「クリエイティブクラス」と呼ばれる知識層が集まるとされており、福岡市は「創造都市」としても伸びていけるだろう。

**中村** 私が生まれ育った福岡市は、街のコンパクトさが最大の利点で、行動に移すことや仲間との直接コミュニケーションがしやすいのがいい。

**小宮山** 福岡市民の90%が満足しているということは、逆に言えば油断して将来が危ないのでは、と懸念してしまう。



#### ■25年後の人口は160万人？

一次に、25年後の2036年の福岡市について、人口構成や規模などを手掛かりに考えるとどうか。

**鍋山** 国立社会保障・人口問題研究所の推計によると、2010年の福岡都市圏の人口は238万人でそろそろピークを迎える。10年後も増えてはいるが、九州の他地域の人口を吸収するという良くない増え方だ。従って、人口増に伴って福岡都市圏に吹いていた経済的な追い風は、変わり目になりつつあると理解してほしい。これからは福岡市が都市としての個性をつくり自立することが根本の根本。

**野田** 古巣の国土庁では国土計画を作っていたので、人口推計は自分でかなり行ってきた。福岡市は00年から10年にかけて、5年ごとに6万人ずつ伸びている。単純にトレンド推計すると2020年には158万人になる。25年後の人口は160万人とみて都市設計をする必要がある、と私は考えている。



**小宮山** 世界的に見て、一極集中的な都市化は放っておいても進む。その点、ドイツや北欧は大都市の周りに小都市をバランスよく配置できている。求心力のある福岡市がアジアを取り込み強くなるのはいいが、国土の狭い日本だから、周辺地域をうまく使って成長する知恵が必要ではないか。

**中村** 海外に近い福岡市にしかできない取り組みが、何かないだろうか。海外と個人あるいは企業・団体とで発展していく余地が、まだまだあると考えている。

#### ■外国人比率を上げ多様化を

—25年後の福岡市ではアジアとの関係が今以上に深くなり、市民生活に占めるウエートももっと大きくなるだろう。福岡市の国際化について、野田さんはどう考えるか。

**野田** 中世までの博多のまちは、<sup>こうろかん</sup>鴻臚館貿易、日宋・日明貿易で商人たちが遠くは東南アジアへ出掛けるなど、外向きの猛烈なエネルギーで成長を続けた。だが、戦国時代の戦禍や江戸時代の鎖国政策以

降、エネルギーは内向きへ転換している。これから日本の市場が縮んでいく中、福岡の人たちはかつての国際都市・博多のDNAを思い出し、外向きのエネルギーを復活させてほしい。

具体的なアジア戦略の、第一は社会の多様化の推進。福岡市の在住外国人比率はわずか 1.7%しかない。外国人が住みやすい都市は、多様性を受け入れるまち。特に留学生は毎年9千人が福岡市に滞留しているのに、福岡の労働市場で雇用されているのは250人ほどで、残りは東京での就職や母国への帰国。クリエイティブクラスの卵である留学生の人材育成・活用は強化すべきだ。第二にアジアの交流拠点へ向けた整備が必要。観光振興はもちろんだが、福岡市は国際コンベンションシティとしてコスト、周辺の自然環境の面から競争力がずばぬけて高い。国際会議誘致の営業能力を鍛えれば実績は確実に伸びる。

アジアの人口は今後、10億人は増える。続々と生まれて成長する100万都市には、福岡市のいいところを学んでももらいたいと思っている。

—中村さんはアジアと個人的に関わっているそうだが。

**中村** 私はバングラデシュで知り合った女性と一緒に、現地の貧しい人たちが作っているかばんを福岡のカフェやホームページで販売し、かばんの機能改善を支えるプロジェクトに取り組んでいる。福岡から帰国する留学生の多くは「母国のために何か貢献したい」との思いを持っており、その思いをサポートする仕組みやビジネスがあればいいと感じる。



**鍋山** 福岡市にとって「アジア太平洋子ども会議・イン福岡」は大事な財産。イベント参加者へのフォローアップ、交流を継続することが、福岡市の多様化につながるのではないかと。

■人を受け入れる「果肉」を持つまち

—福岡市が都市としての魅力を増し、国内外を問わずさらに人が集まるようにするには、どうすればよいか。また、これまでの議論で感じたことを一言ずつどうぞ。



**野田** 私は福岡を「梅干し社会」とみている。山笠が象徴するコアの部分は硬くてなかなか入れないが、外側の果肉ではどんどん人を受け入れる、そこが重要だ。皆さんが「日本の第二エンジン」を自覚し、民間の方々には本気で国際ビジネスに取り組んでももらいたい。

**鍋山** 福岡の果肉がおいしいという情報を、東京やアジアに対して十分発信できていないのでは。福岡出身の芸能人などをメッセンジャーとして立てるなど、福岡の個性アピールを戦略的に行ってほしい。福岡市の成長戦略で有益なのは、アクション(A)、受け身でなく自ら突破し運をつかむブレイクス(B)、コミュニケーション(C)だ。

**中村** 私を含め、友人の多くは東京や関西で就職する。でも、自然環境の良さが保たれ、アジアと結びつくビジネスチャンスが豊富であれば、将来、転勤や転職で福岡を選びたいと思う人が増えるのではないかと。私もいずれ福岡に帰り、アジア進出を考える中小企業をサポートする起業をしたい。

**小宮山** 私のきょうの結論は「動け！ 福岡」だ。

—福岡市が年末にかけてまとめる市の将来ビジョンを基にみんなで一緒に動き、もし動きが鈍ければ市のお尻をたたいて動かすことも必要かもしれない。

### 3. 資料

#### (1) パネリスト・コーディネーターのプロフィール

小宮山 宏 氏 (㈱三菱総合研究所理事長、東京大学総長顧問)

1972年東京大学大学院工学系研究科博士課程修了後、2005年4月に28代総長に就任。2009年3月に退任後、同年4月三菱総合研究所理事長、東京大学総長顧問に就任。著書に「『課題先進国』日本(中央公論新社)」、「低炭素社会(幻冬舎)」、「日本『再創造』」(東洋経済新報社 2011年)など多数。

鍋山 徹 氏 (㈱日本政策投資銀行産業調査部チーフエコノミスト)

福岡県北九州市生まれ。1982年早稲田大学法学部卒業後、日本開発銀行(日本政策投資銀行の前身)に入社。米国スタンフォード大学国際政策研究所客員研究員、日本政策投資銀行九州支店企画調査課長などを経て、2011年6月より現職。

野田 順康 氏 (国連ハビタット福岡本部 本部長)

九州大学大学院博士課程修了。博士(人間環境学)。国土庁(現国土交通省)入庁、1983年国連人間居住センター(ハビタット:ケニア)居住専門官、1989年国連人道問題局(スイス)専門官(湾岸危機担当等)、2001年内閣府参事官、2004年国土交通省国土総合計画課長などを歴任し、2006年9月より現職。

中村 文香 氏 (九州大学経済学部4年)

九州大学経済学部4年。大学入学後、K-styleを結成。家庭教師業を軸に、高校生と学生をつなぐ場を提供。また、アジア各国で茶道や共同生活を体験。バングラデシュ人とブランド「Fluffy」を設立するに至る。昨年「ふくおかで学ぼう」に携わり、自身の体験・価値観を語ることが多くの人の原動力となっている。

大久保 昭彦 氏 (西日本新聞社 都市圏総局長)

1961年、熊本市生まれ。88年、西日本新聞入社。政治行政分野の取材が長く、主に福岡市政、福岡県政を担当。小泉政権時代は東京報道部で自民党、民主党を担当した。報道センターデスクを経て今年6月より現職。

#### (2) Ustream (ユーストリーム) での動画配信について

第11回フォーラムでは、動画共有サービスのUstream(ユーストリーム)を通して、フォーラムの様子を会場外でも視聴できる環境を整えた。

動画配信中の視聴数は、概ね10~20人程度となった。



(2) 配布資料

MEMO

---



---



---



---



---



---



---



---



---



---



---



---



---



---



---



---



---



---



---



---



---



---



～人が集い、躍動する都市を目指して～

日時 **2011年 10月 30日(日)**  
開場13:30 開演14:00(16:30終了予定)

会場 **福岡市役所・15階講堂**  
(福岡市中央区天神1-8-1)

主催：福岡市

内 容

◆ **市長挨拶** 高島 宗一郎 (福岡市長)

◆ **「25年後のぶくおか」提言論文表彰式**

◆ **基調講演**  
**日本「再創造」～「プラチナ社会」実現に向けて～**  
【講師】  
 小宮山 宏氏 (㈱三菱総合研究所理事長、東京大学総長顧問)

◆ **パネルディスカッション**  
**「人が集い、躍動する都市を目指して」**

パネリスト

小宮山 宏氏 (㈱三菱総合研究所理事長、東京大学総長顧問)  
 鍋山 徹氏 (㈱日本政策投資銀行産業調査部チーフエコノミスト)  
 野田 順康氏 (国連ハビタット福岡本部 本部長)  
 中村 文香氏 (九州大学経済学部4年)

コーディネーター

大久保昭彦氏 (西日本新聞社 都市圏総局長)

プロフィール



【基調講演講師】  
パネリスト】

こみやま ひろし  
**小宮山 宏氏**

1972年東京大学大学院工学系研究科博士課程修了後、2005年4月に28代総長に就任。2009年3月に退任後、同年4月三菱総合研究所理事長、東京大学総長顧問に就任。著書に「課題先進国」日本(中央公論新社)、「常設社会(幼学舎)」、「日本「再創造」」(東洋経済新報社 2011年)など多数。



【パネリスト】

なへやま とおる  
**鍋山 徹氏**

福岡県北九州市生まれ。1982年早稲田大学法学部卒業後、日本開発銀行(日本政策投資銀行の前身)に入社。米国スタンフォード大学国際政策研究所客員研究員、日本政策投資銀行九州支店企画調査課長などを経て、2011年6月より現職。



【パネリスト】

のだ としやす  
**野田 順康氏**

九州大学大学院博士課程修了。博士(人間環境学)。国土庁(現国土交通省)入庁。1983年国連人間居住センター(ハビタット:ケニア)居住専門官。1989年国連人道開発局(スイス)専門官(海岸危機担当等)。2001年内閣府参事官。2004年国土交通省国土総合計画課長などを歴任し、2006年9月より現職。



【パネリスト】

なかむら ぶんか  
**中村 文香氏**

九州大学経済学部4年。福岡県生まれ。家庭教師業を軸に高校生と大学生をつなぐ場を提供するK-styleの代表。また、旅を通してアジア各国の人々と交流し、パンフレット「Fluffy」を設立した。昨年からは、自身の体験や価値観を多くの高校生や大学生へ伝える場に参加し、学外での活動の幅を広げている。



【コーディネーター】

おおくほ ありひこ  
**大久保 昭彦氏**

1961年、熊本生まれ。88年、西日本新聞入社。政治分野の取材が長く、主に福岡市政、福岡県政を担当。小泉政権時代は東京報道部で自民党、民主党を担当した。報道センターデスクを経て今年6月より現職。